
奇術師の予言

七夕夜想曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇術師の予言

【Nコード】

N5849C

【作者名】

七夕夜想曲

【あらすじ】

深夜、屋上で佇んでいた蘭の前にキッドが現れる。キッドの予言とは？ 新一の幼き日の記憶。その時の幼きマジシャンと十年越しに再会を果たす。APT-Xの真実。時を察した哀はその真相をコナンに語る。そして捜査の合間に見え隠れする謎の人物。「いったい誰なんだ？」・・・様々な謎が渦巻く中、コナンは平次、快斗と共に組織壊滅に向けて動き出す。カップリングは新蘭平和快青です。

プロローグ

深夜0時。

真夜中にもかかわらず、毛利探偵事務所の屋上には一人の少女が立っていた。

「月か・・・」

空を見上げてその少女はつぶやいた。

視線の先には、きれいな満月が出ている。

「・・・新一・・・」

少し前の彼との再会を思い出し、今度は俯いてつぶやいた。

片手には携帯電話が握られている。

その少女、毛利蘭は携帯電話を片時も離すことがない。

彼がいつ電話をしてきても、その声が聞けるように。

そしてこんな眠れない夜は、より一層彼の声が聞きたくなる。

(新一・・・)

気づいたときには涙を流していた。

「美しいお顔に涙は似合いませんよ。」

「・・・えっ？」

蘭は振り向いた。

「怪盗キッド・・・」

キッドは蘭に近づいてこう言った。

「あなたにお似合いなのは、輝くような笑顔です。彼もきっとそれを望んでいますよ。」

ポンッ

軽い破裂音と共にキッドの手に薔薇が現れた。

「・・・うん、そうだね。」

涙を拭いて、薔薇を受け取りながら蘭は言った。

（なんでだろ？この人は犯罪者のはずなのに憎む気がしない・・・
むしろ信頼できる・・・）

「仕事の帰り？」

「いえ、今から行くところですよ。」

「・・・予告状出してたっけ？」

「今日は、予告状が必要ない仕事です。」

キッドはそう言つと時計に目を落とした。

「では、またお会いいたしましょう。それから・・・」

マントがハンググライダーに変わる。

「彼が帰ってきますよ。」

「えっ！」

「一ヶ月以内にね。マジシャンの予言です。」

そう言つて飛び立っていった。

「・・・信じるよ・・・」

そうつぶやくと、薔薇をもって部屋に戻っていった。

「ほっとけねーんだよ。あの顔で泣かれると。」

しかし、帰って来たのは『彼』一人だけではなかった………

プロローグ（後書き）

はじめまして。未熟者ですがよろしく願います。

第一話 幼き日の出会い

「新ちゃん、置いていくわよ!」

「ん?あとすこし・・・」

六歳になる息子を前に、母親である有希子は頭を抱えていた。約束している時間より早くマジックショーの会場に着いた為に、近くの本屋に入ったが最後、

息子の新一は推理小説を手に取り、てこでも動かなくなってしまった。

「これで五回目よ!そのセリフ!」

「ショーの開演が午後三時で、今は一時半だからまだいいだろう?」

新一は時計を見ながら言った。

「言ったでしょ!そのショーのマジシャンが、母さんの知り合いだから挨拶にいくのよ!」

「まあ、待て有希子。」

優作が横から会話に割り込んだ。

「新一、会場に一人で行けるか?」

「あたりまえだろ!横断歩道を何個か渡ればいいだけなんだから。」なおも本に目を向けながら新一は言った。

「そういうことだ有希子。私たちだけで先に行こう。」

「で、でも優作・・・」

「じゃあ新一、二時半は会場の入り口にいるんだぞ。」

「わかったよ・・・」

両親二人は会場に向かった。

二人が会場に行って三十分ほど経ったとき・・・

「これおめえのじゃねーか?」

新一は自分と同じぐらいの年齢の少年に話しかけられた。

「えっ？あつ、ありがとう。」

そう言つて渡されたチケットを受け取った。

いつの間にかポケットから落ちてしまったらしい。

「そのマジックショー見に行くのか？」

「うん、そうだけど。」

そう答えた途端、新一はその少年に腕を引っ張られた。

「そのショーの前に俺がマジック見せてやるよ」

新一は近くの公園に連れて来られた。

「ここで？」

マジックはステージでやるものと思っている新一が聞いた。

「まあ見てろつて。・・・ワン・ツー・スリー！」

そう言うだけでその小さなマジシャンはいろいろな物を出現させた。
ハト、花、紙吹雪・・・

そのほかにカードやコインなど、いろいろなマジックを見せてくれた。

間近で見るマジックに、新一は夢中になり、あつという間に約束の時間になった。

「そろそろ行かないと。」

「そつか。これやるよ！」

ポンツと軽い破裂音と共に、小さなマジシャンの手に薔薇が現れた。
「きつとそのマジックショーは、今の俺のマジックよりずっとすごいよ。」

でもいつか俺も舞台に立つて、そのマジックショーよりもっとすごいマジックをやるんだ！」

「お前なら絶対できるよ。俺、工藤新一。おまえは？」

「俺のなまえは・・・」

「こらー！江戸川君起きなさい！」

「ふにゃ？」

コナンは目を覚ました。

「今は授業中です！分かりましたか！」

「は、はい先生……」

しかしコナンはさっきの夢のことをまだ考えていた。

（そういや昔あんなこともあったな……あの時行ったのは確か、黒羽盗一のマジックショーだったよな……

あいつの名前……えーっとなんだっけ？）

「あれだけ派手に寝ておいて、まだ寝足りないの？」

帰り道、哀は欠伸をしているコナンに向かって言った。

「しゃーねーだろ昨日は本読んで、ほとんど徹夜なんだから……あーくそっ！どうしても思い出せねー」

「何を？」

コナンはさっき見た夢の話をした。

それが過去の実話だと言うことも。

「……それで、その小さなマジシャンの名前を聞く寸前で起こされたって訳ね」

「ああ、どうしても思い出せねーんだよ……」

「……人間は死ぬ前にやたらと過去の夢を見るっていうわよ。」

「おい、おめーな、縁起でもねーこというなよ。」

哀はフツと笑うと前を歩いている三人に加わった。

第一話 幼き日の出会い（後書き）

次回まで間が空くかもしれませんがご了承下さい。

今後もし『奇術師の予言』をどうぞよろしく願っています。

第二話 依頼人

「ふう・・・」

鍵の掛かった毛利探偵事務所の前でため息をつく一人の少女がいた。

「あつ、蘭ねーちゃんお帰り！」

「えっ？」

その少女は驚いてコナンをまじまじと見た。

（蘭ねーちゃん？それにこの子どこかで・・・あっ！）

「坊や、江戸川コナン君でしょ？お父さんがいつも褒めてるよ。」

キッドキラー』って」

「えっ？」

今度はコナンが驚く番だった。

「私、中森青子。お父さんはキッド専任の警部の中森銀三よ。」

「あ、中森警部の娘さん。」

（それにしても蘭にそっくりだな・・・違うのは、セーラー服って事と、髪型ってとこか？）

「それで青子ねーちゃん。小五郎のおじさんに用事？」

「うん。ちよつと探してもらいたい人がいるんだけど・・・」

青子の笑顔が急に曇った。

「おじさんは出張で明日までいないよ。」

「えっ！？毛利探偵いないの？・・・どうしよう・・・」

「あつ、コナン君おかえり。」

「蘭ねーちゃん、おかえり。お客さんだよ。」

今度は本物の蘭が帰ってきた。

「・・・あなたどこかで見たような・・・」

蘭が青子を見ていった。

「うん。蘭さんだっけ？だれかに似てるような・・・」

青子もそう言ったときり考え込んでしまった。

（ハハハ、二人共がお互いに似てんだよ・・・）

「・・・へえ、私と同年なんだ。『青子ちゃん』って読んでいい？」

「うん。青子も『蘭ちゃん』って読んでいい？」

場所は喫茶店ポアロ。

小五郎が事務所の鍵を持っていつてしまっていたので、やむを得ずそこで話をするようになった。

（・・・打ち解けるの早いな・・・）

横でアイスコーヒーを飲みながらコナンは思った。

思えば和葉の時も『平次の浮気疑惑』が解けた途端、二人は意気投合していた。

「それで青子ちゃん、お父さんに何の依頼？」

その話になった途端、青子の笑顔が曇った。

「・・・人捜しをお願いしたいの・・・」

そう言つと一枚の写真を取りだした。

「名前は黒羽快斗。青子の幼なじみで、江古田高校二年生。」

「・・・」

蘭は食い入るように写真を見つめている。

「蘭ちゃん、どうかした？」

「あつ、ごめん。私の幼なじみにそっくりだったから。」

蘭は慌てて笑顔を取り繕った。

「いつから行方不明なの？」

「三日前の夜から。家にも誰もいないし、学校にも来てないの。」

蘭には青子の今の気持ちが良く分かった。

自分だって新一を待っている身なのだ。

青子の不安な気持ちはよく分かる。

「ねえ、この人ってマジックするんじゃない？」

「えっ！」

いつの間にかコナンが写真を持っていた。

「うん。快斗はマジックが得意だけど・・・どうしてわかったの？」

青子は驚いて聞いた。

「簡単だよ。この快斗って人が写真の中で手に持ってるトランプは『バイスクル』って言って、

世界中のマジシャンが使ってるトランプなんだ。このトランプは普通のトランプに比べて少し高いんだけど、

その高いトランプが写真のテーブルに三個も積んであるってことは、この快斗って人もマジックするんじゃないかと思って。」

コナンの知識に蘭も青子も唖然とした。

「さすが『キッドキラ』の小学生ね・・・」

「こういう所は新一にそっくりなんだから・・・」

（悪かったな・・・それより・・・）

どこかで見たような気がするんだよな。

いや見ただけじゃない実際に会ったような気がする。

そして・・・

（なんで懐かしい気がするんだ？）

「・・・えっ！蘭ちゃんの幼なじみって、あの有名な高校生探偵の工藤新一なの？」

「うん。でも私に言わせれば推理小説のためなら、徹夜でもなんでもする『大馬鹿推理之助』だけだね。」

「あー、青子も分かる。快斗もマジックのネタのためならなんでもする、『マジックおたく』だもん。」

すっかり打ち解けた二人は互いの幼なじみの愚痴をこぼしあっている。

（お前らなあ・・・）

「・・・その辺にしとけよ。」

「「えっ！」」

気が付くと三人のテーブルの傍に、一人の高校生が立っていた。

「か、快斗！」

青子が大声をあげた。

第二話 依頼人（後書き）

時間が分かりにくいですが、蘭がキッドに会ってから三日後、コナンの夢の直後の話です。

少々辛口でも構いませんのでご意見・ご感想をお寄せください。
今後『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第三話 マジックショー

「この、バ快斗ー！どこ行つてたのよ！心配したんだから！」
再び青子の大声が店内に響き渡る。

それに圧倒されて、快斗は小さくなっている。

いや、青子が大きく見えるだけか。

「・・・たく、うつせなー。言わなかったか？岐阜の有名なマジシャンに会いに行くつて。」

「全つつつ然、聞いてないんですけど！」

「あーそーですか。まあ、お前はアホ子だから、聞こえてなくてもしょうがねーけど。」

「なんですつて！」

たちまち夫婦漫才が始まった。

（なんか、大阪の二人組みみたいだな・・・）

コナンは、毎度のように夫婦漫才を繰り広げる平次と和葉を思い浮かべていた。

といつても、蘭と新一もしょっちゅう小競り合いをしていたのだが・・・

（ほんと新一にそっくりね・・・違ふのは、学生服って事と髪型かな？）

けんかするほど仲が良い。

蘭の快斗に対する第一印象も、コナンの青子に対する第一印象も、似たり寄ったりだった。

「・・・まったく、マジシャンに会うために岐阜まで飛んで行って、三日間も音沙汰なしなんてバツカみたい・・・」

「悪かったって、そんなにグズるなよ。」

「この『マジックおたく』・・・」

コナンと快斗が向かい合い、蘭と青子が向かい合う形で座っている。青子はまだ怒りがおさまらないのか、ぶつぶつ文句を言っている。

「ほら、土産やるから機嫌直せって。」

そう言っただけで快斗は、五百円玉よりひとまわりぐらい大きい、外国の銅貨を三枚取り出した。

「・・・なんで、岐阜のお土産が銅貨なのよ。」

「いいから、両手出せって。」

青子は両手をそろえて差し出した。

「ほら！」

快斗が青子の手に銅貨を落とした途端、三枚の銅貨は直径五センチぐらいのせんべいになっちゃった。

「わぁ！」

まさにマジック。

あれだけ不機嫌だった、青子の機嫌があつという間に元に戻った。

「三枚あるから、青子とボウズと・・・えーっと、名前なんだっけ？」

快斗が蘭に、知らないふりをして聞いた。

「毛利蘭です。『快斗君』でいい？」

「かまわねーぜ。じゃあ俺も『蘭ちゃん』って呼ばせてもらってもいい？」

こうしてお互いの呼称が決まった。

「ねえ、快斗兄ちゃんって黒羽盗一さんの親戚？」

コナンが快斗に聞いた。

「親戚もなにも、俺の親父だぜ。それにしても、よく知ってるなボウズ。」

コナンの正体を知っている快斗は、わざとらしく言った。

「そうだ！蘭ちゃん達に迷惑掛けたお詫びに、マジック見せてあげたら？」

青子が思い出したように言った。

「迷惑っていったって、お前が勝手に大騒ぎしたんじゃないか。」

「その大騒ぎの原因はだれよ？」

「・・・しゃねーなあ・・・」

（名探偵には一回見せたネタだけど・・・今これしか持ってねーんだよな・・・）

そう思いながらテーブルの横に立った。

「レディース アンド ジェントルマン！！まずはこの風船をご覧あれ！」

そう言っていると、風船を一つ取り出し膨らませた。

「さて、お嬢さん。この風船に針を刺すとどうなると思いますか？」
すっかりマジシャンモードになった快斗が蘭に聞いた。

「えっ！そんなの破裂するに決まってるじゃない。」

蘭は驚いて言った。

「大丈夫ですよ。ほら！」

そう言っていると快斗は、右手に持った風船に次から次へと針を刺していた。

「・・・それって、風船にセロハンテープを貼ってるんでしょ？」
コナンは下らないという顔をしている。

「さすがだなボウズ。じゃあこれだとどうなると思う？」

そう言っただけからシャープペンシルを取りだした。

「・・・さあ？」

今度は複雑な表情をして言った。

「風船は破裂するんだけど・・・」

パンッ！

風船が破裂し、その場所にトランプが一組現れた。

「・・・マジシャンはいつもこうやってトランプを出すんです。」

そう言っただけでトランプを揃え、机に広げた。

「・・・」

蘭は驚きのあまり言葉を失っている。

「・・・青子も今のマジック初めて見た・・・」

青子もかなり驚いたようだ。

片や、コナンはなんとも複雑な表情を浮かべている。

「・・・ボウズどうかしたか？」

「なんでもないよ、快斗兄ちゃん。もっと見せてよ。」

「お、おい！」

コナンは快斗の手を引いて、二階に上がっていった。

第三話 マジックショー（後書き）

私はマジックが趣味で、その方面には詳しいので快斗のマジックは実現可能な物にしてみました。

そして岐阜には実際に有名なマジシャンがいます。

私が最も尊敬するマジシャンの一人です。

感想や評価をどんどんお寄せ下さい。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第四話 探偵と怪盗

「おいボウズ、どういづつもりだよ。いきなり上に行こうなんて・・」

コナンの部屋に連れてこられた快斗は、不満そうに言った。

「まあ、いいから座ってよ。」

コナンはそう言って椅子を持ってきた。

「椅子よりテーブルの方がありがたいんだけどな。特にトランプマジックは・・・」

「そんな物いらないよ。少し話がしたいだけだから。マジックは後でいいよ、快斗兄ちゃん・・・いや、怪盗キッド。」

コナンは子供の演技をかなぐり捨てて言った。

「さすがだな名探偵。怪盗キッド。本名は黒羽快斗だ。」

快斗もキッドの口調で言った。

「やけにあっさり認めたな。」

「まあな。本当はお前宛に予告状を出してからにするつもりだったけど・・・手間が省けたぜ。」

快斗はゆつくりと窓の傍まで歩いていった。

「・・・何のことだ？」

コナンは怪訝そうに言った。

「話を聞いてくれるか？名探偵。」

コナンが頷くと快斗は話し始めた。

「話はここから始まる。なぜか親父が怪盗キッドになった所から。その理由はまだ分かってないが・・・」

コナンは黙って聞いている。

「それが十八年前だ。そして、その十年後親父は死に、当然ながらキッドは姿を消した。

さらにそれから八年後の今、キッドは再び活動を再開した。ここまではいいな名探偵？」

快斗は、考えをまとめるために話を区切った。

「キッドが復活した直後、俺は自分の部屋に隠し部屋を見つけた。それは親父が遺した物で、そこには怪盗キッドの衣装の一通りが揃っていた。」

「おい、ちよつと待てよ。キッドの二代目はお前だろ？」

コナンは不審に思っただけで聞いた。

「すぐに分かるよ名探偵。俺は奴に会えば何かが分かると思って、その服を身に着けてキッドの予告場所に行った。

そのときに怪盗キッドやっていたのは、親父のかつての付き人、寺井黄之助だ。

俺は彼に、親父が事故死ではなくて殺された事、怪盗キッドだった事を聞いた。

そして、親父を殺した奴らをおびき出すために、今度は俺が怪盗キッドになった。」

「・・・黒羽盗一は殺されたのか？」

「そうだ。続けるぞ。俺がキッドになってしばらくして、ブルーバースデーを狙った時、俺は親父を殺した奴らに出会った。

俺はそいつらの後をつけて、奴らの目的を聞き出した。」

「それで、そいつらの目的は何なんだ？」

コナンはすっかり探偵モードになっていた。

快斗は、そんなコナンに苦笑いしながら続けた。

「古くからの言い伝えにこうある

『ボレー彗星近づく時、命の石を満月に捧げよ・・・さすれば涙を流さん』

そして、その涙をのんだ者は不老不死を得る。」

「・・・なるほど。その『命の石』ってのがビッグジュエルの内の一つで、

奴らの野望を阻止するために、お前が怪盗キッドを続けてるってとこか？」

「ご名答。さすがは名探偵、察しがいいな。その命の石はパンドラとよばれている。」

「それにしても、その途上で小さくなった工藤新一に会うなんてな・・・」

「・・・そういえばお前はどこまで知ってるんだ？」

「えーっと。お前が、黒ずくめの組織に毒薬を飲まされて体が縮んだ事、眠りの小五郎並びに、眠りの園子嬢の正体、

工藤新一の正体を知っている人一覧、それから灰原哀の正体ってとこか。」

「俺の正体にはいつ気付いた？」

ブラックスター

「漆黒の星の直後だな。幼い日の記憶のおかげで。」

快斗は微笑んだ。

「覚えてるか、新一？」

コナンも懐かしそうに笑った。

「ああ、今日の授業中の居眠りで夢に見たぜ。」

思い出した直後に再会だからな・・・改めてよろしくな快斗。」

「・・・捕まえないのか？」

「告白じゃ証拠にならねーからな・・・それに続きがあるんだろ？」
快斗はため息をついた。

「何で分かった？」

「岐阜に行くだけで、三日もいらねーだろ？っていうか岐阜に行ったこと自体が嘘だろ。」

「じゃあ三日間の冒険の話をするか・・・」

第四話 探偵と怪盗（後書き）

誤字、脱字等ありましたらお知らせ下さい。

ご意見・ご感想お待ちしております。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第五話 潜入捜査と共闘

白いマジシャンは、とある建物の屋上に降り立った。
ドアに近づき鍵をこじ開ける。

不法侵入はお手の物だ。

（さてと、誰に変装するか・・・）

階段を下りると、曲がり角から人の足音が聞こえた。
おそらく見回りだろう。

足音からすると相手は一人だ。

（ちょうどいい・・・）

催眠スプレーを取りだし、標的目掛けて噴射した。
ドサッ

（見回りにしては、ずいぶんラフな格好だな・・・）

眠ってしまった標的を見て思った。

ボロボロの長ズボンに、白のＴシャツ。

そして持ち物を調べた。

するとズボンのポケットから一枚の紙切れが出てきた。

死刑囚296番

罪状 作戦の失敗

血液型 A B

三日後に毒薬の実験に使うため別組織に搬送。
本組織内ならば、行動は自由とする。

（なるほど、死刑囚か・・・道理で薄着なわけだ。それにしても恐

ろしい奴らだな。三百人近く殺していやがる・・・」

父親を殺した組織が思っていたより大きいことを知り、武者震いが走るのを感じた。

「おい、起きろ。」

死刑囚はトロンとした目を開けた。

「殺しはしないから、質問に答えろ。お前の部屋はどこだ？」

「一階の・・・23号室・・・」

「よろしい。もう一回眠ってもらうぜ。」

今度は、さっきより強いスプレーを嗅がせた。

「まあ、数日間ゆつくりしてな。」

そう言つて掃除道具入れの中に閉じこめた。

（この階の掃除は一週間後だから、見つかることはまずないな）
壁に貼つてある紙を見ながら考えた。

（21号室・・・22号室・・・ここだ！23号室）

死刑囚に変装したキッドは扉を開けた。

そこにあつたのは、鉄製のベッドが一つと机が一つだけだった。
便所も備え付けである。

（こりや部屋つていうより、独房だな・・・まあ当然か）

考えてみれば死刑囚である。

良い待遇をされるわけがない。

（建物の回りの壁は帯電してるから、よじ登るのは無理。

ここから見えるたった一つの出口も、絶えず見張りが居るから脱出は不可能つてわけか）

ようやく疑問が解けた。

組織内といえども、行動が自由というのはおかしいと思っていたのだ。

（こりゃ、都合がいい。出入りする人間も観察できるし、行動は自由だ。

今日は無理としてもあと三日、しっかり嗅ぎ回ってやるか・・・）

「・・・お前も、たいへんだな」

話の途中でコナンが言った。

「まあな、めしに魚が出てくるし・・・」

快斗は、思いつくのもおぞましいというふうに言った。

「魚はいいとして、それからどうなったんだ。」

「ああ、その後地図づくりで丸二日使っちゃったんだけど・・・」

（今日一日で、メインコンピューターのデータをコピーしーねと・・・）

さつき看守が来て移送は今日の午後三時だと言った。

それまでにデータをコピーしなければならぬ。

急いでメインコンピューターのある場所へ向かった。

ドアをピッキングでこじ開ける。

目の前にはとてつもなく大きなコンピューターがあった。

「ものすごいデータ量だ・・・時間がかかるぞ」

しかし、あきらめる訳にはいかない。

そう自分に言い聞かせて作業を始めた。

データを取り終え、逃げる準備をしていると、外に車が止まる音がした。

（やべえ、もう来やがった）

荷物をまとめて部屋を飛び出し、逃走のため屋上へ向かっていった。

「・・・それで、その組織を潰すために、協力してくれってわけか？」

話が終わるとコナンが言った。

「バーロ、最後まで聞けよ。この話にはおまけがあるんだ。お前にとってはこっちの方が重要だぜ。」

快斗は続けた。

「そのデータのコピーをとるときに少し内容を見たんだけど、ほん

の一年前にある組織と同盟を結んだんだ。

同盟といっても形だけで実際は合併だけだな。俺が化けてた死刑囚は、そこに移送される予定だったらしい。」

「ふーん、拡大したのか？」

「そうらしい。それで、その組織から引き取りに来た奴の名前がこうだった。『コードネーム・ウォツカ』」

「奴らか！」

「ああ、だからお前に話しに来たんだ・・・どうだ名探偵？手を組まないか。」

相手は探偵で、自分は怪盗。

快斗は、許されるはずのない提案をした。

「奇遇だな。俺も同じ事考えてたぜ。」

「それでそのデータは？」

コナンが聞いた。

「俺の知り合いに預けてある。まさか今日話すとは思わなかったからな。」

「・・・今日は予告状を届けて、後日話す予定だったってわけか」

「そうゆうこと。データに異常がないことを確認し次第もってくるぜ。」

それじゃあ、またな新一。あんまり蘭ちゃんを泣かすなよ。」

「うつせーな・・・」

こうして二人は別れた。

「・・・快斗・・・」

「ん？どうかしたか？」

快斗と青子は家路にっていた。

「快斗って・・・」

第五話 潜入捜査と共闘（後書き）

先日、青子のお誕生日企画として、短編『本日快晴』を書きました。そんな暇があるんならこつちを更新しろ！という怒号が聞こえてきそうですが、勘弁してください。

うかうかしていると九月が終わりそうだったので。

合併した二つの組織と、まだ明らかにされていない青子の台詞。次回以降もどうぞお楽しみに！

尚どちらの作品も、ご意見・ご感想お待ちしております。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願います。

第六話 正体

（ちくしょー、情けないぜ・・・）

快斗が尋ねてきた次の日、コナンは風邪をひいてしまった。

蘭特製の卵粥が食べられるのはありがたいが、工藤邸ほど本がない為、退屈でしかたがない。

高かった熱も、今は下がってしまったのでなおさらだ。

（らーん、早く帰って来てくれよ・・・）

天井を眺めている内に、そのまま寝入ってしまった。

「ただいまー」

意識が急速に現実に取り戻された。

蘭が帰って来たようだ。

すると、まもなく部屋のドアが開けられた。

「コナン君、調子はどう？」

「うん、もう大丈夫だよ蘭ねーちゃん。」

だが、蘭は念のためか自分の額をコナンの額に当てた。

これも風邪の時の特権。

「・・・熱は下がったみたいだけど、薬飲んでおいた方がいいわよ。」

「

「薬ねえ・・・」

コナンはなんとも嫌そうな顔をした。

「コナン君、薬苦手だったっけ？」

「う、うん、ちょっとね。」

（トロピカルランドの時以来なんだけどな・・・）

あれ以来、どうも薬が苦手である。

唯一例外があるのだが・・・

「・・・解毒剤なら、飲みたいんじゃない？元の体に戻るから・・・」

蘭は買い物袋を探りながら言った。

（そうそう。さすがは蘭、分かっているじゃねーか・・・・・・・・・・・・・・・・・・
えっ？）

聞き流しそうになったが、慌ててその意味を把握した。

いまや蘭は買い物袋を探るのを止め、コナンを見つめている。

もう誤魔化すのはやめようよ・・・新一」

「なっ、なに言ってるんだよ、蘭ねー・・・」

いつものように反論しようとしたが、途中で言葉を止めてしまった。
今までにバレかけたことは何度かあるが、今回の蘭は明らかに様子が違う。

「・・・もう言い逃れさせないわよ。昨日の快斗君との会話、全部聞いてたんだから。」

「！」

迂闊だった。

話に夢中になっていて、外に誰が居るかなんて気にする余裕が無かったのだ。

まさか聞かれていたとは・・・

「なんで・・・なんで言ってくれなかったのよ！今まで何回問いつめても、いつもいつも誤魔化して・・・どうしてよ！」

蘭はそれだけ言い終えると、それまで我慢していた涙を急に溢れさせた。

コナンは眼鏡を外した。

「・・・巻き込みたくなかったんだ・・・組織の存在を知ったと、

奴らに知れたら容赦なく消される。

俺が勝手に首を突っ込んだ事件に、蘭を巻き込みたくなかったんだ。
・・・」

しばし沈黙が訪れた。

「・・・バカだよな、俺って・・・」

沈黙の後コナン、いや新一が言った。

「勝手に事件に、首を突っ込んで、体を縮められて、蘭に心配ばっかかけて・・・」

だが、その言葉も途中で遮られた。

蘭が新一の小さな体を抱きしめたのだ。

「・・・蘭？」

「ねえ、新一・・・約束して。もう絶対に隠し事はしないって・・・その結果がどんなに危険でもいいから・・・」

わたしを悲しませることになっても構わないから・・・新一と隠し事だけはしたくないの・・・」

「蘭・・・」

新一は、今ほど自分の姿の無力さを感じたことはなかった。

好きな女が泣いているのに、抱きしめてやることすらできないのだ。
・・・

「わたしは・・・わたしは新一が・・・」

だが、新一は蘭の口到人差し指を当てた。

「分かってる。お前の気持ちは痛いほど分かってるよ・・・でも返事は待っててくれないか？元の姿に戻るまで・・・」

我が侘だと思いながらも新一は言った。

「・・・うん、分かった。わたし待ってるから・・・」

蘭はようやく新一を離し、横に座った。

頬をほんのり染めながら・・・

その後、新一は蘭に、眠りの小五郎の正体や、灰原哀の正体などの補足的な説明をした。

一通り話し終えた後、新一は蘭から驚きの事実を告げられた。

「それからね、新一。和葉ちゃんも、コナン君が新一だって知っているから。」

「！？なんでだよ・・・」

「快斗君と話してるの聞いたあとね、どうすればいいか和葉ちゃんに相談したんだ。服部君は知ってるみたいだったし。」

「・・・あの野郎、いつもいつも工藤って呼びやがって・・・」

「服部君も、いまごろ和葉ちゃんに問い詰められてるんじゃない？」

『コナン君って、工藤君なん！？』って。」

蘭はおかしそうに笑った。

「・・・ってことは青子ちゃんも知ってるって事か？」

ふと、思い当たって新一が聞いた。

「うん。『詳しくは、快斗に後で直接聞く』って言ってたから昨日は大変だったんじゃない？」

「服部はともかく、快斗の方は大変そうだな・・・」

自分の幼なじみが怪盗キッドなのだ。

現実を受け入れられるだろうか。

「でも、大丈夫だと思うわよ。『なにがあっても快斗のすべてを受け止めてみせる』とも言ってたから。」

「それなら安心だな。」

ホッと一息ついた。

蘭に似ているせいか、何となくほっとけない。

今回正体を知った人のためにも、組織の犠牲になった人のためにも、そして蘭のためにも、絶対に組織を潰さねばと、新一は誓った。

「ちょっと、お父さんどうゆう事よ！」

ベロベロに酔っぱらって出張から帰ってきた小五郎に、蘭が怒号を上げている。

「だーからあ、明日から三日間、ヒック、町内の人と旅行するつてえ、言つてんだよ」

呂律がうまく回ってない。

「そついうことは、もっと早く言いなさいよ！」

家を二日間空けた直後、さらに三日間旅行する父親なんか、まず居ないだろう。

それを直前に言つとなればなおさらだ。

「そつゆうことだから、ヒック、朝六時に起こしてくれよあ・・・」

それだけ言つと、そのまま、机で眠り込んでしまった。

「まあ、お父さんつたら！」

（蘭と三日間、二人きりか・・・組織の前に一混乱ありそうだな・・・

・
新一はため息をついたのだった。

第六話 正体（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

蘭、和葉、青子に知られてしまったコナンの正体。

ご意見・ご感想お待ちしております。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願っています。

第七話 千客万来

（なんだ、もう八時じゃねーか・・・）

蘭に正体がばれた翌日の事。

そして今日から三連休である。

朝起きて、いつものように眼鏡を掛けようとしたが、途中でその手を止めた。

（・・・今日から三日間は、掛けなくてもいいな・・・）

この屋根の下で、正体を誤魔化さなければならぬのは、今や小五郎だけだが、その小五郎は留守である。

眼鏡を掛ける必要はない。

しかし、便利な探偵道具でもある眼鏡を手放すわけにもいかず、結局胸ポケットに収めた。

（蘭は・・・事務所の方か）

そして、朝食を食べるために下に降りていった。

事務所のドアを開ける。

「おはよう、蘭・・・」

と蘭に向かって言ったが・・・

「よお、やっと起きたか工藤！」

「おはよう、工藤君。」

蘭と一緒に居たのは、なんと大阪の二人組。

またしても、朝早くからの『ご訪問』だ。

「『やっと起きたか』じゃねーよ！・・・こんな朝っぱらから、しかもアポなしで来やがって・・・」

もう演技をしなくてもいいのは楽だと思いつつも、しつかり文句を言った。

「まあ、そう怒こんなや工藤。ちつとでも長く居られる方がええやろ？」

平次は満面の笑顔で言った。

「・・・うるせえだけなんだけどな・・・」

対して新一は白い目をしている。

「なんや、えらいご立腹やな・・・」

「当たり前ーだ！まだめしも食ってねーんだぞ！」

あまりにも自分勝手な平次に対して、ついに新一が怒鳴り声を上げた。

「あー、分かった、分かった。めし食いながら、例のキッドの話し聞かせてもらうで。」

「ごめんな、蘭ちゃん。何も食べてへんからアタシらの分も頼むわ。」

「・・・世の中、広いようで狭いなあ。」

朝食を取りながら新一に説明を聞いた後、平次が言った。

「中森警部の娘の幼なじみが二代目怪盗キッドで、そいつと工藤は知り合いやったんか。」

今は、四人でコーヒーを飲んでいる。

「まあな。一代目怪盗キッドは黒羽盗一で、母さんと知り合いだし・・・」

昨日両親に電話したときに、そう聞かされた。

「そんで。そのデータはどうなったん？」

今度は和葉が新一に聞いた。

「異常がないのを確認し次第、快斗が持ってくるらしいけど……」
そのとき、新一の携帯にメールが入った。

今、青子と一緒に毛利探偵事務所のドアの前。

b y 快斗

「……は？」

ピンポーン

「……下らねえ事してんじゃねえよ……」

新一はドアを開けにソファアを立った。

「よお、新一。おっと、西の名探偵も居たのか。千客万来ってところかな？」

快斗が笑顔で言った。

（それはこっちの台詞だ……）

「蘭ちゃん、ごめんね。いきなり押しかけて。」

青子はすまなさそうに言った。

「うっん、大丈夫よ青子ちゃん。」

驚いたのは大阪の二人組だ。

「なんや、工藤、お前双子やったんか？」

「蘭ちゃんがふたり!？」

確かに、何の予備知識もなければ、こうもなるだろう。

「・・・あなたが快斗か。ビックリしたー。工藤にそっくりや。」

「ごめんな、青子ちゃん。アタシ遠山和葉。よろしく。」

平次と和葉が自己紹介をしている。

「貴方のことはよく存じ上げていますよ。西の名探偵。」

「中森青子です。よろしく和葉ちゃん。」

お互いに自己紹介が終わると、新一が本題を切り出した。

「それより快斗、データはどうなったんだよ」

「ああ、このリュックの中にあるぜ。」

そう言うと、快斗は荷を下ろそうとしたが、新一が制止をかけた。

「着いたばかりの二人には、悪いんだけど俺の家に行かないか。

ここじゃあ少し狭い。」

確かに、毛利探偵事務所は、六人で居るには狭すぎた。

「工藤君の家って、すごいんやなあ・・・」

和葉が歓声を上げている。

「ほんと、豪邸みたい・・・」

青子も驚いている。

「いや、青子『みたい』じゃなくて、豪邸だろ。」

「あつ、そつか。」

そのやりとりにみんなが笑った。

「それじゃ、快斗。荷物を置き次第、博士の家に行くぞ。」
新一が快斗に言った。

「いや、ちよつと待て新一。それはまずい・・・」

「なんでだよ!？」

快斗は何かを言おうとしたが、回りを見て止めた。

「・・・また後で・・・」

第七話 千客万来（後書き）

やっと平次と和葉が登場しました。

快斗と青子も出てきて、まさにタイトル通りです。

さて快斗は何を言おうとしたのでしょうか？

話は次回に続きます。

どうぞお楽しみに。

ご意見・ご感想・ご指摘等お待ちしております。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願っています。

第八話 青子の言葉

「あれっ、あの三人はどこに行つたの？」

三人で昼食を準備していた時、蘭が和葉と青子に聞いた。

「あの三人なら『絶対上がつて来んな』って釘さして、二階に行つたみたいやで。」

野菜を切りながら、和葉が答えた。

「うん。この前みたいに聞かれたくないからって、快斗が言つてたよ。」

青子も和葉に続いて言つた。

「そついえば、青子ちゃん、あの後、快斗君になんて言つたの？」
蘭が鍋を火に掛けながら、青子に聞いた。

「あの後って？」

青子が首を傾げた。

「新一と快斗君との話を聞いた後の事よ。」

すると、青子がなぜか顔を赤くした。

「・・・言わなくちゃいけない？」

青子が小さな声で言つた。

「ちよつと聞きたいなつて思つて。」

しばらく迷つていた青子だが、ゆっくりと話し始めた。

快斗って、怪盗キッドなの？

快斗が二階で新一と平次に話している。

奇遇にも、男三人もその話をしていた。

「っと、こう言われたときは、心臓が止まるかと思ったぜ・・・」
快斗が続けた。

「天下の怪盗キッドも、青く美しい花の前には『形無し』って訳か？」

新一がそう言うのと、快斗は赤くなりながらも、やり返した。

「うるせえ！お前だって『蘭』という名前の花には、敵わねーだろ？」

ダイヤモンド・カット・ダイヤモンドの始まりである。

「・・・言ってくれるじゃねーか・・・」

新一も負け劣らず顔を赤くしている。

それを見て平次が、横槍を入れた。

「ほんま二人とも似たもの同士やな。隠事して、愛しの彼女を泣かせたり、

同じ組織を追っかけたり、それから容姿もやな。」

「うるせー！」

二人が同時に怒鳴った後、快斗が咳払いをして話をもとに戻した。

「・・・まあその辺はいいとして、続けるぞ？」

「快斗って、怪盗キッドなの？」

唐突に告げられたその言葉。

快斗は言葉を失った。

青子は尚も続ける。

「さっき、コナン君と・・・じゃなかった、工藤君と話してるの聞いてたんだよ・・・」

青子が静かに言った。

「！」

誰よりも一番、知られたくなかった女^{ひと}。

しかし、彼女は知ってしまった。

「ねえ、答えて・・・快斗・・・」

沈黙が訪れた。

「・・・ごめんな青子、ずっと黙ってて。」

しばらくして、快斗が言った。

それは肯定の言葉。

（俺はどうすればいい・・・）

犯罪者である以上、青子のもとから去るしかない。

だが、どうして最愛の女性のもとを、去ることができるだろうか。考えが堂々巡りしていると、急に青子の手が快斗の背中に回された。

（離したくない・・・）

青子はそう思っていた。

自分が問いたただせば、快斗はきっと姿を消してしまう。
そんなことは分かっていた。

二度と会えなくなるかもしれない。
それも分かっている。

しかし、青子は彼に問い掛けた。

彼と隠し事なんて、絶対にしたくない。

その一心で・・・

だが、行動と裏腹に彼と離れたくないと思った。

彼の別の姿が犯罪者であろうと構わない。

快斗の替わりなんて絶対にいない。

ずっと一緒に居たい・・・

気が付いたら、彼を思いきり抱きしめていた。

「快斗・・・お願い！どこにも行かないで！ずっと青子の傍に居て・・・」

「青子・・・」

目の前の少女は涙を流しながら、ますます強く抱きしめてくる。

（どうして俺を・・・）

ずっと騙していたというのに。

自分は犯罪者であるというのに。

どうして青子は自分を必要としてくれるのだろうか。

「・・・本当にいいのか？俺なんかが傍にいて・・・」

思っていた疑問を青子に尋ねた。

青子は頷いた。

「・・・本当だよ快斗、ずっと傍にいて、青子は・・・」

青子は快斗が好き・・・

「・・・今の俺が言えるのか分からねーけど、俺もだぜ青子。ずっと、ずっと青子が好きだった。」

夜も更けた街の中、二人は抱きしめ合った。

そして快斗は、彼女だけは何があっても絶対に守ると誓った。

「・・・へえ、青子ちゃん大胆ね。」

蘭が微笑ましそうに笑って言った。

「ほんまや、アタシやったら道端でそんなことできへんわ・・・」

和葉はため息を吐きながら言った。

いまや青子の顔は、名前とは反対に真っ赤に熟れたりんごのようだ。
「ちよつと、やめてよ二人とも・・・それに、そろそろ火をとめな
きや。」

見れば、たしかに鍋が沸騰している。

そのとき二階から新一、平次、快斗が降りてきた。

「蘭、ちよつと博士の家に行って来るぜ。データを一通り確認したから。」

新一が台所の蘭に向かって言った。

「もう少しでできるから、お昼ご飯、食べて行きなさいよ。冷めるとおいしくないしね。」

蘭が新一に言った。

「いや、ちよつと急ぐんだけど・・・」

しかし、和葉が新一に言った。

「工藤君、あかんで。いままで騙しとつたんやから、そのぐらい聞くんがあたりまえやろ？」

それに加えて横から平次が口を挟んだ。

「そやな、食ってからでも遅くないし、和葉の腕前にしつかり文句言つたるか。」

「なんやて！」

平次の余計な一言から、いつもの夫婦漫才が始まった。

（おいおい、またかよ・・・）

そのおかげで昼食が予定より遅れたのであった。

第八話 青子の言葉（後書き）

更新が遅れてすみません。

なかなか話が進みませんが、次回は少し進展がある予定です。

大阪弁のつつこみ・ご意見・ご感想などございましたら、ご遠慮なくお願いします。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしくお願いいたします。

第九話 とある研究所

「博士、じゃまするぜ。」

博士の家に上がりながら、新一が言った。

「おお、新一君に平次君、それから快斗君じゃな？」

「どうもはじめまして、阿笠博士。」

手からハトを出しながら快斗が言った。

「パソコンを使うかね、新一君？」

新一から、話を聞いて立ち上げていたパソコンを指差して、博士が言った。

「いや、こっちで用意してるから、いいぜ。」

そう言うが早いか、持ってきていたノートパソコンを立ち上げ始めた。

「博士、俺達に何か隠してないか？」

マウスを動かしながら、新一が聞いた。

「・・・何の事じゃ、新一。」

しかし、新一はその問いに答えなかった。

「・・・あつた、1970年度の資料。」

パソコンの画面には、構成員のものとされる、名前が並んでいた。

「このことだよ・・・」

1970年度名誉会員 阿笠 博士

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どういうことだよ、博士。なんで博士が組織の一員だったんだよ。」
沈黙が訪れた。

「・・・分かった。わしの知っている全てを話そう、新一、それからみんな。」

三十年前

「・・・ちよつと、阿笠博士、話があるんだが・・・」
研究所にある人が、訪ねてきた。

「どうしたんだ、宮野博士。」
訪ねてきたのは、宮野厚史博士。
薬学分野の天才で、昔の友人だ。

「私が今、所属している研究所に来ないか？」
「ああ、ある薬の研究をしている所なんだが、君に一役買っただけな。」

ところが、阿笠は笑って言った。
「おいおい、私は工学分野だぞ。そんなところに行っても、足を引っ張るだけだよ。」

しかし、宮野の方は話を続けた。

「まあ聞け、その研究所だが、今データの処理に困っていてな。それらを処理できるコンピューターを造って欲しいんだ。どうだ、君に適任だろ？」

阿笠は少し考えて言った。

「だが、ずっとそこには居れないぞ。こっちも今研究中の課題があるからな。」

宮野は少しの間考えていたが
「よし、分かった。一年だけでいいから来てくれないか。」

その一年後

「・・・すごいぞ、阿笠博士、たった一年でこれだけのものを造るとは。」

二人の目の前には、完成した巨大なコンピューターがあった。

阿笠も改めてそれを見て、とても満足そうだった。

「いや、このみんなの協力がなければ、ここまでではできなかった。こちらこそ、ありがとう。お礼を言うよ。」

二人は握手を交わした。

「君の名前はおそらく、名誉会員に名を連ねるぞ。私の方からも、上に言っておくよ。」

「・・・あの大きなコンピューターを、博士が造ったのか・・・」

実際にそれを目の当たりにした、快斗が言った。

しかしそれを遮るように、新一が言った。

「そのときに怪しいと思わなかったのかよ。それだけの大金がどこから出るのか不思議に思わなかったのか？」

しかし、博士は首を振った。

「怪しもうなんて、これっぽちも思わなかったよ新一。確かにそのころから真つ黒な服装じゃったが、

研究員に悪い雰囲気は全くなかった。それにそのころは、犯罪なんかとは無縁の純粋な研究所じゃったし、

金の出資者も、創立者も宮野博士が教えてくれた。」

「出資者と創立者やて？」

平次が聞いた。

「創立者は大黒蓮太郎、スポンサーは烏丸蓮耶じゃよ。」

「なんやて！昔の日本のお偉いさんとあの大富豪か。」

他の二人も驚いている。

「そうじゃ、その後大黒蓮太郎は初代の研究所所長に、大黒の死後は烏丸蓮耶がトップに立った。そして大黒は烏丸の名にちなんで研究所に名前を付けた

『ブラック・バード』と。宮野博士が話してくれたのはここまでじゃ。」

しばらく皆が、それぞれの想いに耽っていた。

「その研究所が犯罪組織になったと知ったのは、新一が小さくなつた時じゃよ。」

博士が続けた。

「あの時新一が言っていた、真つ黒の服装と薬という言葉で、そのことが分かった。これがわしの知っているすべてじゃよ。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三人は言葉を失った。

「わしが発明した機械が犯罪に使われていると思うと、とても話すことができなかった。すまなかつた新一。」

博士が頭を下げた。

「・・・分かつたよ。博士も組織の解体に手を貸してくれればいい。それが償いになるだろ？」

「もちろんじゃよ。全力を尽くすよ。」

「それで、小つこい姉ちゃんはどこなんや？」

平次が博士に聞いた。

「はて、ついさっき散歩に行ったが・・・」

博士は首を傾げた。

「変じゃのう、もう二時間も経つぞ。」

三人の脳裏を嫌な予感がかすめる。

「博士！灰原はバツジを持ってたか？」

「ああ、確か持っていたと思うが・・・」

博士はまだ状況が読めないらしい。

「新一！追跡眼鏡だ！」

「・・・シェリーは捕まえたわよ。じゃあ待ち合わせ場所だね。」
「・・・OK、ベルモット。」

第九話 とある研究所（後書き）

伏線であつた快斗の台詞の処理です。

博士はボスではないが、何らかの関係があると考えているので、このような展開にしました。

ご意見・ご感想・ご指摘などございましたらご遠慮なくお願いします。

次回以降もどうぞご期待ください。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願っています。

第十話 ベルモットと狙撃者

「博士、車を出してくれ！」

追跡眼鏡をポケットから取り出し、電源を入れながら新一が言った。

「よし、分かった。」

博士はガレージに向かった。

「それから・・・」

平次と快斗に向き直った。

「二人はここにいてくれ。巻き込むわけにはいかない。」

しかし、一筋縄に事が運ぶわけがなかった。

「アホ！今までにも、散々巻き込まれとるんやで！今更何を言うんや！」

「おい、新一。そいつらは俺の敵でもあるんだぜ。」

当然のごとく、二人は不満の声を上げた。

「いいから、聞け！」

新一が二人を制した。

「灰原を誘拐したのは、多分ベルモットだ。前回みたいに、俺相手なら多少手加減するかもしれないが、

おまえら二人はそうはいかない。特に快斗、もし仲間がいて、お前が『工藤新一』に間違えられてみる。

その場でお前はあの世行きだぞ！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・分かった。俺達はデータの見直しをしとく・・・・・・気を付けろよ、新一。」

新一は頷いて、ガレージに向かった。

「・・・・・・・・哀君の現在位置はどこじゃ？」

博士が助手席の新一に聞いた。

「・・・ここから十キロの地点だな・・・その交差点を右に。」
それだけ言くと、新一は携帯電話のボタンを押した。

「・・・ジヨディ先生、実は・・・」

（ここは？・・・）

意識が戻った。

どうやらここは、廃ビルの地下駐車場のようだ。
見知らぬ車の後ろの地面に、哀は寝かされていた。

（どうしてこんな所に？・・・）

疑問が『どこ』から『なぜ』に変わったところで、車から降りてきた人物が銃口が向けてきた。

「・・・ベルモット・・・」

記憶が一拳によみがえって来る。

散歩中に後ろから声をかけられたこと。

そして、その次の瞬間、口に布を当てられたこと。

「裏切り者の処刑が始まるわよ・・・シェリー・・・」

そして一発の銃声が響き渡った。

『哀ちゃんが、誘拐された！？』

「多分犯人はベルモットだ。急がないとまずい・・・」

『分かったわ、FBIも動いてみる。』

「ありがとう先生。・・・現在、発信器の位置は天海ビルの地下駐車場。」

『OK!』

新一は携帯を切った。

（間に合ってくれよ・・・）

「・・・くっ・・・」

腕から血が流れる。

ベルモットが撃った最初の銃弾は、哀の右腕に当たっていた。痛みに顔が歪む。

「・・・次は外さないわよ・・・」

ベルモットは引き金に指をかけた。

哀は思わず目を瞑った。

ズキューン

再び銃声が響いた。

しかし、撃たれたのはベルモットの銃の方だった。

銃が腕を離れて飛んでいく。

「その子はあきらめろ、ベルモット!」

銃弾の飛んできた物陰から声がした。

しかし、その声は・・・

「赤井秀一！？そんなばかな！」

先日、殺したはずの赤井秀一の声だった。

ベルモットは予備の小銃を取り出し、物陰に近寄った。

・・・そこには誰もおらず、代わりに小さな機械が落ちていた。

(・・・これは？)

だが、それを拾う間もなく。

一台の車が駐車場に入ってきた。

「動くな、ベルモット！」

新一が時計型麻醉銃を構えながら言った。

「抵抗しても無駄だ。もうすぐFBIも来る。」

(じゃあ、さっきのはFBI？・・・どちらにしろ逃げるしかないわね・・・)

ベルモットは、新一が麻醉銃を撃つより先に車に乗り込んだ。

そして博士の車が来た方向とは、反対の出口から逃走していった。

「くそつ、逃がしたか・・・」

「新一君、わしは哀君を病院に運ぶぞ。」

「ああ、博士頼んだ。」

(・・・なんだ？)

新一はさっきの機械を拾った。

(これは・・・変声機？・・・！)

「コナン君！大丈夫なの？」

ジヨディが到着した。

「うん、でも灰原が撃たれて、今病院に運ばれてるよ。」

「・・・そう・・・何か手がかりは？」

「・・・何もないよ・・・」

新一は、変声機のことについては、なぜか何も言わなかった。

「・・・私たちも病院に行きましょう。」

「・・・うん。」

「・・・作戦は失敗したわ、すぐに逃げなさい。それに赤井秀一のふりをして、

私たちを動揺させようとする人間がいるみたいよ・・・」

「博士、灰原の具合は？」

新一は処置室の前にいる博士に聞いた。

「おお、新一君にジヨディ先生。詳しいことは分らんが、命に別状はないみたいじゃ。」

「そうか・・・良かった。」

二時間後

「・・・終わりました・・・」

処置室から出てきた医者が言った。

「幸いにも、骨に異常は見られませんが、二週間ほど入院すれば大丈夫でしょう。」

どうやら筋肉の損傷だけですんだらしい。

三人は、哀が担架に乗せられて病棟に運ばれるのを見てから、しばらくして部屋に入った。

「調子はどうじゃな哀君？」

「今はいいわね、麻酔が効いてるからだとおもうけど。」

哀は上半身を起こして言った。

「・・・哀ちゃん、急で悪いんだけど、事件の話し聞かせてくれなにかしら？」

ジヨデイが聞いた。

「ええ、いいですよ。」

哀は散歩中に話しかけられたところから、話を始めた。

第十話 ベルモットと狙撃者（後書き）

灰原 哀の奪還劇。

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回は謎のスナイパーの正体を巡って男三人の推理が冴えます。
お楽しみに。

ちなみに『天海ビル』というのは日本を代表するマジシャンの一人である、石田天海氏の名前から拝借しました。

ご意見・ご感想・ご指摘などありましたらご遠慮なくお願いします。
今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願います。

第十一話 三人の推理

「・・・ということですよ。」

しばらくしてから哀が話し終えた。

「・・・その銃を撃つた人って誰だか分からないの？」

「分かりません。姿が見えなかったから。」

「・・・そう・・・ありがとう哀ちゃん。ジェイムズに報告しなくちゃいけないから・・・それじゃ、お大事にね。」

そう言くと、ジョディは部屋を出ていった。

「・・・まあ、無事で何よりだったな。」

「あら、右腕のけがを無事と言うならの話だけど。」

新一の言葉に、哀はツンとしたように返した。

「相変わらず可愛くねえな、おまえも・・・。」

いつものやりとりである。

「・・・そういえば・・・。」

哀は続けた。

「今思い出したんだけど、その人の名前をベルモットが言ってたわ、確か・・・赤井なんとかって。」

「・・・ひょっとして、赤井秀一じゃないか？」

新一が言った。

「確か、その名前だったと思うけど・・・。」

哀がそう言くと、新一の顔に不敵な笑みが広がった。

「・・・なるほどな・・・。」

その頭の中では全てのことが、一本につながっていた。

「・・・帰ったぜ。」

「おお、工藤、小つこい姉ちゃんは大丈夫なんか？」

博士の家に帰ってきた新一に、平次が聞いた。

哀の怪我が思ったより軽かったので、新一はいったん博士に家に戻ったのだった。

博士は哀に付き添っている。

「ああ、二週間ぐらいで退院できるらしいぜ。データの方は？」

ソファーに座り一息ついたところで、新一が言った。

「組織の活動内容の部分は全部暗号化されてて、あんまり読めなかったけど、薬のデータだけは解読してやったぜ。」

快斗はそう言って一枚のフロップシーを渡した。

「サンキュー。明日、灰原に渡してとくよ。」

新一はフロップシーをポケットに収めた。

「それから、もう一個進展があったぜ。『パンドラ側の組織』は四十年前までは、

『ブラックバード』と同一で、そこから分かれた支部的存在だった・

・この意味は分かるよな、新一？」

新一を含め三人は不敵な笑みを漏らしている。

仕事の時のその顔だ。

「ああ、『パンドラ側の組織』が『ブラックバード』から分かれたもので、その目的が不老不死なら、

もとの『ブラックバード』の目的も不老不死ということがほぼ確実って事だ。

それから薬品研究ってことを考慮すると、奴らの目的はおそらく不老不死薬。

A P T Xはその過程で偶然造られた失敗作。そういうことだろ、快斗？」

「ああ、それからおまけに『パンドラ側の組織』の名前は『ブルーバード』……」

快斗が頭を振っている。

「……どこが幸せの青い鳥なんだか……それとも大黒はビートルズファンだったのかな？」

その冗談に新一は乾いた笑い声を上げている。

「なんやねん、ビートルズファンって？」

意味が飲み込めない平次が二人に聞いた。

「ポール・マッカートニーの曲の中にあるんだよ。『BLACK BIRD』って曲と『BLUE BIRD』って曲が。」

新一が、四十年近く前の洋楽の曲名を引き合いに出し説明した。

平次は知らなかったらしい。

「なるほど、西の高校生探偵は、家柄、西洋文化に弱いつてわけか。」

快斗が茶化すように言った。

「やかましい！ど突いたるか、快斗！」

慌てて快斗が平次を落着かせにかかる。

「……まあ、ええとして。お前の方はなんか収穫あったんか、工藤？」

「……まあな。」

新一は二人に、哀から聞いた話と、変声機を拾った事を話した。

「それで、その機械は？」

平次が聞いた。

新一はそれを丁寧に取りだした。

「・・・現場に落ちてたままの状態で持ってきた・・・」

平次はハンカチでそれを取り上げ、隅から隅まで、電源ボタンの周りの『No.931615』という文字まで観察した。

快斗もそれに倣った。

「・・・にしても変な奴もいるもんだな。わざわざ死んだ人のふりしなくてもいいのに・・・」

そう言った快斗に対して平次が言った。

「お前も人のこと言えんな快斗、お前の場合は探偵的な思考に弱いちゅうわけか。」

「そりゃ、俺、怪盗だもん。」

平次と比べて快斗は呑気なものだ。

「この変声機、電源が入ってないんやで、工藤は現場からそのまま持ってきたんやから」

そんな時も電源は切れとって、そいつは使った後、電源を切ったつちゆうことや。変やと思わんか？」

快斗がしばらく考えてから言った。

「・・・なるほど。そいつはすぐ逃げたはずだから、電源を切るのはおかしい。」

つまり変声機は使われなかったってことか。でも変声機を使ってないってことは、

誰が撃ったんだ？まさか幽霊が撃ったって言うんじゃないだろうな。

「

「んなわけんねーだろ。赤井さん本人が撃ったんだよ。その可能性しか残ってない。」

新一が言った。

「なんや、赤井はんは生きとんか？」

「ああ、どうもそうらしいな・・・おそらく自分が生きていることを隠しつつ、

奴らにプレッシャーを与えるために、わざと変声機を現場に残した

ってとこだろう。」

ふと新一が、時計を見ると九時を回っていた。

「そろそろ帰った方がいいな。蘭達も心配してるだろうし・・・」

「そうだな・・・そうだ、新一。俺達も泊めてもらってもいいか？
言っの忘れてたけど、そのつもりで来たんだ。」

突然の提案。

この突発ぶりは、大阪組にも引けを取らないだろう。

「・・・構わねーけど、もっと早く言えよ・・・」

深夜

哀は寝付けないでいた。

（部屋の外に誰か居る・・・）

あの気配を感じ取っていた。

組織の構成員独特のあの気配を・・・

翌朝

R
R
R
R
R
R
R
R
R
R
.
.
.

午前七時。

新一は携帯電話の音で目が覚めた。

「もしもし」

「あら、新ちゃん起きてた？」

電話からする声それは・
・
・

「……母さん？起きてたじゃねえよ、今ので起こされたんだよ……」

『ごめん、ごめん。それでどこ？探偵事務所に電話しても出なかったから、どこか行ってるんでしょ？』

「俺の家だけど、どうかしたか？」

「あっ、そうなの、じゃあ、あと一時間したら、そっちに着くから。」

「・・・は？おい、ちよつと待てよ、服部や快斗たちが泊まりに来てんだぞ！」

「あら、快斗君もいるの？ 丁度いいわ。それじゃあ、一時間後にね。」

「おい！」

新一の抗議もむなしく電話は切れていた。

「新、今の誰から？」

蘭が起きてきた。

「母さんから……」
「一時間後に来る」
「つて。」

その後、新一と蘭は急いでみんなを起こす羽目になった。

第十一話 三人の推理（後書き）

補足

ビートルズ・・・THE BEATLES 1962年から1970年に渡って活躍した、ジョン・レノン（John Lennon）ポール・マッカートニー（Paul McCartney）ジョージ・ハリスン（George Harrison）リンゴ・スター（Ringo Starr）の四人によって結成されたロックグループ。

あとがき

ビートルズの『BLACK BIRD』は彼らの『THE BEATLES』というアルバムに、『BLUE BIRD』はポールがビートルズ解散後に結成した『Wings』の『Wings Over America』というアルバムに収録されています。どちらもとても良い曲です。

今回は優作と有希子が登場します。

どうぞ楽しみに。

ご意見・ご感想・ご指摘等をご遠慮なくお願いします。

今後も『奇術師の予言』をどうぞよろしく願っています。

第十二話 約束

「まったく、父さんも母さんも、帰って来るんなら予め言っとけよな・
・・」

両親を家に迎え入れてから新一が言った。

「あらっ、別にいいじゃない？ 私たちの家なんだから。」

（・・・まあ、そうなんだけど・・・）

有希子から電話がかかってきてからというもの、蘭と一緒に他の四人を叩き起こしたり、

朝食を十分に済ませたり、何かと大変だったのだ。

この慌ただしさは両親二人には分かるまい。

有希子はというと、早々リビングに入っていつてしまった。

残されたのは、新一と優作。

「それで新一、進展はあったのか？」

優作は帽子を脱ぎながら、新一に尋ねた。

「ああ、快斗のおかげでかなり進展があったよ。まあ後でゆっくり話そうぜ。」

（・・・影で人の役に立つ・・・彼は盗一さんそっくりだな・・・）

「快斗君？ お久しぶりね、最後に会ったのは十年前かしら？」

リビングに入るや否や有希子が快斗に話しかけた。

みんなの視線が快斗に注がれた。

「え？」

快斗はしばらく困惑していたが、思い出したように言った。

「そういえば、親父の知り合いに日本の有名女優が居るって・・・」
「そう。それが私。盗一さんには、アメリカで変装を教わったのよ。」

「部屋の全員が一様に驚いている。」

「それはどうも、父が生前、お世話になりました・・・」

「まあまあ、快斗君、そう堅くならずにな・・・」

優作がリビングに入ってきた。

「実は、盗一さんから、預かっていた物があってね。それを渡しに来たんだ。」

「・・・そうですか、親父が・・・」

ところが、そこに新一が口を挟んだ。

「まあ、父さんも母さんも、とりあえず荷物置いて来いよ。話はそれからだ。」

新一は、二人をいったんリビングから遠ざけた。

なぜなら、有名人二人の登場に新一、蘭、快斗以外の全員が、がちがちに堅くなってたからだ。

「・・・どうかされたのですか？怪盗キッドさん・・・いや、黒羽盗一さん」

気配を感じ取った優作は原稿を書きながら、窓に向かって聞いた。

「・・・さすがは世界屈指の推理小説家の工藤優作さんだ・・・見破られましたか・・・」

窓のカーテンの陰から白い怪盗が現れた。

「あなたがその格好でお見えになるとはめずらしい・・・なにか事情でも？」

不意に、盗一は懐から箱を取り出した。

「これを預かってもらいたいのですよ・・・」

そう言つて、その箱を優作に渡した。

「これは・・・」

「中身は言えません・・・八年後に快斗に渡して下さい・・・それでは・・・」

それだけ言つと彼は窓から去つていった。

そして、その数日後彼は・・・

「・・・作・・・優作！」

優作は思考を現実に取り戻された。

「どうしたの、盗一さんに預かった箱を握ったままボーっとして？」

「・・・これを預かった時の事を思い出してね・・・ちゃんと約束を果たさないと・・・」

そうつぶやくと下に降りていった。

「これが・・・」

説明を受けた後、箱を渡された快斗はそうつぶやいた。

リビングに全員が集まりそれを見ている。

「そうだよ、八年前に盗一さんが私に預けていかれた物だ。」

その箱はアルファベットのパスワードを入力しないと開かない仕組みになっていた。

パスワードのヒントが箱の側面に書かれている。

現代カードマジックの基盤を作った人物のセカンドネームを答えよ。

快斗はフツと微笑んだ。

（親父らしいな・・・）

「・・・さてと、探偵が二人も居ることだし聞いてみるとするか。誰だと思う？」

聞かれた二人は考え込んでいる。

いくら知識が広範囲だといっても、頭の中からマジックの専門知識を引っ張り出すのは、容易ではないのだろう。

「・・・マジシャンですぐ思い浮かぶのはハリー・フーディーニやけど、脱出専門やしな・・・」

平次は自分の考えを自分でうち消した。

「・・・ダイ・バーノンじゃないのか？プロフェッサーと呼ばれた男。綴りは確かDai Vernon。」

新一が顔をしかめながら言った。

「入力してみな・・・」

新一の顔を見て、快斗が笑みを浮かべながら言った。

普段は自分を追いつめる探偵二人が、困惑しているのを見るのが面白いのだろう。

V e r n o n

「どうだ・・・」

パスワードガチガイマス

「あーくそつ、分かるかそんな専門知識！」

液晶に表示された文字を見て、新一はさじを投げた。

「まあ、新一落ち着けよ。」

「・・・で？答えは何なんだよ、快斗・・・」

「・・・多分この人だな・・・」

H o f z i n s e r

・・・カイジヨシマス

カチャッ

箱のロックが外れる音がした。

「・・・ホフジンザー？」

新一の豊富な知識にもインプットされていないらしい。

「ヨハン・ネポマク・ホフジンザー（Johann Nepomak Hofzins er）十七世紀後半にかけて、

ウィーンで活動していたマジシャンだ。当時はステージマジックが主流だったから、功績が偉大にもかかわらず、

彼のカードマジックは注目されなかったらしいけどな。」

快斗が全員に説明した。

「親父がいつも言ってたよ。全く注目されないにもかかわらず、当時は地味とされていたカードマジックを

大発展させ、その技術が今も尚、生きているのは、すばらしいってな。

影で大きな功績を残す人ほど偉大な人は居ないんだ。」

今は亡き父に、幼い頃仕込まれた知識を懐かしそうに話している。

「なんや工藤、音楽の知識と同じぐらいマジックの知識も乏しいんやなあ。」

「・・・お前、人のこと言えんのかよ・・・」

「ねえ、箱の中身は何なの？」

青子が快斗に聞いた。

「え？ああ、そうだな・・・」

ようやく快斗が箱の蓋を開けた。

みんなの視線が注がれる。

「・・・これは・・・」

快斗が箱から取り出したのは・・・宝石だった・・・

「快斗！もしかして・・・」

大きな青いルビーの中に、小さな赤い宝石が見て取れた。

「これは・・・・・・パンドラ!?」

第十二話 約束（後書き）

メッセージを下さった作者の皆さんありがとうございます。
しかし、申し訳ない事にパソコンの設定の関係で返信をすることが
できません。

しかも容量オーバーで新しいデータが入れられない有り様です。
申し訳有りませんm（――）m

ご意見・ご感想・ご指摘等ありましたらぜひお願いします。
今後も『奇術師の予言』をよろしく願います。

第十三話 新たな謎

「・・・親父はどうして・・・」

新一と平次も同じ事を考えていた。

パンドラの事を知っていたのだろうか？

だがそうだとすれば、どうして隠し部屋を造り、快斗を危険に巻き込むようなことをしたのだろうか？

「・・・永遠に分からねえかもな・・・お前はどうするんだ快斗？」

「怪盗キッドのことか？もちろんやめるさ、でもその前に・・・」

快斗の顔には決意の色が表れていた。

「絶対に組織を潰す！」

「・・・なるほど、これがその変声機かい？」

昼食後、男四人が新一の部屋で昨日の事件ことを話していたとき、優作が新一に聞いた。

「ああ、その変声機はフェイクで『誰かが赤井さんの振りをして撃った』ように見せかけて、

赤井さんが撃ったつてとこだろう・・・」

その言葉を聞きながら、優作は変声機を観察していた。

新一はその様子を見ていたが・・・

「？」

ふと、首を傾げた。

優作がフツと笑みを漏らしたように見えたのだ。

「何か分かったのか？」

「・・・いや、その推理で概ね良いと思うぞ。」

（気のせいか・・・）

「それじゃあ、灰原の見舞いに行つて来るから、蘭にそう言つてくれ。」

疑問を抱えながらも階下に降り、靴を履いた。

米花総合病院

「灰原、入るぞ？」

ドアを開け新一が言った。

すると、なぜか哀は驚いたようにビクツとした。

「く、工藤君、びっくりさせないでよ！」

「・・・何かあつたのか？」

「え？」

心を見透かされたように言われ、哀は焦った。

「病室のドアをいきなり開けたぐらいで、驚くようなお前じゃねーだろ？どうかしたのか？」

新一はパイプ椅子を取りだし座った。

そうしてしばらく待っていると、哀が話し始めた。

「・・・昨日の夜、部屋の外に誰か居たのよ・・・一晩中・・・まるで私を見張っているかのように・・・」

「！」

「それにあの気配がしたわ・・・組織の構成員独特のあの気配が・・・」

新一は怯えている哀の肩に手を置き、落ち着かせた。

「・・・分かった、ジョディ先生に連絡して張り込んでもらうよ、だから少し休め。な？」

その言葉に、哀は落ち着いたのか、ベッドに横になった。

新一はフロッピを置いて部屋を出ていった。

一人の男が灰原の部屋を見張っていた。

部屋の向かいになっているトイレの中からである。

壁に隠れて姿はよく見えないが、その鋭い眼光だけは認識できる。

「動かないでもらおうか・・・組織員さんよお」

その男の背後には、誰と対峙してもいいように眼鏡をかけ、麻醉銃

を構えているコナンがいた。

男は振り向き、ポケットから小銃を取りだし構えたが・・・

「おっと、ボウズか・・・」

「えっ？」

ビリッ

（えっ・・・変装？）

その男が変装用のマスクを取ると、そこに素顔が現れた。

そして、その顔は・・・

「あ、赤井さん！？」

「・・・久しぶりだな、ボウズ。」

マスクをゴミ箱に放り込んだ。

「なんで、赤井さんが変装を？」

当然の質問だった。

盗一式の変装ができるのは、快斗、有希子、それにベルモットだけのはずである。

「ベルモットが以前、使用後に捨てた物を拾ってね・・・FBIの本部で分析して、同じ物を作り出したというわけだ。」

「なるほど・・・じゃあ昨日の夜にその病室を見張っていたのも赤井さん？」

「そうだ。あの子だけは絶対に死なせるわけには、いかないから・・・おかげで三途の川を渡り損ねたという訳だ。」

不敵な笑みを浮かべながら赤井は言った。

哀が感じた組織の気配は、どうやら潜入捜査の名残だったらしい。

「・・・じゃあ組織をうまく誤魔化せたんだね。」

「どうか・・・奴らも疑っているかも知れないが、確証はないだろうな。」

そう言うと赤井はコナンの背後を見た。

「個室に隠れてたのか・・・よく分かったな、ここから見張ったって事が。」

「・・・見張り続けるには、看護婦に見つからないように時々隠れ

ないといけない。

この廊下で都合良く隠られる所は、トイレ以外にないからね。だから人通りの多い昼間はここから見張っていると考えて、ここに居たって訳さ。」

探偵の目をしてコナンが言った。

「・・・なるほど・・・さすがだな。」

しばらく沈黙が辺りを支配した。

「今回は陰で大活躍だね、赤井さん。灰原をベルモットから助けたのも赤井さんでしょ？」

「・・・何のことだ？」

「えっ？」

無表情な赤井をコナンは見据えた。

「赤井さんじゃないの！？ベルモットの銃を撃って灰原を助けたのって。」

それで病室を見張ってたんじゃないの？」

「病室を見張っていたのは、ボウズに会いに行く途中に偶然博士のビートルを見かけて、

あの子が入院したのを知ったからだ・・・昨日の新聞の建物火災の記事を不審に思ってたね。」

そう言う赤井は、新聞の切り抜きを取り出した。

そこには、快斗が侵入したビルが燃えている写真があった。

コナンの目は写真を見ていたが、頭の方は別のことを考えていた。

「・・・そんな・・・赤井さんじゃないならいったい誰が・・・」

「・・・なんやて、小つこい姉ちゃんを助けたんは赤井さんとちやうんか？」

優作が部屋に籠もり原稿を仕上げているので、新一、平次、快斗の三人だけで話している。

「ああ、どうもそうらしい・・・」

新一も複雑な顔をしている。

そこに快斗が口を挟んだ。

「それより新一、いいのか？他のFBIの人に赤井さんが生きてるって伝えなくても。」

「ああ、しばらく死んだことにして、隠れて捜査するらしい。」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙を破るように快斗が口を開いた。

「・・・とりあえず、謎が一個増えたな・・・」

残りの二人も頷いた。

「・・・誰なんだ・・・」

新一が呟いた。

(いったい誰なんだ・・・)

第十三話 新たな謎（後書き）

一週間も間が空いてすみません。

最近若干スランプ気味です。

しかし、この小説を見捨てるつもりは全くありません。

最後までお付き合い願います。

どんどんご感想・評価をお寄せ下さい。

これから『奇術師の予言』のご愛読よろしくお願いいたします。

第十四話 やっぱり敵わない

「・・・快斗君？」

二階の客間の快斗の部屋を開け、蘭が室内に向かって言った。

「ああ、蘭ちゃん・・・」

快斗は練習の手を止めた。

「・・・いつかはありがとうね、快斗君・・・ううん、怪盗キッドさん。」

「・・・それはどういたしまして、お嬢さん。」

快斗は途端にキッドの気配を醸しだした。

しかし、その気配はすぐに消した。

「私、あの言葉を聞いて、すごく元気が出たよ。新一が頑張ってるんだから私も頑張らないと、って思い直せたし・・・」

確かに蘭の声には、落ち込みの色はない。

元気を出そうと頑張っているようだ。

「・・・あの時はああ言っただけど、どうしても我慢できなくなったから、それを新一にぶつけてもいいと思うぜ・・・」

快斗は珍しく真剣な顔をしてしゃべっている。

普段考えない事を考えているからだろう。

「今までは、どこほつつき歩いてるか分からなかったから、会いたくてもどうしようもなく、

我慢してたんだろうけどさ・・・今は当の本人は目の前にいるだろう？だから寂しかったなら、

それを本人と面と向かって言ってみなよ・・・そりゃ、あいつは困るだろうよ。

でもな、それがあいつにとってはいいい薬になるんだよ」

蘭は黙って聞いている。

「・・・俺もそうだったからな・・・」

「・・・え？」

蘭は快斗の顔を見た。

「だいぶ前に、木から落ちて、意識不明の重体になって青子を泣かせちゃってよ。」

意識が戻ったら、あいつが『快斗のバカ、バカ、バカ』って泣きついてきたんだよ・・・」

快斗は思い出しながらゆつくりと語った。

「まあ、俺もそれに懲りて、それからできるだけあいつを泣かせないようにしてきたけどさ。」

・・・俺が言うのもなんだけど、好きな女の涙は男にとっていい薬になるんだよ。」

そう言つと、あの夜と同じように薔薇を一輪、右手の中に出現させた。

「おっと、左手からはこんな物が・・・」

左手からはシルク取り出した。

「そして、このシルクをこうしてやると・・・」

シルクで右手を覆い、それを除けると純白の鳩が現れた。

「・・・すごい・・・」

蘭は満面の笑みを浮かべている。

「・・・そうそう、そんな風に心から笑いなよ・・・」

快斗も笑顔になっている。

「無理して笑わずにさ。新一はそう思ってるよ。」

「・・・ありがとう、快斗君・・・快斗君も、青子ちゃんを心から笑わせないとだめだよ。」

蘭はそう言い残すと部屋を出ていった。

(・・・こりゃ、一本取られたかな・・・)

ハトや道具と共に部屋に残った快斗はそう思った。

「・・・そんなところにいると、カゼひくよ・・・」

「・・・工藤君？」

二階のベランダで風に当たっていた和葉に新一が話しかけた。

「大阪より東京の夜は寒いから、早めに部屋に入った方がいいよ。」
捜査の雲行きを示唆するかのように空は雲に覆われている。

「ありがと・・・優しいんやね、工藤君。」

十七才の少女と七歳の少年が対等に話している。

しかも、年下が年上を気に掛けている。

妙な図である。

「最初はな、蘭ちゃん放つてまで事件追うなんて、どんな神経してるんやろ？薄情な人間やなあって思ってたんよ。」

でも、違ったんやね。

工藤君はいつも蘭ちゃんの傍で優しく見守ってた。薄情なんかやなかったんやね・・・」

「・・・」

「せやけどな、工藤君。危険に巻き込まんように嘘を吐くんが『優しさ』とは限らんのによ。」

今回やって蘭ちゃん泣かせてしもたやろ？工藤君の考えも分からんこともないんやけどな、

蘭ちゃんは工藤君のこと一番に考えとるんやから、絶対に隠し事なんかしたらあかんのよ。」

「・・・ああ、分かってるよ、もう蘭を泣かせないし、あいつだけは絶対に俺が守る！」

蘭にすべてをうち明けたときにも誓った事をあらためて誓った。それを聞いて和葉はフツと微笑んだ。

「よう言^ゆった。その宣言絶対に守ってもらうからな・・・そや、それから・・・」

和葉は屋内に戻ろうとしたが、途中で振り返った。

「京都の時はありがとな。」

それだけ言つと階段を下りて行つた。

（服部にも彼女を守るって誓わせないとな・・・）
新一はそう思った。

そして、それができるのは平次だけだとも。

「ねえ、服部君？」

「ん？」

他の四人は二階にいるため、リビングには、平次と青子だけが居る。平次はコーヒーを飲みながら新聞に目を通していたが、青子に呼ばれ顔を上げた。

「服部君は和葉ちゃんの事どう思ってるの？」

青子はその性格らしい、ストレートな質問をした。

「ああ、和葉かいな・・・あいつは俺の子分みたいなもんやな・・・」

「は？」

青子は目が点という感じた。

「前に、和葉が他の男とちやらちやらしとるの見て、えらいイライラしてもてな。

なんでやるって思って考えとったら、『子分取られそうになってイラついとった』ちゅう結論になったんや。」

相も変わらずの鈍感ぶりである。

「・・・服部君ってほんとに探偵？」

「あん？」

青子はやれやれという顔をしている。

「『子分を取られそうになってイライラした』って？そんな訳ないじゃない！」

服部君、絶対その男の人に嫉妬してたんだから。探偵ならそのくらい気付きなさいよ。」

「せやかて、中森のねーちゃん。なんで俺がそいつに嫉妬せなあかんねん？」

果たして、青子の真っ直ぐな意見が勝つのか、それとも平次の鈍感さが勝つのか？

なかなか見物である。

「まだ分からないの？服部君は和葉ちゃんが好きなのよ・・・」

（俺があのと和葉をなあ・・・）

青子がキッチンに戻った後、平次はずっとそのことを考えていた。

言われてみればその通りである。

こんな事を真正面から指摘されたのは初めてだった。

快斗曰く、青子は少し子供っぽい。

だがそれは悪いことではないかもしれない。

その性格のおかげでストレートな質問ができ、純粹であるがゆえに、今回のように人の本質を見抜く事ができるのだろう。

(・・・工藤も回りくどい言い方しよったなあ・・・)

平次の脳裏にあの言葉がよみがえる。

『服部、お前・・・・・・・・ガキだな・・・』

その言葉の意味が今やっと分かった。

(和葉・・・愛してるで・・・けど、まだしばらく『子分』やからな・・・)

『子分』が『恋人』になるのはいつだろうか？
それは神様にしか分からない。

「青子ちゃんの勝ちね・・・やっぱり、みんな女の子には敵わないのね・・・」

それぞれの様子をこっそり見ていた有希子は、やさしく微笑んだのであった。

第十四話 やっぱり敵わない（後書き）

今回は新一と和葉の会話が書きたかったのですが、書き終わってみればその部分が一番短い始末（情けない・・・）

それに加え、更新が遅れて誠に申し訳ありません。

小説に対する、ご意見・ご感想などありましたら、下の感想欄からどんどんお願いします。

こんな私の小説『奇術師の予言』ですが、今後も、どうかよろしく願います。

第十五話　ディナーショー

「あーくそつ、分からへん！」

工藤邸の食事用のテーブルにみんなが座り、快斗のクロースアップマジックショーが始まっていた。

平次が快斗の巧妙なテクニクに物の見事に騙され、悔しそうな声を上げている。

「だーから、平次、言っただろ？『Don't think just feel』マジックは考えないでエンジョイして下さい。」
某有名マジシャンの口調と声をそっくりまねして快斗が言った。

そして、そう言いながらも平次の首の後ろ辺りから、直径五センチほどのコインを出現させた。

平次はまたしても悔しそうな顔をしている。

「・・・じゃあ、次は壁紙からハンバーガーでも出すつもりか？」

「いや、まさか・・・食べ物後は始末に困るからな・・・」

新一の質問に答えながら、快斗は少しテーブルから離れ、足下の道具入れから風船を取り出した。

「まあ、出すとしたら、こんなもんだろ。」

懐からはさみを取り出し、風船を割ると、破裂音と共に中からワインがまるまる一本出てきた。

「じゃあ、これはお二人に・・・」

そう言つて有希子と優作に渡した。

有希子は不思議そうにそれを調べていたが、やがて優作と顔を見合わせた。

もつとも、優作は見抜いてしまった様であるが・・・

探偵二人は悩み、女性陣四人は例の言葉道り純粹に楽しんでいる。

「・・・父さん、分かったんなら教えてくれよ。」

東の名探偵はお手上げのようである。

「それはダメだな新一、お前も知っているだろ？サーストンの三原則を。」

優作がそう言い、快斗が後に続いた。

「1．これから何が起こるかを説明してはいけない　2．同じマジックを繰り返してはいけない

3．種明かしをしてはいけない。そうゆことだから種明かしは厳禁ってわけ。」

「・・・父さんはマジシャンじゃないだろ・・・」

新一が呟いた。

「まあそうだが、盗一さんのレクチャーを受けたことがあるからなとにかく種明かしはできない。」

優作はそう話をまとめた。

シヨ一の再開である。

「じゃあ、今回はその第二項の線を少し越えて、風船がワインボトルに変わるマジックをお教えしましょう。

まずは上着を脱いでと・・・・・・・・・・ん？袖の中に何かあるぞ・・・・・・・・」

快斗は燕尾服を脱ぎかけでその動きを止めた。

「これは・・・・・・・・？」

袖から腕を出すと指先にはジュース入りのグラスが握られていた。

「ちよつと待って！こぼれるやる！？」

ちようど目の前に置かれたグラスを見て和葉が叫んだ。

「・・・では本題に入りましょう。まずは風船を用意して、次に・・・ナイフがいります。」

風船を左手に、ナイフを持っている。

「これで風船を割るんですが・・・・・・・・おっと！」

「きゃ~~~~」

女性陣から悲鳴が上がった。

それもそのはず、ナイフの刃が快斗の腕に食い込んでしまった。

「いや、大丈夫、大丈夫。」

快斗はナイフを引き抜き、軽く腕をさすっている。
そして上着を着直した。

こんな調子でその夜はとても楽しい物となった。

米花総合病院

（このデータは・・・）

哀は病室でアポトキシンのデータを見ていた。

（ひよっとしてこの成分を使えば・・・）

「哀君、まだ起きておったのか・・・」

博士が部屋に入ってきた。

「・・・博士、今から言うものをできるだけはやく仕入れてくれな
い・・・」

第十五話　ディナーショー（後書き）

観客は七名と読者の皆様限りの快斗のディナーショー
お楽しみいただけただけでしょうか？（笑）

と、言ってもTVでやっていたネタですけど・・・

これからもこの三文小説をよろしく願います。

ご意見・ご感想等ございましたら下の感想欄からどうぞ。

第十六話 久しぶりに同じ目線で

「ほな、またな、みんな。」

一行は、平次と和葉の見送りに東京駅に来ていた。

「うん、またね和葉ちゃん」

女三人は別れ際のおしゃべりをしている。

「乗り込むときは連絡せえよ・・・」

平次が屈んで新一に言った。

「俺も手伝つたるからな・・・一人で格好つけようとなよ、工藤。」

「へいへい・・・」

『カツコつけ』は余計だと思いつつも新一は素っ気なく返事をした。

素っ気なかったが、心の奥では感謝していた。

「でもな、平次、問題はどやって乗り込むかだろ？」

快斗が言い、みんなそれに賛同した。

あの後、データを一通り解読したのだが組織の活動内容は1980年代までしか記録されてなかったのだ。

もちろん本部の位置など分らない。

「まあ、本部の位置はそのうちCIAの本堂さんが教えてくれるだら・・・」

「・・・せやな・・・まあ、近いうちに連絡とろうや。ほな。」

そう言って新幹線に乗った。

「そういえば、新一君のお父さんとお母さんは？」

駅の階段を降りながら青子に聞かれ、新一は時計を見た。

現在時刻は午前九時である

「・・・多分、今頃、成田空港にいると思うよ。午前十時の『エールフランス』に乗るって言ってたから。」

「フランスに？」

「ああ、何か知らねーけどフランスの出版社に用があるんだってさ・
・それより、これからどうする？」

新一はみんなに聞いた。

「家に帰って寝るよ。ちよつと寝不足で・・・」

快斗はそう言つて欠伸を噛み締めた。

「お前、昨日の晩、何してたんだよ。」

「ああ、ちよつと青子とね・・・あつ！」

そう言い終わつてから、しまった、という顔をした。

「・・・確かに、青子ちゃんも眠そうだけど、何やってたんだよ？」

「あ、いや、何でもねー・・・じゃあ俺は注文してたマジック道具
取りに行くから。じゃあな、新一。」

言い終わる否や、逃げるように渋谷方面の地下鉄のホームに走つて
いった。

「あつ！ちよつと快斗！・・・もう・・・じゃあ、またね、蘭ちゃ
ん。」

「うん、またね。」

青子も快斗の後を追いかけていった。

（まてよ・・・）

一つの屋根の下に、恋人になりたてのカップル、その二人が揃つて
寝不足・・・

（まさか、あいつら・・・）

答えは一つしかない。

（早すぎるんじゃないか・・・羨ましいけど・・・）

昼中だというのに、思考がとんでもない所に飛んでしまった。

「・・・どうしたの、新一？変な顔して・・・」

蘭が不思議そうに尋ねた。

「・・・いや、何でもねー・・・」

その状況を、ある奥手な二人組に置き換えて考えていたとは、さすがに言えるわけがなかった。

「米花総合病院？今からか？」

蘭と新一は久しぶりに幼なじみとして、東京の街を歩いていた。完全に元通りとはいかないが。

「うん、彼女のお見舞いに行つてないから・・・あつ、ちょっと待つて。」

そう言うで一軒の花屋に入つていった。

（なるほどね・・・）

ユリを間違えて買って来なけりやいいけど、などと思いながら店の壁にもたれかかった。

そうしているとクラクションの音が聞こえ、黄色のビートルが止まった。

「どうしたんじゃ、新一？」

博士が窓を開け助手席越しに聞いた。

「蘭を待つてるんだよ。灰原の見舞いに行くから花を買って。」
そう言っているうちに、蘭が店から出てきた。

「あ、博士。」

「やあ、蘭君。どうじゃ二人とも、乗っていくかね？」

「じゃあ、遠慮なく。」

「博士も灰原の所に行くのか？」
新一は聞いた。

「ああ、着替えと、簡単な研究機材を持っていくところじゃよ。解毒剤のヒントがつかめたらしくてのう。」

「・・・あいつ、自分が患者だってこと忘れてるんじゃないか・・・」
「

確かに、その調子ではどっちが医者だか分からない。

新一のその態度を見て蘭が口を挟んだ。

「そんなこと言う前に、感謝ぐらいしたら？新一のために頑張ってるんだから。」

「そりゃ、分かってるけどよ、あいつ無茶しかねないから心配で・・・」
「

「・・・それ人に言える事？」

「・・・ハイハイ・・・」

（・・・やっぱり蘭にはかなわねーな・・・）

肩を落とした新一とは裏腹に、車は米花通りを快調に走っていった。

病院の前でビートルはブレーキをかけた。

「じゃあ博士、先に行ってるぜ。」

新一と蘭は車を降り、病院に入った。

「・・・ねえ、新一、彼女のことなんて呼べばいいと思う?」

エレベーターを待ちながら蘭が聞いた。

「彼女って、灰原のことか?」

新一は聞き返した。

「うん、彼女本当は十八才なんでしょ? 今まで『哀ちゃん』って呼んでたけど、それだと変だし・・・」

でも『志保さん』って呼ぶのもなんか違和感あるし・・・」

「・・・本人に聞いてみたらいいんじゃないか?・・・」
蘭、ちよつと先に行つててくれ。」

そう言つと新一はロビーに向かつて走り出した。

「あつ、ちよつと新一!・・・もう・・・」

蘭は仕方なく、エレベータに乗った。

「ジョディ先生!」

「ああ、コナン君。」

眼鏡を掛けジョディに近づいた。

「昨日の晩から哀ちゃんの病室を見張ってたけど、大丈夫みたい。彼女に近づく怪しい人物はいなかったわ。」

「そう・・・」

それもそのはずだ。

FBIに見張ってもらうから、もう見張らなくてもいいと赤井に言っただの。

そんなことを考えていると、やがてジョディが口を開いた。

「それより・・・」

ポケットからナイロン袋を取り出した。

「銃弾・・・」

ジョディは頷いた。

「そう、哀ちゃんを助けた人が使った物・・・」

コナンはそれを観察している。

「ライフルスラグ・・・その人が使ったのはショットガンか・・・」

「どう？何か分かる？」

ジョディは聞いた。

「いや、手がかりが少なすぎる・・・」

「・・・そう・・・じゃあ哀ちゃんが退院するまで見張り続けるわね・・・」

「うん、ありがとう先生。」

コナンは哀の病室へ向かった。

第十六話 久しぶりに同じ目線で（後書き）

ライフルドラッグ： 弾丸の一種。弾体側面の溝の空気抵抗で回転しジャイロ効果による射撃精度を向上させたもの。（Wikipediaより）

三日ぶりの更新です。

以後はこのくらいのペースで更新していきたいと思います。

感想・評価など頂けたら幸いです。

これからもこの小説をよろしく願います。

第十七話 鮫と海豚

コンコン

キーボードを叩く音の中に、ノックの音が響く。

「どうぞ・・・」

病室のドアが開いた。

「ああ、蘭さん・・・」

「手の具合はどう？えーと・・・志保さん？」

戸惑いながらもそう呼んでみた。

「志保でいいわ。ありがとう、もう大分良くなったから大丈夫よ。」

まだ、わずかにしびれの残る手で、蘭が手渡す花を受け取った。

それをベッドの横の机に置き、その手でパソコンを片付けた。

「・・・あなたには、謝らないといけないわ・・・」

志保は静かに言った。

「私の薬のせいであなたと工藤君は引き離されてしまった・・・ごめんなさい！」

そう言つて深く頭を下げた。

「誤らないで・・・」

蘭は言った。

「確かに、新一がいなくなつて寂しかったけど、それでやっと気付いたの。」

一緒にいるのが当然だと思つていたけど、それはとっても貴重で感謝しなきゃいけないことなんだ、って。

一緒にいた時間はとても大切だったんだ、って。

だからね、そういう意味ではとっても感謝してる・・・ありがとう、志保」

（・・・お姉ちゃん・・・）

蘭の姿が姉の姿に重なった。

感謝・・・自分を肯定してくれる人がいるなんて・・・
さまざまな思いが胸に溢れ、目頭が熱くなった。

「・・・絶対に工藤君をあなたの所に帰すから・・・」

少しだけ溢れてしまった涙を袖で拭いながら、志保は言った。

「絶対に解毒剤を完成させてみせるから・・・」

「志保・・・」

「だから・・・二人で幸せになつて・・・」

再び涙を袖で拭った。

その言葉を言うのにどれだけ勇気が必要だったか・・・

初恋の人を諦める。

自分を納得させるのにどれだけ自問自答を繰り返したか・・・

志保は、次から次へと涙が溢れてくるのを止めることができなかった。

「無理しないで、志保・・・」

蘭は志保の背中をさすりながら言った。

「あなたも新一が好きだったんでしょ・・・」

志保はしばらくしてうなずいた。

「・・・」

「・・・でも今は違うの・・・」

志保は言った。

「眼鏡を掛けていない工藤君と接して思ったの。」

私が好きなのは眼鏡を掛けている偽りの『江戸川コナン』なんだ、
って。

でも、今の眼鏡を掛けていない彼は『工藤新一』で私の好きな人じゃない。

けど、彼はその姿を望んでいるんだ、って

だから諦めよう、ってそう思ったの・・・」

「・・・」

「もう諦めた事だから、気にしなくていいのよ。」

蘭が複雑そうな顔をしていたので、そう言った。

「今、私が一番望んでいることは、工藤君とあなたが幸せになる事。だから私もがんばれるの。」

「・・・ごめんね、志保・・・」

「いいのよ・・・その代わり・・・」

蘭に笑顔を向け手を差し出した。

「私を友達にしてくれる？こんな罪作りの女でよかつたら・・・」

「・・・何言ってるのよ・・・」

蘭が言った。

「私たちはもう友達よ・・・」

差し出されたその手を握り締めた。

「しばらく、そつとしておいてやるか・・・」

ドアの外にいる博士が新一に言った。

「・・・そうだな・・・」

新一はそう言つと、今来た道を引き返した。

（悪いな灰原・・・でも、その気持ちはちゃんと受け取ったぜ・・・

）

新一は少しの間だけ眼鏡を掛け、また外した。

「……何のつもりかしら、ジン。ノックもせずにレディーの部屋に入ってきて……」

カチャッ

ベルモットの頭に拳銃が突きつけられた。

「……三つの中から選べ、一昨日勝手な行動をとった裏切り者としてこのまま撃たれるか、

そのとき何をしていたかをこの場で吐くか、もしくは『あの方』にそれを直接報告するか……」

ジンの冷酷な声が部屋に響き渡る。

「……じゃあ三つ目を選ぼうかしら……バイバイ……」

ベルモットは部屋を出ようとした。

「……待て……」

再びジンの声が響き渡る。

「なぜ、ここで話さない、同じことだろう……それとも知られたらマズイこともあるのか……」

ベルモットは振り返った。

「A secret makes a woman woman

何回言えばいいのかしら？」

「……何回聞いても反吐が出るぜ……」

第十七話 鮫と海豚（後書き）

コ哀および新志ファンの方すみません。

『初恋は失恋に終わりぬ』ということで許してください。

あつ、その他のカップルはどうなる・・・
とにかく失礼します。

第十八話 折り鶴とフロッピー

翌日

「・・・灰原の見舞い？」

放課後、いつものように下校していた矢先の事だった。

「そう、みんなと一緒に行ってこれを渡そう、って言ってたの。」
歩美が手に持っている折り鶴を見せた。

「そりゃ、良いけど、病院内であんまり騒ぐんじゃねーぞ。」

「「ハイ！」」

（・・・病人でもないのに、なんか毎日通ってるな・・・）
そう思いながらビラを配っている女の人の前を通りすぎた。

「・・・毎朝新聞号外です！」

米花総合病院

「・・・えっ？」

コナンは病室のドアを開けたが、中の様子にそのまま動きを止めてしまった。

「灰原・・・それは？・・・」

指差す方にはトランクが置かれ、本人は荷物をまとめている。

「見て分からない？今日で退院よ。」

哀は事も無げに答えた。

「おめー、大丈夫なのか？二週間入院の予定だったんだろ？」

「大丈夫よ、子供の皮膚は再生能力が高いらしいから・・・せつかく来てくれた吉田さんには悪いけど・・・」

そう言つてコナンの後ろの歩美を見た。

「・・・あれっ、元太と光彦はどうしたんだ？」

いつの間にか二人はいなくなり、そこには歩美が一人で立っていた。

「トイレに行つたみたい・・・はい、哀ちゃん！」

そう言つと歩美は折り鶴を差し出した。

「ごめんね、こんな物しかなくて・・・」

「そんなことないわ、ありがとう。誰かさんの奇妙なお土産フロベールより、よっぽどましよ。」

哀はそう言いながら意味ありげな顔でコナンを見た。

(ハハハ・・・)

「奇妙つていつたら、今会つた人も変な人だったぞ。」

ドアが開き、元太と光彦がやってきた。

「何かあつたの？」

哀が聞いた。

「さつきトイレから出てきたとき誰かにぶつかつてよ、こういわれたんだよ『お元気ですか？』って。」

「だから、それはその人が外国人だったから間違えたんですよ。」

「外国人？」

コナンが間に入つて聞いた。

「ええ、帽子で顔はよく見えなかったんですけど、金髪でしたし、日本語のしゃべり方が少し変でしたから。」

光彦が答えた。

「・・・」

「『大丈夫ですか？』と『お元気ですか？』・・・確かにニュアンスは似てるわね。」

哀はそう言いながらトランクを閉めた。

「みんな、お見舞いありがとう。私は大丈夫だから、もう帰った方がいいわよ。時間も遅いし……」

哀は時計を見ながら言った。

「じゃあ、またね明日ね、哀ちゃん。」

「学校で会いましょう。」

「遅刻すんなよ。」

そう言つて三人は帰つていった。

「……あ、新一、お帰り。」

「ああ、分かつてる、あとはどう接触するかだな……」

「……あ、新一、お帰り。」

「ああ、ただいま……おっちゃんは？」

「旅行の写真をみんなに見せてくる、つて出ていったわよ……どうせそれを口実に飲みに行くんだと思うけど……」

「ハ、相変わらずだな……」

そう言いながらランドセルと一緒に眼鏡もテーブルに置いた。

「それで、どうだった、学校は？」

「……おめー、からかつてんだろ……」

新一がそう言つと蘭は悪戯っぽく笑った。

「人生で二回目の小学校生活を満喫してるんじゃないかと思って。」

「あのなあ……」

蘭は話しながら、キッチンで夕飯の支度をしている。

「・・・でも、良いことも少しはあったよな・・・」
突然言った。

「・・・例えば、蘭の手料理が毎日食えるとか・・・」
新一は無意識にそう言ってしまうてから、その意味に気づき、途端に顔を赤くした。

「えっ・・・」

蘭も顔を真っ赤にして、お互いにしばらく何も言えないでいた。

「・・・バカ・・・」
しばらくして蘭がポツリと呟いた。

とあるバー

「・・・待たせたな、ジン・・・」
「気にするな、スネイク・・・」

一人の男がカウンター席に加わった。

「ところで例のことだが・・・」

「ああ、まかせろ、こっちには狙撃の名手が二人もいる・・・二匹の大きな青と黒の鳥の前では、さすがの気障な白い鳥でも敵わないだろうよ・・・」

第十八話 折り鶴とフロッピー（後書き）

三日おきに更新すると宣言しておきながら、遅れてしまつて申し訳ありません。

パソコンの故障によつて二週間も間が空いてしまいました。深くお詫び申し上げます。

尚、今後は予定通り三日おきに更新したいと思います。申し訳ありませんでした。重ねてお詫び申し上げます。

第十九話 脱出王

「……………えっ、お父さんが？……………はい……………分かりました、すぐ行きます。」

ピッ

「おっちゃんはどうしたって？」

夕飯を食べ終わり、テレビを見ていた新一が聞いた。電話を切った蘭は、あきれた顔をしている。

「お父さんが行きつけの居酒屋で、酔いつぶれて寝ちゃったから迎えに来てくれ、だって……………」

（ハ、あの親父……………）

時計を見ると午後九時半である。上着を羽織って二人で外に出た。

「……………風が強いわね……………」

「ああ、そうだな……………」

強風に煽られ、いろいろな物が路上を転がっている。落ち葉、空き缶、弁当殻、ビニール袋……………

やがて、新一の足下に丸めた新聞紙が転がってきた。

「……………号外？」

新一が拾い上げた新聞を見て蘭が聞いた。

「ああ……………そういえば昼間に配ってたな……………」

そう言いながら何気なく新聞紙を広げた。

「……………！！！」

「あつ、ちよつと、新一！」

その一面を見るなり新一は、目の色を変えて元来た道を引き返し始めた。

新一が投げ捨てた新聞が風に舞った。

怪盗キッド突然の予告状！

（・・・このベッドで寝るのは何日ぶりかしら・・・）

哀は天井を眺めながらぼんやり考えていた。

実際には大した日数ではないのだが、異常に懐かしく感じる。

今の自分には大きすぎるベッドも、隣の博士が立っている大きないびきも・・・

（なんだか自分の故郷に帰った気分ね・・・）
以前から思っていた。

今居る博士の家は故郷のようだと。
真の自分の居場所であると・・・

ガチャン

夜の静寂を破るように、二階でガラスが割れる音が響いた。

哀は布団をはねのけ、二階に上がった。

そして、そこに蹲っている白い怪盗を見つけた。

「・・・ハンググライダーの操作を誤りでもしたのかしら、気障な怪盗さ・・・」

白いステージ衣装が赤い血に染まっているのを見た途端、哀は言葉を失った。

「黒羽君！大丈夫！」

哀は叫びながら駆け寄った。

「・・・すまねーな、志保ちゃん・・・退院早々お邪魔して・・・」
そう言って快斗は気を失った。

「博士！手伝って！」

午後九時 杯戸宝石展

「奴だ！確保しろ！」

杯戸宝石展の屋内にその声が響き渡る。

標的である白い鳥は獲物を手中にし窓の傍に立った。

「これで終わりだ、怪盗キッド！」

三方が壁に覆われている窓際にキッドを追いつめ、中森銀三が叫んだ。

「残念ですが、そうはいきませんね警部。宝石を盗み出す程の怪盗なら、脱出王ハリー・フリーデーニの解説書を盗む事など簡単にできるといふ事に、いいかげん気づいてもいい頃ですが・・・」

「何が言いたい！」

警官隊がさらに詰め寄った。

「三方が壁に囲まれた窓際・・・四方が鉄格子で囲まれた場所からの脱出より遙かに簡単だと思いませんか？」

「減らず口はたくさんだ！奴を確保しろ！」

バン！

爆発音と共に煙幕が広がり、視界を塞がれた。

「・・・ゲホッ、ゲホッ、奴は・・・」
キッドの姿は消えていた。

「『彼を閉じこめておくにはどんなに嚴重な牢獄を用意しても足りない』と謳われた男の脱出マジック・・・それに俺と親父が手を加えたんだから見抜けるわけねーよ・・・」
屋上でそう呟き白い羽を広げた。

（・・・妙だな・・・）

着地を予定していたビルの屋上に近づいた時そう思った。

（いつもなら奴らは先回りして、俺から宝石を奪おうとするはずなのに・・・）

その場所には誰もいなかった。

（期待はずれだったな・・・）

そう思い再びハンググライダーを広げたときだった。

「ぐっ！・・・」

防弾チョッキ越しに銃弾が食い込むを感じた。

（両隣のビルか・・・）

二つの人影を確認したとき、今度は銃弾が頬をかすめた。

「・・・やけに殺気立ってるじゃねーか・・・」

平静を装い、銃弾を避けつつ、難を逃れるためハンググライダーで飛び立った。

窓ガラスを割り、阿笠邸に乗り込む。

その途端、苦痛の余り床に蹲ってしまった。

哀が寄って来て何か言っている。

しかし、他の場所にも銃弾を受け体力が限界だった。

何と言っているのか良く聞き取れない。

「・・・すまねーな、志保ちゃん・・・退院早々お邪魔して・・・」

とりあえずそれだけ言ったところで、意識が遠ざかるのを感じた・・・

・

(
.
.
青子
.
.
あ、
お
.
.)

第十九話 脱出王（後書き）

ようやく動きました、黒の組織。

快斗は大丈夫なんでしょうか？

それは次回のお楽しみです。

・・・何か忘れてるような・・・あっ、おっちゃんが寝たままだ！
これが本当の『眠りの小五郎』（笑）

先日は更新が遅れました事を重ねてお詫び申し上げます。

以後このような事がないように気を付けます。

今後も『奇術師の予言』をよろしく願います。

第二十話 怪盗の休息

（・・・ここは・・・そうか、博士の家か・・・）

快斗は寝かされていたベッドから体を起こした。

「いててっ・・・」

傷口が痛み、そこを手で庇った。

そこでやっと、足下にずっといたその存在に気付いた。

（・・・青子・・・）

ベッドの足下の方に体を預け、青子は眠っていた。

「青子ちゃんに感謝しろよ・・・」

「新一・・・」

快斗が居る部屋に、欠伸を噛み締めながら新一が入ってきた。

「おめーが撃たれたって聞いて、真夜中にも関わらずに飛んできて、夜通し看病してたんだからな・・・」

「あ、ああ・・・」

新一はベッドの横の机に二人分の朝食を置き、その近くの椅子に座った。

「・・・それで、何のつもりなんだよ？」

「ん？」

パンを嚙りながらの尋問が始まった。

「『ん？』じゃねーよ！怪盗キッドは引退したんじゃないのか、って聞いてんだよ！」

新一の大声が部屋に響いた。

「あっ、バカ、大声出すんじゃないよ、青子が起きちまう・・・」

しかし、青子は相変わらず安らかな寝息を立てていた。

こういう所も蘭に似ているのだろうか？

「・・・んで？どういつつもりだよ・・・」

答える前に快斗は体の向きを変えて、青子に毛布を掛けてやった。

「・・・お前と平次が言ってただろ？乗り込もうにも本部の場所が

分からねえ、って」

そう言つて、パンを大きく頬張った。

それを飲み込み、コーヒーを一口嚙ってから後続けた。

「だからこつちから攻めてやろうと思つたんだよ。怪盗キッドが動けば奴らも動かざるを得ない。それでその時に、

こいつをうまい具合に奴らのポケットに忍び込ませようとしたわけ。

」

快斗はハンガーに掛けてある上着から一枚のカードを取り出した。

「・・・ICチップ入りのランプか・・・抵抗する振りをしながらこれをランプ銃で撃つて、

奴らのポケットに忍ばせようとしたって訳ね・・・」

「そゆこと。」

そう言う間に快斗はトーストを一枚平らげ、「おかわり」と言つた。

「食欲は旺盛だな・・・」

空になった快斗の皿を見ながら新一は言つた。

「まあ、銃弾を数発受けた程度だからな・・・そう言えばアルセー
又は？」

「アルセー又？」

新一が怪訝に聞き返した。

「俺がいつも連れてるハトの名前・・・どこにやった？」

上着のあらゆる所を探しながら快斗が聞いた。

「この子の事かしら？」

哀が部屋に入ってきた。

「すっかり私にも懐いちゃったみたいけど・・・」

哀の肩に、ちよこんとハトが乗つてる。

「それに『その程度』ってものじゃないわよ。防弾チョッキ越しの腹部に一発、頬をかすめたのが一発、

左肩を挟るように一発、それに右肩を直撃したのが二発・・・

致命傷になり得る部分に銃弾が当たらなかったのが不思議なぐらいよ。」

そう言つて快斗に薬を渡した。

「はい、鎮痛剤。毎食後に一錠ずつ飲むこと。それから夕方には包帯を換えるから、

勝手に剥がしたりしたらだめよ・・・そんなところね・・・じゃあお大事に。」

水の入ったコップとハトを置いて地下室に戻つていった。

「・・・なあ、新一、志保ちゃんは薬剤師の免許も、開業医の免許も持つてゐることか？」

「・・・そうらしいな・・・じゃあ、俺もそろそろ行くぜ。」

新一が椅子から立ち上がった。

「おっと、ちよつと、待つてくれ。」

そう言つて快斗は紙とペンを取りだし何かを書き始めた。

「・・・ほら、これをアルセーヌの足に括り付けて飛ばしてくれ。」

紙を丸め、宝石が入った袋と共に差し出した。

「OK・・・じゃあごゆつくり。」

青子の方をちらつと見ながらそう言つて、部屋を出ていった。

「・・・あの野郎・・・」

だが、悪態を付く前に青子を隣のベッドに運ばなければならない。

快斗は青子の体を抱えようとした。

「・・・ん・・・快斗?・・・」

青子が目を覚ました。

しばしの間、青子は焦点の合わない目で快斗を見ていたが、昨日の事を思い出した途端ハツとした。

「快斗!・・・大丈夫なの？」

「・・・ああ、大丈夫だぜ青子。」

そう言つて、安心させるように青子を抱きしめた。

「・・・もう・・・心配したんだから・・・」

青子は目につつすら涙を浮かべていた。

「・・・ごめんな・・・それから、ありがとな、一晩中看病してくれて

・・・今はゆっくり休めよ・・・」

「・・・うん・・・」

青子は安心して眠りについた。

その寝顔を見て、『おかわり』をもらい損ねたことなど、頭から吹っ飛んでいた。

「・・・後で博士の家に来い？」

登校時間帯に、いつものように他の三人から離れ、コナンと哀は話していた。

「そりゃ、最初から快斗の見舞いに行くつもりだったけど、どうかしたのか？」

「・・・報告があるの・・・A P T Xの研究結果についてね・・・」

「

第二十話 怪盗の休息（後書き）

さて、次回はいよいよAPT-Xの秘密が明かされます。
次回もどうぞお楽しみに！

第二十一話 APTXの真実

「・・・快斗ぼっちゃま・・・」

「おつ、寺井^{じい}ちゃん、来てくれたのか？」

博士の家の『病室』で快斗と青子が話している時だった。

「ええ・・・傷は大丈夫なですか？」

「ああ、すつかりな。志保ちゃんの治療技術は大したもんだぜ。」

その言葉通り、手にはトランプが握られている。

新一が差し入れた『バイスクル』だ。

「それより寺井ちゃん・・・」

快斗が声を低くした。

「『パンドラ』の保管には気を付けてくれよ。世間に出回ったら大変だし、

下手したら寺井ちゃんも狙われるかもしれねえからな・・・」

「分かりました、ぼっちゃま・・・」

「頼んだぜ・・・さてと、そろそろ包帯を取り替える時間だけど・・・」

「」

「呼んだかしら？」

入り口に哀が立っていた。

「包帯を替え終わったら上に来てくれるかしら？」

「なんで？」

快斗は尋ねた。

「オリエンテーションよ・・・APTXのね・・・」

「みんな集まったみたいね・・・」

リビングには、快斗、新一、博士がいた。

「・・・解毒剤はできたのか？」

みんなを代表する形で新一が聞いた。

「ええ、できたわよ・・・前にも渡したと思うけど・・・」

そう言つて、カプセルの入ったケースをテーブルに置いた。

「・・・前にも渡したつて・・・あれは試作品だろ？」

哀はそれには答えず、無言で焼けこげたMOを机に置いた。

「・・・まさか！」

「・・・そう、このMOはピスコと遭遇した事件の時の物・・・前に試作品といつて渡した薬は

このデータに従つて作ったもの。そのデータは、今回、黒羽君が盗つてきたデータと一致するから間違いないわ。

この薬は完成品よ。」

沈黙が辺りを覆つた。

「そんな・・・じゃあ何で完全に元に戻らなかったんだ？」

「それより前に、解毒剤と似た働きをする物を飲んだでしょう？」

「・・・そうか、パイカル・・・」

「そう、パイカルのせいで免疫ができてしまったのよ。それ以来研究していたのは、その免疫を破壊する薬。

もちろん他の体内組織に影響を与えない薬をね・・・偶然にも黒羽君が盗つてきたデータの中に

体の一部分にだけ作用させる薬があつたからそれを応用すればすぐできると思うけど。」

「どのくらいで？」

哀は口元に手を当てて考えた。

「そうね・・・だいたい五日ぐらいかしらね。」

「そうか・・・」

待ち遠しいが、哀の気持ちを考えると、素直に喜ぶわけにはいかない。

新一は複雑な顔をしていた。

「・・・なあ、灰原、もう一つ聞いて良いか？」

新一は言った。

「APTXは何のための物なんだ？俺とお前は幼児化して、他の投与された人間は死に至った。

でもお前は前に言ってたよな？『毒を作っているつもりはなかった』って。

俺はお前を信じてる。毒薬じゃないなら何のための薬なんだ？」

哀は少し考えていた。

「・・・そうね・・・組織の目的とAPTXの目的は紙一重・・・」

「じゃあ、不老不死？」

快斗が聞いた。

「そう、それも目的の一つ・・・でも、それは最終目的の通過点。

目的を達すれば自然とできあがる物・・・」

哀はパソコンを取りだした。

画面にはAPTXのデータが映し出されている。

「あなたたちの考えの前提には一つ間違った所があるわ。それはAPTXが一つしかないということ。」

「なんだって!？」

新一と快斗が同時に声を上げた。

「これを見て。」

そう言ってパソコンの画面を指差した。

APTX4869A

APTX4869B

「この中で完成されたものがAタイプ。目的は、有害、もしくは機能不全の細胞だけを破壊し、初期状態に戻す薬。つまり前にも言った様に細胞を破壊する機能と細胞を再生する機能の両方を備えている。」

「・・・・・・」

「前者の機能だけを取り出して造ったのが、あなたや私が飲んだ薬。A P T XのCタイプ。」

これは研究中に偶然できた薬。全細胞が破壊され、何の痕跡も残さず死に至る史上最悪の毒薬。」

「・・・・なんて俺達は死ななかつたんだ？」
新一が聞いた。

「今の話は、成長の止まった成人に投与した場合の話し。それとは異なり私たちの体は第二次成長期の体。」

つまり細胞の再生が活発な状態の体だったから、細胞が再生され、幼児化だけですんだってわけ。」

未だかつて見たこともない研究内容に、博士も驚愕している。

「でも、その反面、後者の機能だけを取り出せば、細胞は永遠に再生され続け、不老不死薬となる。」

これがA P T XのBタイプ。この内容だけは私も見たことがないわ・・・・」

《我々は天使でもあり、悪魔でもある・・・・》

新一はその意味がようやく分かった。

「私はCタイプができた時、そのデータのAタイプに必要な部分以外を何十ものプロテクトを掛けて封印したわ。」

理由は悪用された時に取り返しがつかなくなるから。

そしてその成分を安全に扱う方法の考案中に組織から抜けたの。

幸か不幸か私の手に残った、Cタイプを飲んでね・・・・」

「なるほど・・・・それで毒を作っているつもりはなかつたって言う」

たのか・・・」

「そう、でも情けないことに、そのプロテクトは解かれてたみたいだけど・・・プログラマーを買収していたでしょう？」

他にも封印されている薬はあるから、そのプロテクトも解こうとしているのかもしれないわ・・・」

哀は言った。

「・・・でも、何でそんなに組織内が乱れてるんだ？もとはと言えば普通の研究所だったんだろ？」

「そう、それが分からないのよ。私は薬品の研究ばかりしていたから・・・」

「Bタイプのデータを、志保ちゃんは見たことがないって言ってたよな？」

快斗が哀に聞いた。

「ええ、パスワードが掛けられている・・・Cタイプのパスワードは『出来損ないの名探偵』で『Shelling Ford』・・・」

「なるほど、前段階の名探偵ってわけね・・・じゃあそこから考えると、Aタイプのパスワードは

『完成された名探偵』で『Sherlock Holmes』か？

「

快斗は言った。

「正解よ……でもこれだけは分からないわ……」

『改編された名探偵』

「これがBタイプのパスワードのヒント？」

「ええ、そうよ……」

快斗と哀が頭を抱えていたとき、横から新一の声がした。

「『エルロック・シヨルメ』綴りは『Herlock Sholmes』だ。」

「「えっ？」」

「いいから、入れてみる。」

哀は言われた通りにした。

「うそ、開いたわ……」

画面には薬の成分が表示されていた。

「『エルロック・シヨルメ』はアナグラム。『アルセーヌ・ルパン』の生みの親の『モリス・ルブラン』が

『ルパン対ホームズ』を書こうとしたとき、ドイルに抗議されて、仕方なく変えた表記。

つまり『改編された名探偵』ってわけさ。」

「な、なるほど……」

快斗は新一の知識に脱帽していた。

「でも、どうやってMOを取りに行ったんだ？」
新一が聞いた。

「さあ、誰かは知らないけど、あの事件の翌日に地下の研究室に置

いてあつたわよ。

『時が来るまで口外しないように』っていう手紙を添えてね・・・」

「！お前、何でその事を俺に言わなかったんだよ！罫かも知れないんだぞ！？」

「大丈夫よ、たとえ罫に掛けるときであつても組織の情報を外に漏らすはずがないわ。

だからこの顔も知らない人を信じてみようと思ったの・・・ひよつとしたら今回助けてくれた人かもしれないわね。」

（・・・まあ、いつか・・・）

「・・・さてと、蘭に電話してくるか・・・」

新一は椅子から立ち上がった。

「おつ、早速報告か？『五日後にお前の恋人になるから待ってる！』とでも言うつもりか？」

「ああ、お前ら程『関係』が発展してないからな・・・」

「うつ・・・言うじゃねーか・・・」

新一は勝ち誇った顔をして、電波の入りやすいベランダに出ていった。

その横で哀はデータをしながら、二人のやりとりを聞いていた。
（・・・頑張りなさいよ、工藤君、私は、いつもお互いを思っているあなた達二人のファンなんだから・・・）

第二十一話 APTXの真実（後書き）

次話は訳あつて舞台が東京以外に移ります。

その訳とは・・・

次回もよろしくお願いします。

第二十二話 大阪にて

三日後 土曜日の早朝

RRRRRRRRRR
.
.
.
.
.
.

「もしもし？」

「
・
・
・
工藤お
・
・
・
」

「おい、どうしたんだよ、服部？元氣ねえじゃねーか？」

いつもならそのハイテンション振りにあきれるところだが、今回は電話の主の元気の無さに驚いてしまった。

「実はな・
・
・
・
・
・
」

「な、なんだって!？」

「・・・たく、大阪の探偵坊主は、何で、こつもアポ無しのことが多いんだ!？」

二時間後、一行は大阪行きの新幹線の中にいた。

（よく言つぜ、服部の『毛利小五郎の二セ物出現』っていう話に
怒り狂つてたくせに……）

コナンはあきれ顔だ。

「もうっ、文句ばかり言わないでよ！旅費はあっち持ちなんだし・
・・」

眠気の余り、すでにへ口へ口になっている小五郎に蘭が言った。

「それだけじゃねー、なんで博士の所のこの娘まで居るんだ・・・」
指差す先の座席には哀が座っていた。

「大阪の街を一回見てみたいんだって。ねっ、哀ちゃん？」
「ええ。」

しかし、その答えを聞き終わる前に小五郎は寝入っていた。

「・・・ねえ、本当なの服部君の話・・・」

蘭が声を低くして言った。

「ああ、本当らしい、だから、表向きは『毛利小五郎の二セ物出現』
って事にしてすぐ駆けつけてくれて言ってたぜ。」

そう言った途端に、みんなの表情が真剣になった。

「でも、良かったわね、大阪に行く口実になる事件が偶然あつて。」

「ああ、それは俺も思ってるよ・・・神様に感謝だな・・・」

「・・・珍しいわね、あなたが神様なんて言葉を口にするなんて。」

「・・・神様に縋りたくもなるぜ・・・今回の事件だけはな・・・」
「・・・」

「おい、おっさん、こっちやで！」

新大阪駅には平次と平蔵が迎えに来ていた。

「おっさんは親父の車に乗って、残りの三人は俺に任せや。」

その言葉に小五郎と平蔵は意外な顔をした。

「珍しいなあ平次、お前が事件の捜査に参加せえへんとは・・・」

「あ、ああ、これはおっさんの事件やからな。俺は関わらん方がええやろ。」

「・・・ここや・・・」

人払いをした後、平次、新一、蘭、哀はあるホテルの前に来ていた。中に入りエレベーターに乗り、目的の部屋に着く。

「・・・和葉、入るぞ・・・」

部屋のドアを開けた。

「か、和葉ちゃん！」

「・・・蘭ちゃん・・・」

そこには・・・子供の姿に縮んだ和葉が居た・・・

「ほな、行つて来るなあ。」

和葉は部活の朝練のために朝早く家を出た。

いつもの道を歩く。

だが、この朝はいつもと様子が違っていた。

（・・・なんや、あの人達・・・）

路上に、黒い服を来た見慣れない男が三人いた。

その内の一人がリ・ダーらしき人物に話しかけ、廃墟と化している倉庫に入っていた。

（・・・あそこは鉄筋が腐りかけとつて、危ないんやで・・・）
そう思い和葉も倉庫に向かっていた。

「金は持つてきたか？」

「ああ、ここにある。」

黒服の男と対峙している白コートの男が言った。

そして、アタツシケースを取りだし中を見せた。

（な、なんやの・・・）

中で行われていることを目の当たりにし、和葉は絶句した。

「そっちこそブツは持つてきたか？」

「ああ、ここにある・・・」

（なんや、あれ？）

アタツシケースに対し、黒服の男が取りだした物は小さな薬品ケースだった。

「それで、誰にも見られなかっただろうな？」

「ああ・・・万一見られていたとしても、これだ・・・」

黒服の男は懷から拳銃を取りだした。

（逃げな・・・逃げなあかん・・・）

和葉はその男の言葉に突然恐怖を覚えた。

しかし、遅かった。

「こいつ！」

「うつ・・・」

突然布を口に当てられた。

そして、和葉の意識は遠のいていった。

「どうした？」

「この女！取引を見やがった！・・・どうしますリーダー・・・」

「フン・・・これを使え・・・」

そう言った男は一つのカプセルを取りだした。

「これは？」

「今日の取引の余りだ・・・」

カプセルを和葉の口に入れ水を流し込む。

「・・・何でしたっけ、この薬品名？」

「忘れたのか・・・APT X 4 8 6 9 Cだ・・・」

男は去っていった。

その残酷な言葉を残して・・・

「蘭と灰原は和葉ちゃんを頼む・・・」

新一は時計のベルトを締め直し、平次は帽子をかぶり直した。

「よっしゃ、工藤！行くで！」

探偵達は現場に赴いた。

「・・・どうした、傷だらけじゃないか・・・」

「ちょっと、やり合ったんですよ・・・正体不明のスナイパーと・・・」

•
L

第二十二話 大阪にて（後書き）

どうにか書き終えましたが大阪弁にいまいち自信がありません。
おかしい箇所などありましたら、ご指摘をお願いします。

ここから数話の大阪編から本格的に組織との対決が始まる予定です。
これからもこの小説をよろしく願います。

第二十三話 筒井筒

「おい、工藤！」

新一と平次は目撃証言を求めて、和葉の言っていた倉庫付近で聞き込みをしていた。

「どうだった、服部！」

「あかん、朝が早かったから、誰もそんな奴見てへんて・・・」

「くそっ！早くも手詰まりか！」

そのとき新一の携帯電話が鳴った。

新一は画面の表示をよく見て通話ボタンを押した。

「ホームズ！」

『189154！』

「よし、OK。どうした？快斗？」

電話は東京にいる気障な怪盗からだった。

『・・・その前にいいか、新一？何で合い言葉なんか言わなきゃいけないんだ？』

快斗は電話の向こうで、不機嫌そうな声を出している。

「念のためだよ。覚え易いからいいだろ？」

『お前はな・・・』

三日前に快斗と新一は、念のため合い言葉を決めていた。

新一が『ホームズ』と言えば、快斗は『189154』

1891年5月4日

ホームズが谷底に落ちて死んだと思われていた日・・・

「じゃあ、何がいいんだよ？」

『そうだな・・・ダイ・バーノンとフォールス・タンノーバーでどうだ？』

「そんな専門用語こそ、いちいち覚えられるか！・・・
で？本題は何だよ？」

話がずいぶんと外れてしまった事に気付き、新一が話題を元に戻し

た。

『おっと、忘れるところだった。今から青子とそっちに行くから……』

しばしの沈黙……そして……

「ちょっと待て！しばらく安静にしてろ、って灰原に言われただろ！？」

『その《灰原》の許可が下りたんだよ。間接に異常はないから『動いて治せ』だとさ……じゃ、そゆことで……』

「おい！」

叫んだが、時すでに遅し。

電話は切れていた。

（……ったく、こっちは和葉ちゃんが縮んで大騒動だっていうのに……）

「……快斗なんやて？」

「ああ、あの怪我知らず。こっちに来……」

そう言いかけたところで、さっき切った携帯電話が再び鳴った。

（……非通知？……）

「もしもし？」

『……生駒山だ……』

「えっ？」

『……生駒山に行け……』

「えっ、もしもし！」

……ツー、ツー、ツー……

その声も虚しく、電話からは無機質な音だけが響いていた。

フランス リヨン

「・・・Etes Vous Yusaku Kudo?・・・」
(工藤優作様ですか?)

「Oui, je voudrais voir cet homme・・・」

(はい、この人にお会いしたいのですが・・・)

優作は一枚の名刺を見せた。

「・・・!・・・D'accord・・・」
(・・・!・・・分かりました・・・)

そう言うと受付係は奥に入っていった。

【君があたり見つつををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも】

生駒山

「なあ、工藤、ホンマにあの電話信じてもええんか?」

平次は、バイクの後部座席に乗せた新一に聞いた。

「バーロー、信じるしかねえだろ。唯一の手掛かりなんだぞ・・・」

「畏やったら、どないすんねん？」

尚も、平次は尋ねる。

「それは、ねーよ。奴らに電話番号が知られてるなら、こんな面倒なことをするわけないし、

仮にそうだとしたら俺達はもう、とつくに殺されてるよ・・・」

「そやかて、こんな山登つても、何もなん・・・！?・・・」

「

言葉の途中で、平次はある物に気付き、急ブレーキを掛けた。

「これは・・・」

そこには、タイヤのパンクした一台の車が放置されていた。

驚いたことに、その車は和葉が言っていた車の外見と一致する。

「ボウズ、奇遇だな・・・」

その車の陰から一人の男が現れた。

「赤井さん！どうしてこんな所に・・・」

赤井秀一・・・もう一人の銀の弾丸がそこシルバードにいた

「変声機で声を変えて『生駒山に行け』と電話して来た奴がいてな・

・それであつたらコイツがあつたつて訳だ。」

コンコンと音をさせ、車を叩きながら言った。

「赤井さんの所にも電話が・・・」

「・・・するとボウズの所にもか？」

「うん、赤井さんが電話してきたのかとも思つたけど・・・」

「

「その様子やと違うみたいやな・・・」

新一は、車を調べようと屈み平次もそれに倣ならった。

「前輪がパンク・・・急ブレーキの跡に・・・」

「ドアの傷・・・こら、銃痕やで・・・」

「・・・と言うことは・・・」

今度は地面に這い蹲った。

「・・・・・・・・あつたぜ、服部！」

新一はナイフを取り出した。

そして、それを使って地面を掘り始めた。

(・・・・・・・・！・・・・・・・・これは・・・・・・・・)

「こっちもあつたで！空の薬品ケースに、金の詰まったスーツケースや！・・・・・・・・工藤？」

返事がないので振り返ると、新一は手を口元にあて何やら考え込んでいた。

「その弾丸がどうかしたんか？」

「・・・・・・・・いや、何でも・・・・・・・・」

その時、またしても新一の携帯電話が鳴った。

(・・・・・・・・！・・・・・・・・)

「もしもし！」

『・・・・・・・・倉吉に行け・・・・・・・・』

「ちょっと待って下さい！あなたはいつたい・・・・・・・・」

・・・ツー、ツー、ツー・・・

新一は、電話が切れるや否や、ある番号に電話を掛け始めた。

「・・・・・・・・もしもし！ジョディ先生！・・・・・・・・」

第二十三話 筒井筒（後書き）

余計かも知れませんが、優作とある男性の台詞の部分はフランス語です。

辞書を引っ張り出して書きました。

第二十四話 明日に備えて

新大阪駅

「おい、快斗、こっちやで・・・」

生駒山からの帰り道、二人は新大阪駅に快斗と青子を迎えに来ていた。

「・・・・・・・・で、傷は大丈夫なのか？」

「ああ、ばつちりな・・・」

快斗は怪我をした方の肩を回して見せた。

「・・・それで、和葉ちゃんは？」

青子が聞いた。

「幸いにも、まだ抗体ができてない状態の体だから、すぐ元には戻れるとは思うけど・・・ただ・・・」

「ただ？」

「奴らにこの事を知られたら、また狙われかねないから、あまり出歩かせるわけにはいかない。

明後日から冬休みだから、さし当たりは大丈夫だけど、困ったことにそれ以降は誤魔化しが効かない・・・」

「なるほど、二週間以内に組織を潰さないといけないうて訳か・・・」

「ああ、それがベストだな・・・」

四人は北風の吹く中をホテルへ歩いていった。

「あ、快斗君と青子ちゃん・・・」

部屋の入り口で蘭が四人を出迎えた。

「・・・こりや大したもんだな、志保ちゃん・・・」

快斗の目線の先には哀が居た。

試験管やフラスコ、薬品瓶や注射器と共に。

当の本人は検査結果を書いたメモとにらめっこをしていた。

「・・・動く実験室 ジョン・ソーンダイクだな・・・」

「何でも、推理物に結びつけないでくれるかしら？」

新一に喻えに、哀の冷やかなこえが響く。

「・・・んで、新一、さっそく収穫を効かせてくれよ。」

「まだ何も言えねえよ、確証がねえんだ。」

「そんなこと言わずにさ、教えるよ。」

「そや、工藤、勿体振らんと、はよ言えや。」

「だから・・・」

だが最後まで言い終わらなかった。

「・・・うるさいわね!!」

哀の怒鳴り声が響いた。

男性陣一同がしんとなる。

「・・・和葉さんに解毒剤を飲ませるから・・・」

「あ、そう・・・」

新一達は上の空である。

「解毒剤を飲ませるって言ってるでしょ!!」

再び哀が言った。

（どうかしたのか？）

「出てきなさい!!」

哀の声に威圧され、言われるままに三人は外に飛び出した。

「・・・そうか、服を着替えさせないといけないもんな・・・」

数分後

「平次、元に戻ったで！」

部屋には元の姿に戻った和葉がいた。

「それにしても、苦しかったわ・・・工藤君、よう三回も耐えられたなあ・・・」

そう言つて、感心したような顔をしている。

（・・・あの苦しさは、実際に体験しないと分からねんだよな・・・まあそれはさておき・・・）

「・・・みんな、明日に備えて休もうぜ・・・」

第二十四話 明日に備えて（後書き）

こんばんは。

Mr・マリックがサーストンの三原則を三つが三つ皆破ったので、相当頭に来ている七夕夜想曲です。

これを破って良いのは演出の上だけなんですが・・・

少しは師匠を見習って欲しいものです（ちなみに彼の師匠は本文中にも出てきた岐阜のマジシャンです。）

と、それはさておき、二十四話が短くてすみません。

これ以上続けると中途半端になるので、ここで切らせていただきます。

次回にご期待ください。

では、この辺で失礼します。

第二十五話 銀の弾丸還る

翌日

「Hi! cool kid!」

ジェームズの車の中からジョディが呼び掛けた。

「ジョディ先生! 例の物は?」

「これよ。」

ジョディは一枚の封筒を渡した。

新一は受け取るや否や、封筒の中身を取りだし、持っていた別の写真と見比べている。

「……………やっぱりだ……………」

(……………でも、いったい誰が……………)

「……………弾の型が一致したやと!」

「バカヤロウ! 声がでけえよ!」

快斗と青子が泊まっているホテルの部屋で新一、平次、快斗、ジョディ、ジェームズが捜査会議をしていた。

「ホンマなんか?」

「ああ、本当だよ……………」

新一は二枚のポリ袋を机に置いた。

「・・・これが灰原を助けた人が撃った弾・・・」

その内の一枚を平次に差し出した。

「・・・こっちが生駒山で見つけた弾・・・見てみる両方『ライフ
ルドスラッグ』だ・・・」

「・・・シヨットガンか？」

快斗が聞いた。

「ああ、それだけじゃねえ・・・」

新一はそう言つて、一枚の封筒を机に置き中身を取り出した。

「それぞれの旋条痕の写真だ・・・・・・ぴったり一致する。」

「・・・・・・ちゆうことはや・・・・・・」

「ああ、電話を掛けてきた人がこの弾の持ち主だとすると、その人は灰原を助けた例の謎の人物って事だ。」

沈黙が訪れた。

「それで、その人が次に行けつて言つたところが・・・・・・」

「倉吉です。」

ジエームズが聞き新一が答えた。

「・・・・・・でも、倉吉に何があるの？」

「そら、行つてみると分からのとちゃうか、先生？」

平次は帽子を被り直し、上着を着込んだ。

新一も時計のベルトを締め直し、快斗もトランプ銃を懷に収めた。

「行つて、こんな少人数で！？何があるか分からないのに・・・」

「人員の心配なら無用だぞジヨディ・・・」

部屋のドアが開いた。

「・・・・・・あなたはいつたい？」

「・・・私だよ・・・」

その男 赤井秀一は変装を説いた。

「秀一^{シユウ}・・・・・・生きてたの！？」

「ああ、FBIのトップシークレットだがな・・・」

「でも、どうやって？」

赤井は新一に目をやり、なぜか快斗にも目を向けた。

「・・・マジックが得意な怪盗さんには、こういえば分かるだろう・

ハリー・フリーデーニの時刻当てマジック・・・」

「・・・なるほど、仕込みのサクラですか・・・・・・・・」

快斗が頷いた。

「どうということだね？赤井君・・・」

ジエームズが聞いた。

「簡単なことですよ。始めに楠田^{スパイ}の死体を車に乗せておく・・・次に彼女に空砲で撃たせ、同時に袋に仕込んだ血糊を潰す・・・あたかも撃たれたように見せかけてね・・・彼女が去った後、車からこっそり抜け出せば脱出マジックの完了・・・そうすれば、中から見つかった楠田の死体が私だと、みんな錯覚してしまうというわけですよ。」

「じゃあ、あのときコナン君の携帯に触ったのは・・・」

「そう、この計画^{トリック}の下準備・・・ジョディが指紋を頼りに死体の身元確認をするのを見越してね・・・」

「でも、秀一^{シユウ}どうやってそこから移動したの？」

「仕込みのサクラ・・・本部から来たFBI調査員に警官振りをしてもらって現場に来させたのさ・・・客が自由に合わせた懐中時計の時刻を当てるという現象を、サクラを使って実現させた、

マジシャンの代名詞的存在『ハリー・フリーデーニ』の様な・・・

「

「・・・なるほど・・・警察が来れば奴らもその場に留まるはずがないし、

まさか警官が仕込みだとは夢にも思わない・・・フリーデーニもびっくりの見事なマジックですよ、赤井さん・・・」

快斗はそう言った。

怪盗キッドをうならせるのだから相当のマジックなのだろう。

「でも、しばらく死んだことにして捜査するんだったんじゃ……

……」

新一が言った。

「そろそろ潮時だと思ってな……こつちも表だって捜査ができないと不便だし、それに……」

そう言いながらドアに近づいた。

「……あの子を守らないといけないしな……」

「あの子って？」

「彼女だよ、ジョディ……今もこのドアの外にある木の植わった鉢植の陰で聞き耳を立てている……」

ドアを開けた。

「……彼女だよ……」

「は、灰原！お前いつから……」

その言葉の後を哀が続けた。

「いつから聞いてたか？一部始終よ……私もつれてってくれるわよね？」

「相当危険だぞ！何かあるかさえ分からない……それでもいいのか？」

「関係ないわ……それに、倉吉の研究所には……」

「研究所には？」

「哀はためらっていたが、決心したように言った。
「……お母さんが居るの……」

「なんだって、どういことだよ！」

「詳しいことは車で話すわ・・・」

「・・・ということだ、ジョディ。行くぞ、俺を『殺した』奴らの研究所とやらにな・・・FBI捜査官を何人か呼んである。

人員には困らないだろう・・・それから・・・」

シルバーブレット
銀の弾丸は男三人の方を見た。

「何人かに、君たちの彼女を警護させよう・・・これで安心だろう？」

そう言つて階下に降りていった。

第二十五話 銀の弾丸還る（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

バカな『赤井の帰還トリック』に付き合っていたきありがとうございます。
ざいます。

この程度のものしか作れない私の頭を許してください。

さて、伏線を残す形となりましたが次回で消化されます。

第二十六話 時を止めて

FBIの調査員と新一達を乗せた車は高速道路を走っていた。

「……………お前のお母さんは死んだって、そう言ってたよな？」
哀に新一は聞いた。

「ええ、そう聞かされていたし、そう思っていたわ……………例のカセットテープの声を聞くまではね……………」

「カセットテープ？ああ、宮野博士の知り合いの家にお前の姉さんが隠したあのテープか……………」

「そう、あのテープの中でお母さんが言ってたのよ……………」

『お母さんね……………本当は死んでないの。でも死んでるのとあまり変わらないかな……………』

人工冬眠で倉吉の研究所に保管される予定なの。

理由は今、開発中の薬が完成すればお母さんの病気が治るから……………」

『

「……………人工冬眠やと？」

「ええ、人間の体温を十七度以下に冷やして、丁度冬眠の様な状態にする事……………」

「じゃあ、その開発中の薬って言うのが……………」

「そう『完成された名探偵』APT-X4869Aタイプよ……………」
皆が沈黙した。

「でも、二十年前にそんな技術が……………」

「奴らの組織は、元首相が設立した組織。最新の技術は真っ先に入ってくるでしょうね……………」

でも二十年前だから、最新設備と言ってもかなり大きい物のはずだ

けど・・・」

大がかりな人工冬眠装置。

皆は一様に、大きなカプセル状の機械を思い浮かべた。

「・・・・・・・・そうだとすると下手には踏み込めねーな・・・・・・・・」

「

それまで黙って聞いていた新一が言った。

「人工冬眠させてある人間を運び出すのは一苦労だし、機械が大きければ尚更だ。

下手に俺達が踏み込むと、中に灰原の母さんが居るにも関わらず、証拠隠滅の為に施設を爆破しかねない・・・・・・・・」

「なるほど・・・そうね・・・」

新一の言葉を聞き、ジヨディが言った。

「・・・・・・・・じゃあ、そこで俺の出番だな！」

みんなの目が一斉に快斗に注がれた。

「こっそり侵入するのはお手の物。様子を見てから侵入すればいい。」

「

「・・・・・・・・まあ、今の所、それがベストだろうな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・工藤君・・・・・・・・」

「ん？」

哀は畳んだ薬包紙を差し出し、それを広げた。

「これは・・・」

「そう、解毒剤の前段階。パイカルによってできた免疫を壊す薬・・・」

「もうできたのか？」

「ええ、予定より一日早くね・・・」

そう言つと、どこから持ってきたのか、水の入ったコップも差し出した。

「・・・・・・・・・・どつから持ってきたんだよ・・・・・・・・・・」

「あら、黒羽君に言えば、布を被せて、ワン、ツー、スリー、でてくるわよ。」

「・・・・・・・・あ、そう・・・・・・・・」

その快斗に目をやると、カードを弄んでいた。

マジシャンの癖なのか、それとも緊張を和らげるためにしているのか・・・

いずれにしる見事な手捌きさばだった。

「早く飲んだ方がいいわよ、完全に作用するまでに一時間は掛かるわ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・その様子だと、お前は飲んだみたいだな・・・・・・・・」

「ええ、一時間と言う時間は臨床実験の結果よ。倉吉に着くまで後一時間。」

解毒剤の方は黒羽君の情報如何で飲むかどうか決めればいいわ。いかん

倉吉

「・・・・・・・・どうだ、快斗？」

無線で新一が快斗に呼び掛けた。

「・・・・・・・・・・新一か？状況はあまり思わしくないな・・・・・・・・・・」

「何かあつたのか？」

「いや、文字通り何もねえ・・・・・・・・《もぬけの空》だ・・・・・・・・」

「設備も何もないのか!？」

『ああ・・・それに、外にはタイヤの跡がある・・・この大きさは十トントラックだな・・・』

「なるほど、すでに機材は運び出されたってわけか・・・くそっ!」
その時ジョディの携帯が鳴った。

「もしもし・・・・・・なんですって!」

第二十七話 さよなら

「・・・三人共どこまで行っちゃったんだろうね？」

青子がポツリと呟いた。

「ホンマや、書き置きも残さんと何してんやろ？」

飲みかけのミルクティーのカップをテーブルに置きながら和葉も言った。

「・・・でも、あの三人の事だからきつと・・・」

蘭が言い、そして三人が三人同時にため息を吐いた。

時刻は夜八時。

どこに行ったのか？

何をしているのか？

疑問の形に成ってはいるものの、答えは分かり切っている。

あの三人のことだ。

持ち前の好奇心に駆られて、現場で捜査に必死になっているのは明白である。

タイミングを謀ったかのように、蘭の携帯が鳴った。

「新ー！今どこにいるのよ！・・・は？

岡山駅？」

その意外な言葉に、あとの二人が一斉に蘭を見た。

「今から東京に帰る！？・・・だから最終の東京行きのぞみに乗れ！？」

「・・・和葉ちゃんと青子ちゃんにもそう伝えてくれって、いったいどうしたのよ？・・・えっ！？」

それまで呆れた様な顔をしていた蘭だが、急にその表情が変わった。

「・・・うん、分かった、そう伝えとくね。」

そう言って電話を切った。

「じゃあ、みんな明日の夜にね・・・」

岡山駅で新一平次、快斗を降ろし、ジヨディは車を出させた。

FBIの捜査員は車で東京に戻るらしい。

「いよいよ、明日やな工藤、快斗・・・決戦や・・・」

ジヨディが受けた、部下からの電話の内容はこうであった。

『CIAの彼女から電話がありました。奴らの本拠地を叩く準備が整ったそうです。』

なのでFBIにも協力をしてもらいたいとの事です。』

「・・・服部、お前いいのか、こんな危険な事に関わって？
元はと言えばお前はこの件とは

何の関係もないんだぜ・・・」

「・・・アホ、なにゆってんねん・・・」

平次は言った。

「探偵やのに、親友がでっかい組織潰すの指銜くわえて見とけゆうんか

？探偵の性が許さんわ。

それにも前にもゆうたやろ、ここまで来て傍観しとく訳にはいかんのもや・・・」

そう言いながら買った切符を新一に渡した。

会話の内容の割にアンバランスだが、子供用の切符である。

「一人で何でも抱え込むなや、少しは俺らを頼れ。お前の悪い癖やで・・・それに万一、お前が死んだら、

悔いるに悔いれんからなあ・・・」

「・・・バーロー、死んでたまるかよ・・・」

新幹線がホームに滑り込んでくる音をバックに聞きながら、愛しい女ひとの顔を思い浮かべていた。

三時間後 東京 阿笠邸

「・・・しかし、よくこんな遅い時間になっても帰ろうと思ったの

う・・・」

「まあ、仕方がねーよ。こうでもしねえと決戦に間に合わねえんだ。」

眼鏡を外し、ブカブカの高校生の服を着ながら新一は言った。

蘭と快斗と青子はそれぞれの自宅に、平次と和葉は工藤邸に今は居る。

「それにしても、急な話しじゃのう・・・」

「ああ、CIAの本堂さんも連絡を取るタイミングが難しいんだろ
う・・・」

そう言つて、腕時計のベルトを緩めていた時、解毒剤を持った哀が地下から上がってきた。

「工藤君、この解毒剤には少量の睡眠薬が含まれているから、眠つてる間に作用するわ・・・そうね・・・」

そう言つて哀は腕時計を見た。

「今から飲めば、丁度七時に目が覚めるわね。その時にはもう元の体よ。」

「サンキュー・・・お前も飲むんだろ？」

新一はコップを受け取りながら尋ねた。

「ええ、あなたの後にそうするつもりよ・・・」

「そうか・・・それじゃあ、さよならだな・・・」

「え？」

「『灰原哀』としてのお前に、“さよなら”だな・・・
それから“ごめんな”思いに答えてやれなくて・・・」

「・・・病院での話し、聞いてたのね・・・」

「あ・・・お前には悪いと思ったんだけどよ・・・」

『コナン』は思わず下を向いてしまった。

だが、哀は笑っていた。

珍しい事はあるが・・・

「いいのよ、私はあなた達二人のラブコメのファンなんだから・・・」

」

「お、お前なあ……………」

その顔は真っ赤である。

「……………それじゃあ……………」

そう言つて、解毒剤と水を口に流し込んだ。

（……………さよなら……………そしてありがとう……………江戸
川コナン……………）

第二十七話 さよなら（後書き）

さて、皆さんお待たせしました。

次回から組織との対決、そして新一の復活です。

と、言いましても帰省のため次回更新は一月五日です。
申し訳有りません。

失礼します。

第二十八話 突入

頭上で自分の名を呼ぶ声がし、意識が戻っていく。

そして、ゆっくりと目を開けた

「．．．．．蘭．．．．．」

「新一！」

愛しい女ひとの顔がそこにはあった。

そして、昨日の事を思い出し、ハツとしたように自分の両手を眺めた。

「．．．．．大丈夫、元に戻ってるよ．．．．．」

「．．．．．そうか．．．．．」

そう言つて、体を起こす。

すると、蘭の顔が自分の目の高さに来た。

「．．．．．どうやら、本当に戻つたみてーだな．．．．．」

そう呟きながら蘭が持つてきた食事に手を伸ばした。

「．．．．．行くんでしょ？」

「．．．．．ああ．．．．．」

蘭の問い掛けに新一が答えた。

数時間もすればいよいよ決戦である。

「．．．．．ねえ、新一．．．私も付いて行っちゃダメかな．．．
．．．」

しばらく迷つた後蘭が言つた。

「！そ、そんな事．．．．．」

できるわけないだろ！と言いかけて口を噤つぶんだ。

（．．．．．今までもそんな言い訳で、結局俺から遠ざけてきたんだよな．．．．．）

新一は今までのことを思い返していた。

危険だ。

その理由で自分の正体をひた隠しにしてきた。それだけで、蘭を自分から遠ざけてきた。

だが、それが元で何度も蘭を泣かせただろう……

『……今回やって蘭ちゃん泣かせてしもたやる？』

いつかの和葉の言葉が蘇る。

続けざまに、蘭の言葉が頭を過ぎった。

『……どんなに危険でもいいから……わたしを悲しませることになっても構わないから……』

その時の蘭の顔が、目の前の蘭の顔と重なった。

（……これ以上俺から遠ざける訳にはいかないよな……
……）

そう判断した。

また、自分も蘭を傍に居させたかった。

「……分かった……だけど、みんなの傍から離れんなよ……」

『……こちら赤井、A地点から報告。潜入成功。これより水無諜報員との接触を試みる。以上』

「本部了解」

『……こちら、黒羽、B地点からの侵入に成功。これより内情を探りに掛かります』

「了解……気を付けろよ快斗……」

『心配すんな新一、不法侵入はお手の物さ……』
通信は一旦途絶えた。

「順調みたいね、シンイチ……」

「ええ……上手くいつてますよ……」

一行は街外れに建つあるビルを目前にしていた。

作戦本部　FBIの車だが　はビルから死角となる場所に置かれていた。

「CIAの本堂英海諜報員といつても連絡を取れるように、本拠地に侵入し彼女に小型マイクを手渡すこと。」

ジェームズは言った。

「そうすれば突入時の経路を指示してもらう事ができるし、その効率がいいからだ……そして……」

ここで全員の顔を見渡した。

「もう一人潜入してもらう。目的は内情を把握することだ……そうすれば臨機応変かつ迅速な対応が可能になる……」

これが数時間前に告げられた、CIAとの共同作戦の下準備の内容である。

潜入という役目なので、変装ができる赤井と快斗が選ばれたというわけだ。

無線に通信が入る。

『黒羽です。全三十階の内30、29、28階が司令部、27、2

6、25階が黒、24、23、21階が青、その他は倉庫及びデ
タ記録庫のようです。以上。』

「本部了解」

黒、青は各組織の略称である。

『こちら、赤井。彼女との接触に成功。すぐに彼女が連絡するそ
うだ。』

「OK秀一、そのまま彼女の警護に付いて。」

『了解』

しばしの沈黙・・・

『水無です。早速ですが進入経路を説明します。まず入ってすぐの
所にエレベータがあります、
奴らが抵抗の際に電源を落とす場合が考えられますので使用は避け
るべきでしょう。』

入り口に入ってすぐの廊下を真っ直ぐ行って二番目の角に階段があ
ります。

そこから突入してください。尚、出入り口及び一階から十階はC
I
Aが固めますので、

FBIはそれより上の階をお願いします。』

「了解」

『こちら黒羽、ちょっと良いですかジョディ先生？突入後、新一と
志保ちゃんは

別行動で最上階に上がるように言うてください。特に志保ちゃんに
は・・・』

「・・・構わないけど、どうして？」

『・・・理由はまだ言えません・・・志保ちゃん個人の問題
だからです。』

「・・・分かったわ」

『・・・建物の左に別の階段があります。そこを使えば作戦
に支障もないと思います。』

「了解・・・みんな行くわよ・・・」

対決の火蓋は切って落とされた

後方の車の中で三人の少女がその様子を見ていた。
最愛の人の無事を祈りながら・・・・・・・・

また戦場にいる男達も誓った。
絶対に彼女の元に帰ると・・・・・・・・

第二十八話 突入（後書き）

新年と共にスタートしました当小説の組織編。

この小説は組織物だと言うのに突入までに三ヶ月もかかってしまいました。

すみません。

話しは変わりますが、これまた新年と共にユニーク（重複をのぞいた）アクセス数が一万件を突破しました。

読者の皆様方、誠にありがとうございます。

また、以後もよろしく願っています。

ではこの辺で、失礼いたします

第二十九話 最上階には

(・・・・・・・・快斗の奴いたいどういっつもりなんだ・・・・・・・・)

新一と志保は快斗が言った通りに、最上階へ向かっていた。

「・・・・・・・・何だと思う？」

新一の考えを見透かしたように志保が言う。

「・・・・・・・・さあな・・・・・・・・」

「あ、兄貴・・・・・・・・どうしやす・・・・・・・・」

ウォッカが流れ込む機動隊を見て顔色を変えている。

「・・・・・・・・キールだ・・・・・・・・」

「へ？」

「キールはどこだと聞いているんだ！」

「あいつなら、用があるとか言っ外に・・・・・・・・」

「フン・・・・・・・・」

音を立ててドアを開け、ジンは外に出ていった。

バン！

新一の顔すれすれの所を弾丸が通っていった。

それが飛んできた方を見る。

「・・・・・・・・キャンティ・・・・・・・・」

その姿を確認すると志保を庇った。

「フン、FBIに子猫が二匹混ざっていたようね!」

すると、その声を合図としたかのように、銃を構えた組織員が現れた。

ざっと十人はいる。

「やつちまいな!!」

一斉に銃口を二人に向け、引き金に指をかけた。

ポン、ポン、ポン、ポン・・・・・・・・

本来聞こえるはずの銃声の変わりに、どこかで聞いたような破裂音が複数回響き渡り、

その音の数だけ向けられていた銃が吹き飛んだ。

ポン、ポン、ポン、ポン・・・・・・・・

再びその音が響く。

すると今度は、組織員達が足首を押さえて呻き始めた。

「・・・・・・・・つたく、実弾がトランプに負けるとは、黒い鳥達も

ブラックバード

情けねえなあ・・・・・・・・」

「快斗!」

上から快斗が降りてきた。

その手には、やはり例の銃が握られている。

「安心しろ、新一。アキレス腱を切ってやったから、奴らはしばらく立てねえよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・サンキュー快斗・・・・・・・・」

「礼はいいから、早く行け!お前と志保ちゃんの担当は最上階だ。ぐずぐずしていると日が暮れるぞ・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・」

「それじゃあ、俺も持ち場に着くぜ・・・・・・・・健闘を祈る・・・・・・・・」

コツ、コツ、コツ、コツ・・・・・・・・

二人の足音だけが響く。

コツ、コツ、コツ、コツ・・・・・・・・ピタッ

その足音が止まった。

二人の前には椅子に腰掛けた一人の男が背を向けて座っていた。
生憎と、肝心の人物は影になつて見えないが・・・・・・・・

「・・・・・・・・工藤新一君・・・・・・・・それに、志保だね・・・・・・・・」
その男が言った。

「・・・・・・・・！・・・・・・・・どうして、私の名前を・・・・・・・・」

志保がそう言いかけたところで、新一に手で制された。

「なるほど・・・・・・・・あなたでしたか、十八年前に事故死したと言われている人物・・・・・・・・」

そこで志保はハッした。

「・・・・・・・・そして、学会から追放されたマッドサイエンティストであり、組織のトップでもある・・・・・・・・」

男はゆっくりとした動きで振り返った。

「・・・・・・・・宮野厚史さん・・・・・・・・」

第三十話 怒りと真実

「・・・・・・・・お父さん・・・・・・・・？」

志保は力無く声を発した。

「ああ、その通りだよ、志保・・・・・・・・」

男の声が響く。

どこかで聞いたような声だ。

掴み所のない記憶を辿って行く・・・

だが、それが明確になることはなかった。

「・・・・・・・・しかし、あなたは死んだことになっているのでは・・・・・・・・」

「確かに、表向きはそうなっている・・・・・・・・」
その男が言った。

「だが、裏では・・・・・・・・」

「・・・・・・・・詳細不明、実体は悪に身を染めた、犯罪組織のトップ・・・・・・・・」

男の声を遮り、志保の声が響いた。

「その組織のやり方は、数々の人間と接触、利用して、最後には口封じに殺すという、極悪非道な物・・・・・・・・」

死んだはずの父親を目の当たりにし、混乱していた思考が、回復してきたらしい。

志保は、現実を受け止めると同時に怒りが込み上げてきた。

「・・・・・・・・その方針の下、数々の人間を殺してきた・・・・・・・・」

「お、おい、宮野・・・・・・・・」

新一が止めに入るが無駄だった。

「拳げ句の果てには、実の娘である私のお姉ちゃんまで殺した！」

怒りと悲しみに顔を歪めながら、志保は叫んだ。

その声が木霊する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返す言葉がないのか、椅子に座っている男は沈黙している。

「何とか言ったらどうなのよ！死んだ振りして犯罪組織のトップになり、殺人を重ね、娘まで殺した！

どうしてそんなことしたのよ！」

ここまでを一続きで叫んだ。

その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「・・・・・・・・分かつてる・・・・全てを話そう・・・・・・・・長くなるが、聞いてくれるか？」

二人はゆっくりと頷いた。

「・・・・・・・・六十年前の話だ。当時、日本の首相だった大黒蓮太郎が秘密裏に進めていた計画があった。

それはある研究所を建てること・・・・・・・・」

「知っています。」

新一が言った。

「・・・・・・・・そうか、君の仲間がデータを盗んだんだっただな・・・・・・・・」

「ええ・・・・でもなぜか、記録は一九八十年を境に途絶えていましたけど・・・・・・・・」

それを見たときの落胆振りを思い出す。

「そう、その年を境にこの組織は大きく変わってしまった・・・・それまでは普通の研究所だったのに・・・・・・・・」

「何があっただんです？」

「その年に、ジンが組織に入ってきた。そして、私にある研究デー

タを渡した・・・・・・・・・・」

「それはいつたい？」

「最新の細胞研究のデータだった。その時私は喜んだよ。これでエレナの危機を

回避できるかもしれないとね・・・・・・・・・・」

「お母さんの危機？」

「ああ、まだ言っていなかったな・・・・・・・・・・エレナはその数年前の事故で大量の放射線を浴びていた・・・・・・・・・・」

その直後は何ともなかったが安心はできない。

なぜなら放射線を浴びてから数年後に突然、放射線障害の症状が出ることもあるからだ。

広島や長崎の被爆者が、原爆投下から六十年以上経った今でも苦しんでいるのを知っているだろう？」

二人は頷いた。

「その時のためにも私は研究を重ねていたから、ジンがデータを持ってきたことは吉報に思えた・・・・・・・・・・」

そのデータをどこから持ってきたか知るまでは・・・・・・・・・・」

「どうということ？」

志保が聞いた。

厚史は苦々しげに顔を歪めながらこう言った。

「そのデータはCIAから盗み出した物だった・・・・・・・・・・」

第三十一話 古傷

「CIAからデータを盗んだ!？」

「ああ、その通り。諜報員も驚いただろうな……………」
厚史は言った。

「つまり、我々は犯罪に手を染めてしまった訳だ。その時からだよ、記録の保管方法が変わったのは……今話している事の殆どは私がトップに立ってから知ったことだが、それまではコンピューターに保管していた。だが犯罪に関する記録をそこに保存するわけにはいかない……………」
ハッキングを受けたらお終いだ。」

厚史はここで一旦話を切った。

「そこで、記録方法をアナログに切り替えた。つまり手書きだ。」
手書き？

余りにも原始的な方法に、二人は呆氣にとられた。

「そして、その紙を倉庫に保管し、部屋に鍵を掛け、見張りを付ける。

相手の盲点を突いた確実な方法だ。

致命傷にならない、薬品に関するデータはこれまで通りコンピューターに保存していたがな……………」

確かに、そんな原始的な方法を選ぶとは思わないだろう。

そんなことを考えていた新一だったが、ふと、あることに思い当たった。

「すると、CIAのデータもそこに……………」

「その通り。多分それが最初のアナログデータだろう……………」

「じゃあ、CIAの目的はひょっとして……………」

「多分君の考えている通りだ。奪われたデータの奪還……………」

「なるほど……………一階から十階をCIAが制圧すると言った理由は、それだったのか……………」

「名推理だ、初期のデータほど下の階に保管されている……」

「こちら本堂、状況は？」

「こちらA班、データが保管されていると思われる三階までは完全に制圧。これよりB班がデータ奪還に取り掛かります」

「了解。」

「そちらに何か変化は？」

「……… たった今、構成員の一部が五階と十三階に向かいました。その階の援護に掛かるようです。」

「了解……… FBIにも伝えるようにと……上からの指示です」

「了解」

無線の周波数を切り替える。

「こちら水無、応答願います。」

「こちら、ジエイムズ、用件は？」

「構成員の一部が十三階に向かいました。注意するように伝えてください。」

「了解」

無線のスイッチを切った。

その直後………

カチャリ

周りが騒がしいにも関わらず、その小さな音だけはやたらと耳に届

いた。

頭に銃口が突きつけられる。

「……やはり、お前だったかキール……CIAの
スバイ
回し者は……」

「……エレナが事故にあって六年後、私は組織のトップ
に立った。」

厚史は再び話し始めた。

「そこで初めて知ったよ、ジンが犯罪に手を染めており、例の細胞
研究データが盗まれた物だと。」

「そこで私はジンを説得しに行った『これ以上罪を重ねるな』と……
……」

その時のことを思い出したのか顔を曇らせた。

「だが、無駄だった……いや、むしろ逆効果だった。」

「ジンは私の意志に反して組織内に犯罪班を作り、これまで以上に罪
を犯すようになった。」

「……なぜです？」

新一が聞いた。

「ジンはただの組織の構成員。それなりの立場はあったかもしれない
せんが、」

「組織のトップ意志に反抗してまでそんなことをするとは思えません。
……」

的を射た質問だった。

「いったいどうしてだろうか？」

その問いに答えるかのように、厚史はゆっくりと体を動かした。
そして、今まで机の下にあった腕を持ち上げた。

「！」

二人は同時に息を飲んだ。

・・・その腕には手首から先が無かった。

第三十一話 古傷（後書き）

第三十二話 ジンの肩書き

「……………いたい、何があったんです……………」

新一はその腕を見て言った。

「十九年前に事故で無くした……………忘れもしない……………」

「

厚史は言った。

顔中に苦渋の色を浮かべながら。

「薬品を調査していたら、爆発を起こしてね……………一命は取り留めたものの両手の手首から先を失った……………」

そう言うと、両腕を元あった場所に戻した。

「これが運の尽きだった。薬品研究は不可能と見なされ、司令部に配属された。

その三年後に組織のトップに立ち、そこで……………」

「ジンの犯罪を知った……………」

志保が言葉を継いだ。

「その通り……………」

「でも、どうして、手を無くした事がジンの行動を止められなかった原因なの？」

志保は尋ねた。

「分かんねーか、宮野？」

新一が言った。

「犯罪に走ったってことは、ジンはおそらく組織内の過激派だったはずだ。

そんな奴らの観念からしてみると、両腕がない事は実力がないということに等しい。

そんな人がボスだったんなら、奴らがボスの命令に従うはずがない。自分が思うままに行動するだろうよ……………」

形だけの統率者。

それゆえに規範を失った組織。

志保は、組織内が乱れている理由をようやく悟った。

「その通りだよ、工藤君……だが、『奴ら』ではない。これを知っている過激派の構成員は一人だけ。

私が直接会って話をしたジンだけだ……。手を見せてしまったが為に

こんな事になるとは思わなかったがね……。その他に知っているのはベルモットただだよ……」

「ベルモット!？」

志保が驚きの声を上げた。

「そうだ、私が手首を失ってからと言うもの、身の回りの世話は彼女がしてくれた……」

エレーナに無理をさせるわけにはいかにからな……」

新一もその言葉を聞いていた。

だが、それよりも前に言ったことの方が引かかっていた。

「……組織の統率者と全く反対の意見を持つジンに、誰一人反対することなく従ったんですか？」

「その通り」

「そんなバカな……。どうしてです？」

構成員全員が事故のことを知っているのなら、誰一人反対せずに過激派に寝返るのも頷ける。

両手首を失った統率者の命令など、誰も聞かないだろう。

だが、それを明かさずして皆を従わせることが果たして可能なのか？その疑問に答えるかのように、厚史が口を開いた。

「工藤君、なぜ組織のカラーがブラックなのか分かるかね？」
否定のしぐさ。

「ある人物を連想させるためだよ……」

そう言つて、新一に答えを促した。

だが、答えたのは志保だった。

「創立者にして初代統率者の大黒蓮太郎……」

「そうだ．．．．．」

「．．．．．じゃあ、メールアドレスが『七つの子』なのは、ひよつとして．．．．．」

「そう、出資者の烏丸蓮耶を連想させるためだ．．．．．」
つまり．．．．．

「構成員は、組織の結成に貢献した人物を崇拜することを、余儀なくさせられる．．．．．」

そこで、新一はふと気付いた。

「じゃあ、まさか．．．．．」

「ああ、君の考えは大体的を射ているだろう．．．．．」
一旦言葉を句切り、こう言った。

「ジンは大黒蓮太郎の息子なのだよ．．．．．それ故に皆はジンの逆らう事をしなかった」

階下では構成員と諜報員の睨み合いが続いていた。

「．．．．．いつ気付いたの？私がCIAだつて．．．．．」
拳銃を目前に、CIA諜報員は果敢にも言つてのけた。

「FBIの連中とは似ても似つかない集団が一階から三階に、集中的に突入するのを見たときだ。

あそこには俺が盗んだデータがある。そして是が非でもそこに行く必要があるのはCIAしかない。

そう考えたときに思い出した、お前がCIAの常套句を言っていた

ことをな．．．．．」

銃がさらに頭に押しつけられる。

「なるほど、でも私は殺さない方がいいんじゃない？ 裁判官の心証が悪くなるだけよ」

「フン、そんなことはどうでもいい。お前を殺すのは、裏切り者は始末するという俺のやり方に従うからだ．．．．．」

バンッ！

銃声が響く。

だが、それはジンのものではなかった。

「また会えたな．．．．．愛しの、愛しの恋人さん？」

「ジンは狡猾い奴だった。私の弱点を公表して皆を従わせるのではなく、

私があいつに逆らえなくなったことを利用し、私の名前を騙ること
で皆を従わせた。

その時に『大黒蓮太郎の息子』という彼の肩書きが役に立ったのは
言うまでもないがね．．．．．

何も疑うことなく皆はジンに従った。

『あの方の命令』という嘘を疑うことはしなかった．．．．．ただ
一人を除いては．．．．．」

「ただ一人？」

「そう、その人物はジンに従う振りをしながら、私の意志に従い組
織解体の機会を窺っていた．．．．．」

「誰ですか？」

新一は聞いた。

聞いてみたものの、答えは何となく分かっていた。

その時、厚史の背後から足音が聞こえてきた。

「丁度、来たみたいだな…………彼女だよ……………」

その女が姿を現した。

新一は自分の予想が当たった事を知った。

「…………ベルモット……………」

第三十三話 黒い散弾

ベルモットは部屋に入ってくるなり、厚史の机のそばに歩み寄った。

「・・・・・・・・一旦、敵意はお預けにしましょうCool guy。」

・・・・・・・・

強張^{こわば}った顔をしている新一に言った。

そう言つて、持っていた銃を放つて寄こした。

「・・・・・・・・取り敢えずはな・・・・・・・・」

その銃を床に置いた。

取り敢えずの和解が成立し、厚史が口を開いた。

「どこまで話したかな・・・・・・・・」

「ベルモットが過激派を見張る内偵だという所までです。」

「そうだったな・・・・・・・・それから・・・・・・・・」

そう言いかけたとき、志保が口を開いた。

「じゃあ、こういうこと？」

そう尋ねる。

「ジン達が言っていた『あの方』っていうのは架空に近い存在だった。」

その言葉を出すことで、自分の独断であるにも関わらず、

あたかも組織のリーダーから指示を受けたように振る舞いみんなを従わせた。

つまりお父さんが直接指示をだしていたわけじゃない・・・・・・・・

「そうだ・・・・・・・・だが責任は私にある。事情がどうであれ、

私は組織の統率者だ。それに変わりはない・・・・・・・・」

それを聞いて、志保は肩の荷が降りたような安心感を覚えた。

自分の父親が、姉を殺したわけじゃない。

妙な言い逃れもせずに自分で罪を認めている・・・・・・・・

志保は少しだけ厚史に近づいた。

厚史は続きを話し始めた。

「そこからは、もう組織内は泥沼状態だった。丁度烏丸の残した資金が尽きた頃だった為に資金を入手しようと、奴らはあらゆる犯罪に手を染めた。そして、その資金入手計画の一環が有能なプログラマーやシステムエンジニアとの接触だった。」

「………どうということ？」

志保が聞く。

「あるプログラムを作らせた………彼らに接触したのは決して志保が掛けたプロテクトを解くためではなかったのだよ………」

「」

「いったい何を作らせたんですか？」

「そのプログラムの名前はあなたの方が聞き覚えがあるはずよ
01 guy………」

ベルモットがそう言った。

「………！………まさか………」

新一もようやく気付いたようだ。

「………そう、完全無欠のコンピューターウイルス『闇の男爵』ナイトバロン使
い方如何によつては大企業相手に大金を騙し取ることができる……
………これもジンの発案だけだね………」

この時点で、今まで抱えていた大体の謎は解けてた。
だが………

「こちらからもいくつか質問してもいいですか？」

新一が言う。

「どうぞ、工藤君」

厚史は許可した。

「………赤井秀一を恐れる理由は何なんですか？いくら『あなたの方』を騙かたっていたと言っても、ジン自身が恐れていたのなら、その理由が判明しているはずですよ。でも実際はそうではない。つまり、あなたが自身が彼を恐れており、その恐れているという事だけは何か

の拍子にそれをジンに漏らしたと推測できます。その為、ジンはな
ぜあなたが彼を恐れるのかを知らない．．．．．」

途端に厚史の顔が曇った。

「．．．．．それはだな、工藤君．．．．．」

「

厚史はその理由を新一に話した。

だが、その真相に息を飲んだのは新一ではなく志保だった．．．．

・

ジンは銃声のした方を向き、銃を構えている一人の男を認識した。

「．．．．．貴様は、まさか．．．．．」

「お察しの通り．．．．．」

その男はそう言うところCIA諜報員の代わりに前に出た。

そして、変装を解く。

「．．．．．赤井秀一．．．．．」

黒い大砲の散弾と銀の弾丸．．．．

ダイヤモンド・カット・ダイヤモンド．．．．

どの言葉を用いても足りないぐらいの威圧感が、そこにはあった。

「フン、銀の弾丸は使い切ったと思っていたが、フェイクだったよ

うだな．．．．．」

「そいつは違うな．．．．．我々の銀の弾丸は使用すると、心臓

を射抜くまでは地面に落ちない特殊な弾なのさ．．．．．」

そう言って赤井は銃を放った。

ジンが崩れ落ちる。

弾は両足首を貫通し、見事にアキレス腱を破損させていた。

「……………それで、まず歩けないだろう……………まあ、そこで精々捕まるのをまってるんだ……………」

そう言つて、立ち去ろうとした。

「……………じゃあ、最後に一つだけ教えてくれ……………」

ジンは蹲（しゃがみ）つたま言つた。

「なぜ『あの方』はお前を恐れている？」

赤井秀一は立ち止まつた。

「……………その様子だとお前は、俺の大切な人を二人も殺した事に、気付いてないみたいだな……………」

いつもの冷静さとはほど遠く、その言葉は怒りに満ちていた。

「……………二人だと!？」

しばしの沈黙

そして……………

「……………フン、俺達の目を盗んでアイツとそんなことまでしていやがったのか……………」

ジンが言つた。

まずは自分たちの不備を悔いるかのように……………

そして半ば蔑（あざむ）むような口調で……………

「ああ、お前達の『あの方』とやらは、子供を殺された親の怒りを恐れていたのさ……………」

「……………明美は俺の子を授（さづ）かっていたんだ……………」

第三十四話 P・S・I LOVE YOU

「お姉ちゃんが妊娠してた・・・・・・・・」

「そうだ・・・・・・・・」

重苦しそうに口を開いた。

「明美が殺された後に知ったことだ。不本意ながら、この組織の名前を出して司法解剖の結果を聞き出した・・・・・・・・父親が誰かはすぐに分かった。ベルモットから報告を受けていたからな・・・・・・・・」

「」

「なるほど・・・・・・・・あなたは我が子を殺された父親の怒りに怯えていた・・・・・・・・」

「その通り・・・・・・・・」

沈黙が訪れた。

「・・・・・・・・もう一つ聞きたいんですが・・・・・・・・」

新一が言った。

そして、厚史の横にいる女の方を見た。

「これはアンタにだ、ベルモット」

そして、こう言った。

「・・・・・・・・ジョディ先生に代わって聞く・・・・・・・・どうして歳をとらないんだ？」

「ジョディ、そっちはどうだ？」

『50パーセントは制圧したわ・・・・そっちは？』

「順調だ、それから二十一階に大きな獲物が寝ころんでるぜ・・・
誰かに確保させてくれ、俺は上に行かないと行けないからな・・・」

『OK！ヘイジに行かせるわ』
「了解」

通信が終わると携帯のメールを開いた。

愛しい人が自分に最後に送ったメールを・・・

P・S・

普通の生活を望んでいます。貴方の子供と一緒にいるような
・・・愛してます

「・・・どこから話せばいいのかしらね・・・」

ベルモットはしばらく考えていた。

「簡単に言ってしまうえば、薬の人体実験の結果こうなったのよ・・・

・・・」

「・・・人体実験・・・」

「十一年前のことだ・・・」

厚史が言った。

「薬品研究は私が抜けてからは、格段に効率が落ちていた。私が発見した理論を下地にした研究で、当の本人が抜けたんだから当然の結果だろうな・・・そんな中、長い年月を掛けてある薬が出来上がった。そして、それをベルモットに投与した。」

「その薬はまさか・・・」

「ああ、不老不死薬APT-X4869Bだ・・・だが、完全で

はなかった。なぜなら……」

「不老ではあるけど、不死ではないから……」
厚史の後をベルモットが継いだ。

「その薬は、細胞を永遠に再生するという目的は達成できていたわ。でも制作側も思いも寄らない欠点があった……。それは、体内の免疫が徐々に壊れていくというもの……」
ベルモットはそう言った。

「その結果が今の私に状態……。確かに年は取らないけど、いつ免疫に限界が来て死ぬか知れない、いわば免疫不全状態……」

「原因は不明だった。対処方法もない。少なくとも私の頭ではどうにもできなかった……」
厚史はそう言った。

「……。それで、アンタは容貌が変わらないという事を世間に気付かれない為に、一人二役で『シャロン』と『クリス』を演じ分け『クリス』の存在を世間に定着させた。そして、頃合いを見て『シャロン』を死んだことにし『クリス』として生きることにした……」

新一はそう言つてさらに続けた。

「そして、アンタは自分をこんな体にした研究とそれを引き継いだ宮野を憎んでいた。それで、港で当時の灰原を殺そうとした……」

それを聞いたベルモットはどういう訳か、少し口元を緩めた。

「さすがは東の高校生探偵なだけあるわねCool guy。でも最後の一行だけは間違いよ、確かに研究の続行には反対していたし、憎んでもいたわ。それでも彼女を殺したいとまでは思わなかったわ……」

「……。どうということだ？」

新一は眉を吊り上げた。

「相手に銃を向けておきながら、殺意はなかった？ふざけるのもい

い加減に……」

言い終わる前にベルモットが二つ目の銃を放って寄こした。

「その時に使おうとした銃よ……」

新一は仕方なくその銃を調べた。

だが、そうしている内に顔色が変わっていった。

「……なんてこった……」

銃から取りだした弾丸を手にし、しげしげと眺めている。

「……麻酔針が埋め込まれてる……」

「えっ？」

そう言つて志保もそれを見た。

「それだけじゃねえ……」

そついうとその麻酔針を引き出した。

「……博士が作ったやつにそつくりだ……」

第三十四話 P・S・I LOVE YOU（後書き）

どうも、七夕夜想曲です

話がひたすら伏線処理なので集中力を切らしている読者の皆様も多いと思いますが、もう少し続きます。
お付き合い願います。

また当小説を気に入られましたら・・・

『安い席の方は手をパチパチ鳴らしてください、
高い席の方は宝石をチャラチャラ鳴らしてください』（B Y J O
h n L e n n o n）

・・・・・・と、いうのは冗談です。
サブタイトルをビートルズの曲から取ったので悪乗りしてみました。
ぜひ、下の欄から感想をお願いします。

では、またお会いしましょう

第三十五話 針は語る

「大きさと言い、形と言い……これと比べてみる、そっくりだ……」

新一は、自分が持つている時計型麻醉銃の針を取り出し、志保に差し出した。

「当然だよ、阿笠博士の発明品を参考にしたからな……」
「え？」

二人の視線が厚史に注がれる。

「三十年前にこれを見せてもらつてな。彼は動物用に麻醉銃を作つた……確か首輪型だったかな……そして、その針を応用して人間にも作用するようにした物がそれだ。」

「そんな、まさか……」

志保は信じられないと言う顔をしている。

今にも針を取り落としそうだ。

「……いや、多分本当の事だ……」

新一が思いだした様に言つた。

「博士が前に言つてたんだ。学会で宮野博士に知り合つて、自分の発明品も気に入ってもらえたみたいだつてな……それが麻醉銃の原型だったんだ……」

そう言つて、再び小銃を手に取つた。

「良くできてる……心臓目掛けて撃てば普通の拳銃と何ら変わらない。だが、相手の皮膚をかすらせる様に撃てば麻醉針が作用する……目眩ましには打って付けた……」

新一は弾を元に戻し、ベルモットに投げ返した。

「……じゃあ、あの時は、私を殺そうとして撃つたんじゃない、私を眠らせようとして撃つた……」

思い返してみれば、五メートル程の距離にある的外す方が不自然

だ。

「そうよ、あなたとは研究所でゆっくり話がしたかったから……」

つまり、こういうことだ。

ベルモットは宮野博士からつたわる薬品研究を恨んでいるという事を動機に、志保を殺そうとした。

しかし、本当の目的は志保の保護で、その動機は行動を起こす為の隠れ蓑に過ぎなかった。

そして、ジン達に対しボロが出にくくするために実際に傷を負わせる方法を探った。

「志保を連れて帰るように言ったのは私だ」

厚史が言った。

「そうすれば、ベルモットが飲んだAPT-X4869Bの解毒剤ができるかもしれないし、できるだけ私の傍にさせた

かった……エレナの生命維持装置が切られた今となつては、唯一の肉親だからな……」

「じゃあ、お母さんは……」

志保が聞いた。

これまでにない程、真剣な顔をして。

「ああ……ジンが生命維持装置を切った……」

そう言つて、視線を部屋の間に移した。

視線の先には、三段程の棚があった。

その上に、女の人の写真と木箱が置いてあるのが確認できる。

「……そう……」

志保が状況の割に冷静な声を出した。

だが、それは一番下手な『振り』だったのかもしれない。

新一は、地面に目を落とした志保の頬に涙が伝うのを見た様な気がした。

「そのことを証言してくれますか？」

新一が聞いた。

「もちろんだ……」

厚史は立ち上がった。

「行こう、ベルモット……我々の最後の使命だ……」

「

「……宮野は先に降りてくれ、俺はもう少しここに残る……」

厚史とベルモットが部屋を出た後、新一が行った。

「どうして？」

志保が聞く。

「隅から隅まで捜査する……組織の犠牲になった人のため
にな……」

そう言つて、白い手袋を取り出した。

「お前は親父さんの傍にいてやれ、後は任せろ……」

志保は頷き部屋を出ていった。

第三十五話 針は語る（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

すみません、昨日一日風邪で倒れていましたので、更新が遅れました。

今回は更新が遅れましたが、次回更新は予定通り二月二日です。

それでは、失礼します。

第三十六話 本拠地での終焉

「手を挙げなさい！」

一階の出入り口から出てきたベルモットにジョディは叫んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベルモットは一度後ろを振り返るような仕草を見せたが、頷き、黙って手を挙げた。

その従順さには、逆にFBIのメンツが面を食らった様だ。彼女の腕に手錠が掛けられた。

その後ろから、厚史と志保がやってきた。

「志保ちゃん・・・・・・・・その人は？」

二人は一瞬、目くわばせをした。

しかし、次の瞬間には頷き、

「・・・・・・・・宮野厚史、この人が組織の統率者です・・・・・・・・」
はつきりとそう言った。

今度こそ皆が面を食らった。

『宮野』という名字を聞いた途端、すべてを理解したようだ。

「・・・・・・・・そう、じゃあ手錠を・・・・・・・・」

そう言いかけたジョディに向かって、厚史は手首から先の腕を見せた。

ジョディは再び驚いたようだ。

「えー・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・」

「私が付き添います」

志保がきっぱりと言った。

「・・・・・・・・OK、それでいいわ・・・・・・・・」

そして、二人はベルモットが乗せられた車に乗った。

「・・・・・・・・制圧完了か・・・・・・・・」

ジェームズがポツリと言った。

目の前では組織の構成員が次々と車に乗せられている。

「ええ、後はヘイジがジンを連れてきて、シンイチが帰ってきたら作戦完了よ……」

その時、ジェームズを呼ぶ声がした。

「チーフ！」

「キャメル君か？」

キャメル捜査員が一人の男を抱えてきた。

「こいつなんですが……」

「何か問題があったのかね？」

それを聞くと、キャメルはその男の袖口を捲った。

「……盲管銃創か、日本警察の前に病院だな」

「それは、そうなんですが……」

「……何だ？」

「こいつは二十一階にいた奴なんです」

「……そんなばかな、快斗君に実弾を持たせた覚えはないぞ」

二十一階は、快斗が担当した階である。

予めそこに配備されていた五人の構成員はトランプ銃で片付け、後から来た援軍は全員、自前の催眠ガスで眠らせたらしい。

もちろん実弾なんかは使っていない。

「いったい誰が撃ったというんだね？」

「……分かりません……」

二十五階

FBIとCIAの合同作戦によって、今は静まりかえっている。

当然、人の気配は皆無である……様に思ったが、階段を一人の男が上がってきた。

壁に縋りながら、一步、また一步と足を進める。とある箇所では立ち止まった。

そこの壁を軽く押す。

……隠し扉だ。

壁が内側に折れ、部屋への入り口が見えている。

男はその中に入っていた。

その部屋の中である機械の操作をしている。

突然、男の口元が緩んだ。

操作が完了したらしい。

機械とは反対側の壁際に寄り、そこに埋まっているボタンを押した。

……またしても隠し扉だ。

だが、今度は部屋ではなく、大人一人は楽に入れる大きさのパイプ管があった。

それは滑り台のように 実際そのように使うのだろう 下に延びていた。

案の定、男はそこを滑り降りていった。

『先生か？』

「ヘイジ、そっちはどう？」

『それが、変なんや……ホンマに二十一階で合つとるんか？』

「合ってるはずよ。どうかした？」

『……ジンがおらん、いたい……』
「いったいどこに？」

そう聞こうとしたが、その声は爆発音に飲み込まれた。

平次は窓から上の階を見た。

詳細は分からない。

分からないが、二十五階が炎上しているのが見えた。

『ヘイジ！急いで逃げて！』

無線から声が響いた。

「そんなことゆっても……」

爆発の衝撃で階段に瓦礫の屑が落ち、階段が塞がっている。
退路を断たれた。

どうにもできず右往左往していた時、窓ガラスが割れる音がした。

「平次！掴まれ！」

快斗が怪盗キッドの格好をして飛び込んできて、手を差し出した。

平次は一瞬で理解したようだ。

頷き、快斗の手を掴む。

それを確認した快斗は、窓の外に飛び出した。

次の瞬間……

バサッ！

ハンググライダーの開く音がした。

「平次！」

「快斗！」

平次と快斗が着陸した瞬間、和葉と青子の声がした。

二人とも爆発音を聞いて車の中から駆けつけていたのだ。

快斗はハンググライダーを畳み、建物の方を振り返った。

「………いつたい誰が………」

今や建物の一部が焼け崩れている。

「………ねえ、新一は？」

「「えっ!？」」

皆が一斉に、その声がした方を見た。

蘭が心配そうな顔をして立っている。

「そういえば………」

快斗が辺りを見回した。

どこにもいない………

「まだ、建物の中!最上階よ!」

横から、慌てたように叫ぶ声がした。

その声の主を見る。

志保だった。

「くそつ、仕掛けてあつたな！もう火が回って来やがった……」

右側にも炎。

左側にも炎。

完全に、新一は退路を断たれていた。

そして、これも仕込んであつたのだろうか？

尋常ではない速さで煙が充満してきた。

(……このまま死ぬのか……)

息が苦しくなってくる。

思わず蹲った。

(……?……)

最後の時が来たのだろうか。

どこから差し伸べられるのか、不思議な手の幻を見たような気がした。

「証拠集めの為に彼だけ残ったのよ！」

「くそつ……」

快斗は再びハンググライダーを広げた。

「無駄だ、快斗君！既に最上階に火が達している！」

ジエームズに言われた通りだった。

暗闇の中でも最上階が明るくなっているのが確認できる。

「蘭！」

志保が蘭の手を掴んだ。

蘭は今にも建物に向かって駆け出そうとしている。

「落ち着いて！」

「でも、新一が……」

「貴方まで死ぬつもり！」

蘭も必死だったが、志保も必死だった。

「新一！」

蘭が叫んだ。

しかし、その叫びも虚しく建物の一部がさらに焼け落ちる。
ガラガラと言う音も同時にした。

「新————！」

第三十七話 彼は何処へ

「・・・・・・・・どうやった、園子ちゃん」

「だめ、返事もしてくれない・・・・・・・・」

「やつぱり、アタシらが励ます事なんか無理なんかなあ・・・・・・・・」

和葉と園子は、探偵事務所の椅子に座り、暗い顔をした。

組織の本拠地から帰って来て、はや三日。

蘭は自室に閉じ籠ってしまっている。

無理もない。

自分の幼なじみ、いやそれ以上の存在であつた人間を失つたのだ。

「・・・・・・・・ねえ、新一君はどうなつたんだろ？」

青子がそう言いながら三人分のコーヒーを炒れて戻って来た。

三人はそれに口を付ける。

全員の目元には涙の跡が残っていた。

あの後、事の次第を知つた日本警察によつて崩れた建物が捜査された。

目暮警部らの奮闘にも関わらず、新一の遺体は発見されなかった。警察の見解は二つに別れた。

一つは業火によつて、骨まで灰にされてしまったという説。

あの火災は証拠隠滅の為に使われる物であつた可能性が高い。

それ相応の火力ならば、そうなくても当然だという悲観的な見解である。

もう一つは死んだ様に見せかけ、どこかで生きているという説。

名探偵である彼の事だ。

あの状況から脱出しても不思議ではない、という希望的な見解である。

しかし、事件から既に三日が経過している。

仮に生きているとすれば、彼から何らかのコンタクトがあるはずだ。そのような理由から、警察の見解は前者に傾いていった。

「分かんない……生きてて欲しい……でも……」

目の前の現実はどうしようもなかった。

外は雨。

まるで、少女達の涙であるかの様に降り続けている。

「……よう、平次」

「快斗か……」

平次が、FBIが捜査のために借りている部屋で待機しているところに快斗が入って来た。「ほんで、どうやった裏からの情報入手は？」

「……俺が怪盗キッドだった時の伝^{つて}は全部当たってみた……」

快斗が苦々しそうに言う。

「だが、新一の生存を裏付ける様な有力な情報は手に入らなかった……」

「……そうか……」

二人は暫く押し黙っていたが、やがて快斗が口を開いた。

「なあ、平次、お前は今回の事件に納得できるか？」

「いや……工藤の生死如何に関わらずに、推理的に見て納得がいかん……それに事件はまだ終わってへんはずや」

「・・・・・・・・・・そう言うと思ったぜ・・・・・・・・・・」

快斗はそう言うと、立ち上がり備え付けの黒板に向かった。

「・・・・・・・・・・宙ぶらりんのキーワードが、ぎょうさんあるからなあ・・・・・・・・・・」

快斗がチョークを手にしたのを見て平次が言った。

その快斗はというと平次の方を見て頷いた。

それを言えという合図だろう。

「まず、何でジンがあらなくなったかや」

快斗は黒板に『なぜジンがいなくなったのか?』と書いた。

「赤井はんの話しゃと、ジンの足首を撃ち抜いて、確実にアキレス腱を断裂させたそうや。そないな事になったら、まず人は立てん。仮に百歩譲って立てたとしてもや、そこからどうやって逃亡したんか、その経路が分からん。出入口はFBIとCIAが固めとったしなあ・・・・・・・・・・」

「なるほど・・・・・・・・・・それから?」

平次が発する疑問を大まか三つに分けて箇条書きにし、先を促した。

「次に工藤は生きとるかや。生きとるんか死んどるんか・・・・・・・・・・仮に生きとるんやったら何で俺らと連絡を取らへんのか・・・・・・・・・・」

「

再び長めの疑問だったので、今度は二つに分けて箇条書きにした。

再び先を促す。

「最後は、捜査の合間に見え隠れする謎の人物・・・・・・・・・・」

「ああ、志保ちゃんを助けたり、生駒山に行けって指示した・・・・・・・・・・」

「

そう言うって、黒板にそのことを書いた。

平次は暫く考えるようにしていたが、やがて口を開いた。

「いったい何者なんや?それ以前に、それらを指示したんは、同一人物なんか?そいつの目的は何なんや?それから、組織的な物なんか、単数なんか・・・・・・・・・・これに関する疑問は未知数や・・・・・・・・・・」

快斗はそれらを書き終え、チョークを置いた。

そして、平次の方に顔を向ける。

「そして、本当に事件が終わっているなら……………」

「こんな疑問は残らんはずや……………」

蘭はベッドの端に腰かけていた。

……………泣いている……………」

確かに、白い怪盗が以前に予言した様に彼は帰って来た。

だが、再び居なくなつて、もう会えないかもしれない。

でも……………まだ彼の『返事』を聞いていない。

このままなんて絶対に嫌だ！

「……………帰って来てよ、新一……………」

第三十八話 最後の雨天

「APT X 4869Bの改良版？」

志保は思わず身を乗り出していた。

といつても、物の喩えでガラスより向こうに届く筈がない。

つまり、状況はというと、志保は厚司のいる留置所に面会に来ているところだった。

本来なら志保も組織関係者として留置されているはずなのだが、組織の行なった犯罪行為に直接の関連がなかった事と、組織壊滅に協力した事が考慮され、一時釈放となったのだ。

「そんな物があるの？」

「ああ、ベルモット 組織が壊滅した今となつてはシャロンだな、シャロンがジンから入手出来た唯一の情報だ。」

穴空きのガラス越しに厚司が言った。

「いったいどんな物？」

「ある意味完成品より質が悪い。未完成品に即効性を加え、その成分を塗り薬に作り替え物だ。なぜそんな事をしたかというと、塗り薬にする事で免疫が徐々に壊れていくという欠点を解消できるからだ。そして、欠点が解消されたその薬を銃創などの外傷に使用したそうだ。即効性があるため、どんな傷も五分で完治する……」

「

「……それは、確かなの？」

志保はそう聞いた。

「おそらく、確かだ。それに、そう仮定すると説明できる事柄が一つある。」

「……ジンの失踪ね……」

「そうだ。人間はアキレス腱を切られたらまず立てないし、歩けない。当然、逃亡なんかできない。だが、傷を五分で治す事ができれ

ば話は別だ。薬を患部に塗って、五分待てば歩ける様になる。逃亡も可能だ」

「・・・・・・・・まるで即席麺ね」

志保が乾いた笑いを上げた。

「・・・・・・・・でも、逃走経路は？正面の入口はFBIとCIAが固めていた筈だし・・・・・・・・」

「それについても、回答ができる。おそらく隠し通路を使っただ。

「隠し通路？」

志保が驚いて聞き返す。

「ああ、二十五階にあって・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・パイプ状の滑り台のようになっていて。そこを滑り降りると地下に出て、そこからモーターボートで逃走できる。」

たいそう大掛かりな仕掛けだ。

アメリカのある人形劇にも出てきてもおかしくない。

そのような物が組織内にあった事に志保は驚きを隠せなかった。

「じゃあ、ジンはそこから逃走した可能性が高いって事？」

「まず、間違いないだろう・・・・・・・・」

「・・・・・・・・秀一シュウ！大丈夫なの？」

「心配ない。少し寝不足なだけだ。」

微かなデジャブを感じているところに、ジェイムズがやって来た。

「赤井君、少し休んだらどうだね？」

「そういうわけにもいかないんですよ・・・・・・・・それより、何か進展は？」

そう言いながら、目をジェイムズに向ける。

その目には、いつもポーカ―フェイスの彼にしては珍しく、ある強い感情が宿っていた。

それを何と呼ぶのかは分からない。

喻えるならば、獲物を追う狼のような、といったところだろうか。

「無いよ、赤井君。さっきのメールの内容の『ジンの逃走経路が分かった』というのが最後だ。」

「そうですか……まあ、いいでしょう。少なくとも奴が生きている事は分かりましたからね……」

そう言くと、ジヨデイの炒れたコーヒーを一気に飲み干し、再び捜査に向かった。

「……今でも彼女の事を思っているのね……」
開けっ放しのドアを眺めながら、ジヨデイは言った。

「多分な……ジンを捕まえない限り、彼は気が休まらないんだろう……」

そのようなことを話しながら、二人は部屋を出た。

「そういえば、ヘイジとカイトは？」

「ああ、あの二人も、さっきあの部屋から出て行ったよ。」

ジヨデイは何の気無しにその部屋に入っていた。

「……秀一も同じ様な事を言ってたわね……」

連日の捜査で疲れている顔をして、小さくそう言った。

ジヨデイの目の先には、快斗が、平次の言う疑問を書いた黒板があった。

外では、相も変わらず雨が降り続けている。
だが、明け方には止むようだ。

翌日、事態は急展開を見せた。

第三十九話 夜勤明け

午後五時

夜を徹しての捜査で疲れた体を休めるべく自宅のベッドで寝ていた快斗だが、突然意識を現実に戻された。

寝惚けた頭で、なぜこうも突然目が覚めたのかと辺りを見回す。

すると、携帯がけたましい音を立てて鳴っている事によやく気付いた。

快斗は不機嫌そうな顔をして安眠を妨げた元凶を手取る。

だが、電話越しの人間の方が遙かに不機嫌だった。

「コラア！快斗お！お前いったい、どうゆうつもりや！？」

電話に出るや否や、開口一番怒鳴り散らされた。

大声の関西弁を聞きながらベッドを後にする。

「なんだよ平次、えらく不機嫌じゃんか。そういう時は、牛乳を二リットル程飲んでだなあ……」

「アホな事ほざいとらんと質問に答えろ！いったい、どうゆうつもりや！」

「何の事だよ？」

そう言い終わる頃には階下に着き、平皿に被せてあるラップを外してパンを手を取った。

「誤魔化す気か！？新聞を見てみい！」

「新聞？」

予め母親が作っていたパンをかじりながら、テーブルの上に置いてあった朝刊を拡げる。

いかにも億劫だと言っている様な、ゆっくりとした動作である。

だが、一面に踊っている文字を見た途端、快斗は絶句した。

怪盗キッド宣戦布告!!

狙いは本日来日のビッグジュエル『ブルー・サンシャイン』

警視庁捜査二課

「全員出動だ!!」

中森警部の声が響く。

「警部気合い入ってますねえ先輩……………」

「まあ、前は白煙を食らったからな……………」

「ブツブツ言わずに、さっさと出動せんか!!」

「は、はい!!」

毛利探偵事務所

「……………するとや、予告状を出したんはお前やのうて別人ち

ゆう訳か？」

「ああ。俺じゃないのは確かだ。」

快斗はホッと一息付いた。

そして、

「・・・・・・にしてもよ、平次。電話に出るや否や怒鳴りつける事もないだろ？」

快斗がしかめっ面をして言った。

「しゃあないやろ。ここのソファで寝とつたら、和葉に起こされて、新聞見たら一面にデカデカとあの文字やで。考えるより前に、体が動いとつたわ」

「・・・・・・毛利探偵が居なくてよかったな」

携帯片手に怒鳴り散らしている平次の姿が脳裏に浮かぶ。ありありと想像出来てしまうのが恐ろしい。

ちなみに小五郎は警視庁からの依頼で今日一日留守だった。

「まあ、事件の全てを日本警察に言わなくて正解だったな」
快斗が言った。

実を言うと、FBIとCIAが今回の事件に関して日本警察に提供した情報は『ある犯罪結社を壊滅に追い込んだ』という部分だけである。

日本警察は当然詳細を求めたがそれには応じなかった。

なぜならCIAが回収した組織の記録の中に海外に支部があるということが示唆されており、つまるところ、まだ事件は終わっておらず、下手に情報を公開するのは危険だと判断されたからだ。

「せやな、これで事件はまだ終わってない事がはっきりしたからなあ」

平次はニヤリとしながら快斗の質問に応じた。

「今回の予告状はお前が出したもんやない。そうなるとまず、考えられるのは『キッド』に罪を着せようとする模倣犯や」

その顔は既に探偵の顔だ。

「けど、模倣犯だとすればもっと手近な物を標的にするはずだ。」

ビッグジュエルの法則』は一般には知られてないからな。わざわざそれを盗む機会を待つ必要もない。よって模倣犯の線はなしだ」

「そうすると、残りの線は、何かをしでかそうとする人物がいて、『怪盗キッド』をかたる必要があるという線。ここで注目されるのが、標的をわざわざビッグジュエルにしてあるという事。さっきも言ったように俺の標的がビッグジュエルだった事はほとんど知られてない。知っているのは数人だ」

「そうや。そして、その二つの条件に当てはまる人物、それは・・・」

二人は頷き合った。

「「工藤新一」」

「そうや、あいつは生きとったんや」
平次が言った。

「ああ、そしてジンを捕まえる作戦を立てた」

「それがこの予告状や。これでジンを誘い出して罠に掛けようちゅう作戦や」

しばしの沈黙。

そして、

「さてと、現場に行きますか・・・」

快斗がそう言い、二人は立ち上がった。

その時・・・

ガタッ！

ドアの外で物音がした。

「誰だ？」

快斗がドアを開ける。

その人物の後ろ姿が一瞬だけ見えたが、次の瞬間、階段の角を曲がり見えなくなった。

階段を降りていった人物。
見間違っはすもない。

それは蘭だった。

第三十九話 夜勤明け（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

ここ数日、携帯から投稿していたのですが、本日 いや既に昨日ですな 投稿しようと思ったたらまさかの編集トラブル。

状況を把握するため、慌てて画面の易いパソコンを立ち上げて編集し直したものの、気付けば0時10分。

更新が遅れてしまってますみません。

今回の更新は、当初の予定通り、昨日から三日後、つまり、今日から二日後の2月14日です。

では、失礼します。

第四十話 協力者

「……………まずいな……………」

「ああ、あのねーちゃんの事や。工藤を探して無茶しかねん。危険や……………」

蘭の新一に対する想いは既に証明済みだ。

どんな事をしてでも新一に会おうとするだろう。

「早いこと、見つけなきゃいけないんだけど……………」

快斗は腕時計に目を落とした。

「予告一時間前……………どうする？」

「アホ、ねーちゃんの方が優先に決まっとるやろ。下手にこんな話しとった俺らの責任でもあるんやで」

平次は帽子をかぶりなおして走り出したが、振り返ってこう言った。

「それから、和葉と中森のねーちゃんと鈴木 of ねーちゃんも呼んでくれ。俺らよりねーちゃんの行動が分かるはずや」

「分かった」

快斗はそう言い、携帯片手に平次とは反対の方向に走り出した。

米花美術館

『A班は美術館の周りを取り囲む様に固める。B班は入口付近の警備に付け。』

C班は館内に何らかの仕掛けがないか徹底的にチェックしろ。今度こそ奴を捕まえるんだ！』

無線から中森警部の声が響いた。

指示通りに警官が動く。

「警部」

「何だ？」

刑事の一人が携帯電話を片手に持っている。

「お電話です」

それを受け取る。

「はい、中森……何だ目暮か？何の用だ？……そんな物いらん、断る……なに？白馬警視總監からの指示だと！……しょうがない、連れて来い」

携帯電話の電源を切り『……ったく』と呟く。

「何だっただんですか、警部？」

「捜査の応援だよ。『息子の替わりに』と言って白馬警視總監殿から直々にな」

「……そっちはどうだ、平次？」

『アカン、まだ見つからん』

「そうか……なあ、平次、今思っただけどさ……」

「

『何や？』

暫く沈黙があつた。

「新一はキッドの恰好で今回の作戦をやるのかなあ？」

『……多分そうやる。そうやないと誘い出すのは困難やろ
うし……』

とあるビルの屋上

「首尾良く運べば今夜で決着か……………」

白服に身を纏った男が呟いた。

容貌は少年のようである。

腕時計に目を落とす。

予告三十分前

「そろそろだな……………」

そう言つて、イヤホンに全神経を集中させた。

「中森警部」

目暮警部が一人の男を伴つてこっちに向かつて来る。

「やっと来たか、目暮の狸め……………で、隣の男が捜査協力をしてくれる人物か？」

そう言つて、そちらに目をやる。

「ああ、紹介しよう。今回、捜査協力をしてくれる……………」

「工藤優作です、どうぞよろしくお願いします」

そう言つて、右手を差し出す。

中森警部は、いやになるくらい似合っている欧米風挨拶に戸惑った様だが、やがて、やや強めに手を握り返した。

「それじゃあ、私はこれで」

目暮警部はそう言つて歸つて行つた。

「中森警部、早速ですが警備体制の説明をお願いします」

「え？あ、ああ、美術館の周囲に警官を三十人、出入口に二十人、

そして………」

優作は、この説明の間中ずっと、手をポケットに入れていた。

しかし、この時は誰も気付かなかった。

そのポケットの中で盗聴機のスイッチが入れられた事に………

第四十一話 一礼と違和感

どこに・・・・・・・・どこにいるの？

そんな疑問が頭を駆け巡る

『工藤新一、アイツは生きとったんや』

ドア越しに聞いた声がリフレインする

その声の意味を理解した次の瞬間、体が動いていた

まだ糸は切れていない・・・・・・・・

角を一つ、また一つと曲がる

その度に彼がそこにいるような気がした

そして、その度に期待は裏切られた

だが、諦めない

もう一つ角を曲がる

すると、そこは大通りだった

またしてもハズレ・・・・・・・・

車道沿いの歩道に立って辺りを見渡す

「・・・・・・・・・・！あれは・・・・・・・・・・」

米花美術館

「予告五分前、配電室異常は無いか？」

「今のところ異常はありません」

「注意を怠るな！暗闇に紛れるのが、奴の常套手段だ！」

「以前の様に光に紛れる可能性もありますが、それに関しては？」
優作が聞いた。

「え？あー・・・・・・・・・・そうですね。」

中森警部は収めた無線を再び取り出した。

「C班、異常は無いか？」

「ありません」

「逃走目的ではない装置もか？例えば以前の光に紛れるような物だが」

「それも見当たりません」

「分かった、引き続き警戒を怠るな」

中森警部は無線を切った。

「どうやら、大丈夫のようですね」

優作が言う。

「ええ。とりあえず、これで灯かりが消える事も目が眩む事も無いでしょう」

中森警部が少し誇らしそうに言った。

「しかし、油断は禁物ですよ。何せ相手は怪盗キッドです。下手を

すれば『優越』が『憂鬱』になりかねませんか？」
その優作の言葉に、中森警部は再び苦い表情を作った。

「警部、予告一分前です」

「よし、全員配置に付け！」

警官達が慌ただしく動く。

「三十秒前……二十秒前……五、四、三、二、一……」

パリン！

ガラスが割れる様な音がしたかと思えば、次の瞬間灯かりが消えていた。

それと同時に『ガシャン！』という大きな音もした。

視界が塞がれる。

だが、月明かりのお陰で、一秒程で目が慣れた。

「そ、そんな馬鹿な！」

窓辺にキッドが立っていた。

それだけなら、何も驚かない。

注目すべきはキッドが握っている物だ。

それは、間違ようもなく……

「ブルー・サンシャイン！？」

それは、間違いなく寸前までショーケースの中にあった。

その方を見る。

そこには蓋の開けられたショーケースがあるだけだった。

つまり、目が眩んだ一秒の間にショーケースを開け、更に窓辺まで移動したというのか？

だが、今は方法などはどうでもいい。

「待て、キッド！」

中森警部がその方に駆け出す。

すると、キッドは一礼した。

（ん？）

なぜか突然、違和感を覚えた。

だが、そんな事を詳しく考える隙は無い。^{ひま}

今は目の前の標的に集中すべきだ。

しかし、その刹那、キッドはハンググライダーで飛び立った。

『怪盗キッドは現在北西に向かって飛行中。指示を』

だが、応答が無い。

「警部！」

中森警部はハッとしたようだった。

「こちら中森、全員全力でキッドを追え！」

やっと指示が出る。

それと同時に、美術館の外でサイレンが鳴り、パトカーが一斉に走り出した。

「どうかしたんですか警部？」

中森警部は何やら考えているようだった。「……………雰囲気
違ったんだ……………」

「は？」

「さっきのキッドはいつものキッドと雰囲気が違ったんだ……………」

・お前は何か思わなかったか？」

「ええ、気のせいじゃないんですか？キッドの真似ができる人間が
居るとは思えませんし」

「そうか……………そういえば工藤氏はどこだ？」

「…………あれ？さっきまでここに居たんですけど……………」

とあるビルの屋上

一人の男がスナイパーのスコープで米花美術館の方を見ている。

丁度、白い鳥がエサを捉えたところだ。

その顔を見る。

・・・・・・・・間違いない、この鳥は自分が追う標的だ

黒い鳥の爪を二度もすり抜けた若く賢^{さか}しい鳥。

だが、その鳥も今は仮の姿だ・・・・・・・・

「・・・・・・・・ゲームセット・・・・・・・・」

男は引き金に指を掛けた。

だが

「それ以上動くなジン、動いたら撃つぞ」

第四十二話 風向きは

「貴様……どうして!？」

ジンは、かなり意表を突かれたようだった。

その人物は影になっていく見えない。

それにも関わらず、それが誰であるかはすぐに分かった。

とすれば疑問はただ一つ。

なぜ、さっきまでスナイパーの標準越しに見ていた人物が目の前にいる？

「お前が、さっきまで狙っていたのはダミーさ……残念だったな」

まるで心を読んだかのような言葉が響いた。

その声の主は銃を向けたまま一步踏み出す。

そして、ジンをしっかりと見据え、こう言った。

「……その様子だと、まだ何か言い足りないみたいだな……

……この際だ、聞いてやっても良いぜ？」

一方のジンは自嘲的な笑みを浮かべた。

「……それじゃあ、聞かせてもらおうじゃねえか……

・工藤新一よお」

まるで、その言葉がスイッチであつたかのように、暗闇の中に新一の姿がはつきりと浮かび上がった。

「ハンググライダーが飛ぶには、適度な逆風が必要の筈……
だとすれば……」

まだ、遠くに見えるビルに向かって走り出した。

「まず一つ目だ。なぜこの場所が分かった？」
ジンが言う。

「まず、ハンググライダーが飛ぶには適度な逆風が必要だ。夜には陸から海に向かって風が吹くから、ハンググライダーの進行方向は、その逆の海から陸だ。

さらに、米花美術館から見て海は南東にある。

それらの事を踏まえて逃走経路を予測すると、米花美術館から北西方向に逃走すると考えられる。また、誤差がを考慮に入れると、高い建物から狙撃するのがベストだ。お前はそう考えるだろうと俺たちは予測したのさ。そして、米花美術館から見て北西方向にある高いビルは、この天海ビルただ一つ。だから俺はここで張っていたというわけさ。」

「フン、なかなかの推理だ。この間までガキの姿だったにも関わらず、全く衰えてないな……」

「『なかなかの推理』か。その言葉、そっくりそのまま返すぜ。『江戸川コナン』のからくりをよく調べたもんだ」

お互いに軽口を叩いているが、その間には形容しがたい威圧感が漂っていた。

「だが、俺がお前を殺そうとしなかったら、どうするつもりだったんだ？ もしくは、今回の怪盗キッドの正体に俺が気付かなかったら？」

「お前程の切れ者なら、百パーセント見破れると思ったし、どうやっても俺を殺そうとする筈さ……」

そして、こう続けた。

「敵は必ず始末するのが、お前達のやり方だからな」

階段を上がつて来る音が聞こえる。

「さてと、お喋りタイムはここまでだ。俺の仲間が来たみたいだからな。足音が聞こえるだろ？」

ドアが開く。

だが

新一は目を見開いた。

現状が理解できない。

なぜコイツがここに来たんだ？

「蘭!？」

「し、新一……………」

だがその時、一発の銃声が響いた。

弾丸が蘭の足を掠める。

ジンがライフルを放っていた。

さらに、二発目を撃とうとしている。

それが横目に止まった時、新一は考えるより先に体が動いていた。

警視庁捜査一課

「・・・・・・・・銃声が聞こえたですって!？」

電話を取った高木刑事が声を上げた。

他の刑事達も一斉にその方を見る。

「場所は?・・・・・・・・天海ビルですね、分かりました」

電話を置き指示を仰ぐ。

佐藤刑事がそれに応えた。

「行くわよ!高木君!」

「はい!」

「くっ!・・・・・・・・」

新一は腹を庇って蹲った。

すぐ後ろにいる蘭を守る事はできたが、弾丸は新一の左腹部を貫通していた。

「新一!」

「う、動くな蘭・・・・・・・・」

形勢が逆転していた。

ジンがライフルを構えて近づいてくる。

「自分の身を挺してまで守るとは、余程大切な存在らしいな」
ライフルが新一の頭に突き付けられた。

「安心しろ。彼女の死に様を見なくて済むように、真っ先に逝かせ
てやる………アバよ、名探偵………」

引き金に指が掛かる。

しかし、別の人物が先に引き金を引いた。

パシュ！パシュ！パシュ！パシュ！

サイレンサーの音が四回響いた。ジンが崩れ落ちる。

両肩と両足を撃ち抜かれていた。

「彼女を連れて、早く逃げろ！」

「あ、赤井さん………」

ジンを撃ったのは赤井秀一だった。

銃で威嚇しながらジンに近寄る。

「ここは任せて早く行け！」

新一は頷いた。

「蘭、その足じゃ立てないだろ。俺に掴まれ」

「でも、新一の方が………」

確かに、新一の方が重症だ。

そんな体で支えられるのだろうか？

「バー口。たとえ、腹を撃たれようが胸を撃たれようが、両足が立
つ限りお前だけは支えられるんだよ………」

第四十三話 任務とアクシデント

「・・・・・・・・目暮警部!？」

パトカーの中から出てきた小五郎と目暮警部を見て、高木刑事が頓狂な声を出した。

「どうしてここに？毛利さんと現場に行くんじゃないんですか？」

「ああ、そのつもりだったんだが・・・・・・・・」

小五郎が言った。

いつになく真剣な顔をしている。

目暮警部が話の続きを始めた。

「そこに行く途中で毛利君の携帯に電話があつてな。その電話の相手はこう言っていた『今晚ここで何かが起こる』とな。」

「でも、ただのいたずらつて事も・・・・・・・・」

「まあな。だが、電話の相手は変声機か何かで声を変えていたらしい。いたずらにしては手が込んでいると思わないかね？」

「・・・・・・・・なるほど・・・・・・・・」

「それに、その電話の相手はこう言っていたらしい・・・・・・・・」

その顔が一層真剣になった。

「『この件には工藤新一が関わっている』とね・・・・・・・・」

その話を聞いていた警官たちの間を、沈黙が襲った。

「じゃあ、工藤君は・・・・・・・・」

「断定はできん。だが・・・・・・・・」

その言葉は途中で遮られた。

「警部！」

警官隊の隊長の声が響いた。

「入り口から誰か出てきます！」

ジンは気付かれないように懷に手を入れた。
痛みで震える手を駆使して薬品ビンの感触を確かめる。
赤井秀一の方を見た。

建物の下に集まるパトカーの方を見ている。

この時とばかりに、薬品ビンをこっそりと取り出す。
地面にビンを置き蓋を取った。

「・・・・・・甘いな・・・・・・」

不意に頭上から声が降ってきた。

同時にビンが取り上げられる。

「偶然やって来たパトカーをミスディレクションにしようとしたんだろうが、そうは問屋が卸さないぞ・・・・・・」

取り上げたビンを興味深そうに見ている。

「これが五分で効く魔法の傷薬か・・・・・・」

「なぜ、それを知っている？」

ジンは、忌々しさと驚きが混ざった顔をして聞いた。

「こっちには有力な証言者が二人もいるんでね・・・・・・」

そう言うてから、その両方が義理の父と妹になる筈だった事に思い当たった。

明美が殺されなければ確実にそうになっていただろう。

だが、明美が死んだ今はどうなのか。

考え方によつて、二人とも親戚であるとも言えるし、そうでないとも言える。

いまいち断定ができない。

そもそも、それ以前に、そんなことを考える権利が今の自分にある

のだろうか？

(・・・・・・・・『捜査に私情は必要ない』か・・・・・・・・)

「酷い言葉だな・・・・・・・・」

「工藤君！それに蘭君！？」

入り口から出てきたのは、新一と蘭だった。

二人が近づいて来る。

「佐藤刑事・・・・・・・・蘭を頼みます・・・・・・・・」

「分かったわ」

蘭が佐藤刑事に支えられて傷の治療のため救急隊の方に向かった。

そこまで、見届けた新一はホッとしたのかパトカーに凭れ掛かった。
穏やかでなかったのが小五郎だ。

「新一！貴様！」

「待て！毛利君！」

今にも新一に殴りかかろうとした小五郎を、目暮警部が抑える。

その刹那、新一が崩れ落ちた。

高木刑事が慌てて駆け寄る。

そして、傷口を見た途端に顔色を変えた。

「腹部を打たれてます！重傷です！」

それを聞いて、目暮警部も慌てて駆け寄った。

「なんて事だ、工藤君はこんな体で蘭君を支えていたのか・・・・・・・・

」

「とにかく、もう一台救急車を……」
高木刑事がそう言いかけた。

だが、言い終わる前に、誰が呼んだのか敷地内に救急車が入って来た。

「いったい、誰が通報を？」

救急隊員の一人に目暮警部が聞いた。

「名前も名乗らずに、ここに来いとしかなかったので、よく分かりませんでした……刑事さんの一人じゃないんですか？」
「違います。どんな声でしたか？」

「……これといって特徴はありませんでしたが、女の人の声でしたね」

「女ですか……」

「ええ……では、私はこれで……」

新一を乗せた救急車が走り出すところだった。

「……佐藤刑事、新一は？」

傷の手当てを受けている時、蘭が佐藤刑事に聞いた。

「救急車で運ばれたみたいよ。詳しくは分からないけど……」
「……わたしも病院に行きます」

蘭は今にも立とうとしたが、包帯が巻かれた足ではできるはずがなかった。

「無理しちゃダメよ、まだ痛むはずだし……」

「…………でも、新一の方がもつと痛くて苦しい筈なんです。傍に居てあげたいんです……………」

「……………」

佐藤刑事は少し迷っているようだった。

一方の蘭は、机にしがみついても立とうとしていた。それを見て、

「…………分かったわ……………」

佐藤刑事が折れた。

「…………FBIの赤井秀一さんですね？」

「そうです」

「これから、事情聴取をしますが、今度こそは全てを話してくれま
すね？」

「…………保証しかねます。まだ、解明できていない部分がある
ので……………」

米花総合病院

「「蘭ちゃん！」」

青子と和葉の声がした。

手術室の前には、知らせを聞いたみんなが集まっていた。

「怪我はどうなん？」

「大丈夫、それより新一は……」

皆の顔が暗くなる。

「……先生が言うには、重傷で今夜が峠だつて……」

「

「わたしのせいだ……」

「蘭ちゃん？」

「わたしが新一を追いかけて建物の中に入ったりしなければ……」

……」

「それは違うな……」

低いテノールの声が響いた。

「……新一のお父さん……」

いつの間にか、優作が来ていた。

「気に病む事はないよ、蘭君。アイツは任務を実行しただけだ。君を守るという任務をね……」

優作はそう言った。

「心配は無用だ。アイツは君を残して逝くような奴じゃないさ……
……それに……」

そこで、一旦言葉を切った。

そして、聞き取れるか聞き取れないかと言う程小さな声で、こう言った。

「今回のアクシデントは私たちの責任でもあるから……」

「「え？」」

「すべてはアイツが説明してくれる……一人ほど来客があるかも知れないがね……」

言うだけ言つて、優作は帰っていった。

「……なあ、平次どういう意味だと思う？」

「 45 」

第四十四話 生還

『それに新一は、他にもここを離れたくない理由がありそうだ』

『服部平次、工藤と同じ高校生探偵や!』

『よお、ボウズ………何やってんだ?こんな所で………』
『』

『私はあなた達二人のラブコメのファンなんだから』

『そう、彼よ。私の胸を貫いた彼なら、なれるかもしれない……
……長い間待ち望んだ銀の弾丸に………』
『シルバープレット』

『行こうベルモット。我々の最後の使命だ』

左右を火に囲まれていた。

自分は蹲っている。
そのとき手が指し延べられた。

これが俗に言うフラッシュバックってやつか？

人間が死ぬ直前には、過去の出来事が映画のフィルムを見ているかのように、目の前を流れると言われている。
今が正にその状態だった。

今までの出来事が走馬灯のように駆け巡る。
自分は死ぬのだろうか？
そして……………

『新一』

愛しい幼なじみの顔が見える

やっぱり最後はお前か、蘭……………

この光景は、いつものものだ……………

『新一』

いや、待てよ……………こんな光景は今までに見たことがない……………

「新一」

俺は本当に死ぬのか？

それどころか、蘭の声が次第にはつきりしてくる。

「新一！」

「ら、ん・・・・・・・・・・」

（・・・・・・・・・・生きてる？）

ようやく、その事を自覚できた。

それを自覚した途端、全身のありとあらゆる感覚が戻って来る。

真っ先に、右手を包んでいる温かい感触に気付いた。

（何だろう・・・・・・・・・・）

そう思って右手を見る。（・・・・・・・・・・小さな幸せってのは、この

ことかもな・・・・・・・・・・）

自分の右手を包んでいるもの。

それは蘭の両手だった。

「ちよつと、新一、大丈夫なの？」

ベッドから起き上がった新一を見て蘭が言った。

「大丈夫・・・・・・・・・・にしても、しぶといね俺も・・・・・・・・・・」

新一は包帯越しに腹を摩った。

この調子だと大丈夫そうだ。

なぜなら、傷の痛みより、蘭の手が離れた事を気にしていたからだ。

「それより、足は大丈夫なのか？」

新一が蘭に聞いた。

だが、返事はなかった。

返事の代わりに聞こえてきたのは、小さな嗚咽の声だった。

「蘭！」

新一は慌てて目を上げる。

「どうしたんだよ？」

新一が聞く。

「寂しかったんだから……」

蘭は目を拭いながら言った。

「新一が居なくて寂しくて……もう会えないんじゃないかと思うと、すごく怖くて……組織に乗り込む前にした会話が最後かと思うと、目の前が真っ暗になって……どこまで心配させたら気が済むのよ……」

蘭は体を振るわせ、ここまでを一息に言った。

だが、流れる涙は悲しみの涙ではない。

それは、安心と嬉しさから流れる涙だった。

この事は、少なからず新一を落ち着かせた様だった。

「蘭」

そう呼びかけ、ベッドの縁を軽く叩いた。

「ここに座れよ」

蘭は、まだしゃくり上げながらも、それに従い、ベッドの縁に腰掛けた。

「……！ち、ちよつと新一！」

腰を下ろした次の瞬間だった。

蘭は新一にやさしく抱きしめられていた。

「暫く、こうさせろよ。お前が俺の事で泣く度にこうしてやりたかったんだけど、体が体だったから……その時の分まで、今こうさせるよ……な？」

「……バカ……」

蘭は新一の肩をギュツと握った。

窓から日が差し込む。

とても穏やかな時が流れていた。

訂正、穏やかでなかったのがただ一人。

「このお、新一の奴ー！」

病室の外からリアルタイムで一部始終を聞き、今にも新一の病室に飛び込んで行きそうな人物が、廊下にただ一人。

そんなのに該当する人物。

言うまでもないだろう。

毛利小五郎だ。

「まあまあ、オッサン落ち着きや。久しぶりの再会なんや。水刺すんは悪いで」

「そやそや、邪魔しんとき」

小五郎を諭しながら、袖を掴み、その暴走を抑えている二人組。

その二人は、なぜか、今回は仲がいい大阪組であった。

この『仲がいい』という事に関しては、平次と和葉が屋上に上がって何かを話した事と、深く関係があるらしいが、それはに関しては、またいつか。

「うるせえ！とにかく離しやがれ！」

「あなた、いかげんにしたらどう？」

凜とした声が響いた。

その声の主がこちらに歩いてくる。

「英理！？」

やっと小五郎の足掻きが止まった。

「蘭が誰を選ぶかについては、私達が口を挟む余儀はないし、むしろ口を挟むべき所ではないわ……………無駄な足掻きは大人気無いから止めた方が良くてよ？」

英理がさらりと言い放った。

「何だと！」

小五郎が英理の胸ぐらを掴んだ。

だが

ヒュッ！

小気味のよい風を切る音がした。

と思った次の瞬間、小五郎が床に投げ出されていた。

英理は両手を叩き小五郎に向かつて冷たくこう言った。

「暫く、そうしていることね……………」

そして、スタスタと歩いて行った。

「……………くそ、一本背負いなんか教えんじゃなかったぜ……………」

「ねえ、事件は終わったの？」

蘭が新一に聞いた。

「いや、まだみんなに真相を話してないから……………それが終わって初めて、この事件に片が付くんだ……………」

新一は時計を見た。

現在時刻は午前九時。

「蘭、みんなに伝えてくれ。『午後七時に病室に集合。そこで、全てを話す』ってな」

「午後七時？今からじゃないの？」

「ああ、キヤストの都合で、ちよつとな・・・それから、快斗には特に念を押してくれ。何があっても来いってな」

「うん、分かった。」

蘭は病室を出ていった

第四十四話 生還（後書き）

こんばんは、七夕夜想曲です。

さて、今日は二月二十六日。

二二六事件があつた日で、今年で事件からちょうど七十年だそうです。

そんな事はさておき、今後の予定について書いておきます。

更新予定ですが、勝手ながら、一ヶ月程更新をお休みさせていただきます。

なぜかと言いますと、一週間後に期末試験が控えており、さらに試験終了直後に学校の海外短期研修プログラムに参加し、三週間程アメリカに行ってくるからです。

次回更新は四月の上旬になる予定です。

一身上の都合で申し訳ありません。

それでは、失礼します。

第四十五話 三人目の生還者

「なんでしょうか、茶木警視殿」

中森警部は茶木警視の下に呼び出しを受けていた。

昨日の失敗に関して何か言われるのではないかと内心ヒヤヒヤだ。

「ああ、他でもない怪盗キッドの事なんだが……………」

茶木警視の口からとんでもない言葉が発せられた。

携帯の着信音が響く。

かつての恋人が好きだったバラード調の曲。

二つ折りの携帯電話を開く。

「メール？」

ジョディが尋ねる。

「誰から？」

秀一は携帯を開きディスプレイの表示を見る。

そして、フツと笑った。

「新一からだ。事件の真相を話すんだとさ……………」

「……………彼はどこまで知ってるのかしら……………」

「さあ……………まあ、行ってみようじゃないか」

「・・・・・・・・・・捜査を打ち切れ！どうしてですか！？」

中森警部が顔を真っ赤にして怒鳴っている。

怒り心頭という言葉の真意がよくわかる。

この状況に当てはめればこれ以上のベストマッチはないだろう。

「奴は、私が二十年間追っている宿敵にして生き甲斐なんですよ！

ここまで必死で追ってきて、いまさら諦められると思いますか！？」

「中森君、少し落ち着きたまえ・・・・・・・・」

茶木警視が言った。

こちらは、老成した性格を思わせる落ち着いた声だった。

「私にだって納得がいかんさ。だが上からの命令だ。それにただで終わる訳じゃない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・それなりの見返りがあるか？」

中森警部が厳しい顔で言った。

まるで『賄賂ならお断り』と言っているかのようだ。

警視の方もその雰囲気を読みとったのだろう。

こう続けた。

「君の苦勞を勞おぼつての昇進はあるらしいが、賄賂などではないよ。ちゃんと事情の説明をしてくれるそうだ。我々にも納得できるように・・・・・・・・」

「説明ですって？腹痛い。こんな事に関して、納得のいく説明なんか世界中探してもあるとは思えませんが・・・・・・・・」

のどいつです？釈明をしようだなんて言ってきたその『ろくでなし』は……」

「それも上から聞いたよ。君の良く知っている人物だ……こんな形で再開するとは思わなかったがね……」
その名前を口にした。

「……な！そんなばかな……」

米花総合病院一階。

診察券らしき物を指で弄んでいる男がいた。

新聞を片手で持ち長椅子に座っている。

入院患者だろうか。

すると、その男に、もう一人別の男が近づいて行き、こう言った。

「……ずいぶんとご無沙汰ですね？」

長椅子の男は新聞から顔を上げた。

「……失礼ですが、どなたでしょう？」

「お忘れですか？工藤優作です」

長椅子の男に近づいていったもう一人の男。

それは優作だった。「ああ、有名な小説家の……しかし、お見知り置きはなかった筈ですが……」

「誤魔化さなくてもいいですよ。私から見れば、あなたは透明な仮面で顔を隠しているようなものです……」

「……」

しばしの沈黙。

そして、長椅子の男は新聞を折り畳み脇に置いた。
診察券は持ったままだが。

「・・・・・・・・いやはや、参った。なぜ分かりました？」

「本気で正体を隠そうと企てるのでしたら、せめて診察券を弄ぶ癖は直しておくべきですよ？」

「・・・・・・・・なるほど。習慣というものはおそろしい・・・・・・・・」

「

そう言つて男は立ち上がった。

その男に向かつて優作は言つた。

「・・・・・・・・行きますか？」

男は時計を見た。

「・・・・・・・・そうですね。行きますか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おせーぞ、快斗」

「開口一番それはないだろう・・・・・・・・」

本を読みながら言う新一に、快斗は反論した。
七時十分前。

新一の病室には、すでに平次が来ていた。

「まだ時間内だし・・・・・・・・いや、そんな事はどうでもいい」
快斗が言つた。

「さつさと真相とやらを話せよ、三人揃つたんだから」

「まだだ。まだキャストが揃ってない」

それを聞いた快斗は、改めて病室を見渡した。

「俺と平次とお前……他に誰がいるんだ。FBIのメンバーか？」

「それもある」

新一は本を脇に置いた。

「一応、電話はしたからな……」

それを聞いてた平次が、窓から下を見た。

丁度、玄関に一台の車が停まったところだった。

「……おつ、そう言った端から、お出ましてみたいやで」

見ていた車から、ジェームズ、ジョディ、秀一が降りてきて、病院に入っていった。

「ほんなら、こっちが聞きたいことをまとめて先に言うといたるわ」
平次は椅子に着き、新一に向き直った。

「聞きたい事は三つや。まずは、どうやってあの状況から脱出したか。炎上する建物の最上階からの脱出。それも、誰にも気付かれずにや。そんな事は快斗にも無理。『脱出王フリーデーニ』でさえ怪しいわ」

快斗はムツとしたようだが、平次は構わずに続けた。

「次は、何で誰とも連絡を取らんかったんかや。どんな事情があったんか知らんが、それで毛利のねーちゃん泣かしたんや。ちゃんと釈明してもらうぞ」

平次はさらに続けた。

「ほんで最後は、この一連の事件の裏にある……」

「謎の人物はいったい誰なのか？」

平次の声を遮り、ドアの方から声がした。

「赤井さん！」

FBIの面々が到着したところだった。

「それは我々も知りたいね」

新一は時計を見た。

「七時一分前……そろそろだな」

その時、ドアをノックする音が三回響いた。

「お出ました……どうぞ」

ドアが開いた。

一人の男が病室に入ってきて来る。

新一以外の全員が呆気にとられた。

その人物の恰好に。

「お前……何者だ!？」

快斗が声を上げる。

怪盗キッドがそこに立っていた。

「私を忘れたのか、快斗？」

「えっ?……」

聞き覚えのある声だった。

「彼が今回の事件で要となる人物。『灰原』を助け、俺達に気づかれないように動いていた蔭の調査員……」

新一が説明し、その男は目深に被っていたシルクハットをとった。

「黒羽盗一さんだ」

第四十六話 再会

「親父・・・・・・・・」

「ひさしぶりだな、快斗・・・・・・・・」

盗一はマントを翻し、スーツ姿になった。

そして、マントとシルクハットを部屋の隅に放り、皆の方に向き直った。

快斗は父親に向かってさらに問いかける。

「生きてたのか・・・・・・・・」

「ああ、奴らが何か仕掛けてくるのは分かっていたからな。難を逃れるのは容易かった」

そう言つて、病室の折り畳み椅子に腰掛けた。

「なら、どうして今まで隠れてたんだよ！」

快斗は追求する。

盗一を代弁する形で、新一がその疑問に答えた。

「しょうがないさ。盗一さんは極秘調査官なんだ・・・・・・・・IC
POのね」

警視庁捜査二課

中森銀三は自分の机に着き、パイプをふかしていた。

その面持ちは、お世辞にも良いとは言えない。

「まさか、こんな結末が用意されていたとはな・・・・・・・・」

昼間にやって来た男の事を思い返していたのだらう。

そう言つて、パイプを再び口にくわえ、ゆっくりと煙を吸った。

その煙を吐き出してから、ポツリと呟いた。

「複雑だな……」

「ごめんね、青子ちゃん、荷物持たせちゃって」

「いいの。このくらいどうって事ないよ」

他愛もない話しをしながら、二人は新一の部屋に向かっていた。

「……どうしたんだろ？」

「さあ？」

病室の中が騒々しい。

「……開けるよ」

「……うん」

そして、部屋の戸を開けた。

「ICPOの極秘調査官!？」

快斗が本日二回目の大声を上げた。

「親父が!？」

快斗は顔色を変え、平次はただ驚き、秀一は興味深そうに押し黙っている。

「少し落ち着け、快斗……盗一さんの話を聞けば……」

「」

「おじさん!？」

皆が一斉に入り口を見た。

「青子・・・・・・・・」

目を見開いた青子が、その後ろには同じように驚愕した蘭が立っていた。

「・・・・・・・・青子ちゃんか。久しぶりだね・・・・・・・・」

「どうして・・・・・・・・」

盗一の声を聞き思考が戻ってきたのだろう。

青子は混乱しているようだった。

「快斗も青子ちゃんも聞いてくれ」

新一が言った。

「盗一さんの話を聞けば、全てが解決する・・・・・・・・残された疑問もね」

新一は『どうぞ』と手で合図し、弁論の席を盗一に譲った。

第四十六話 再会（後書き）

三週間振りに日本に、このサイトには一ヶ月ぶりに復帰した七夕夜想曲です。

いやー、良い経験をしてきました。

いつか、三週間のアメリカでの生活について旅行記でも書こうかと思いますが、今は置いといてと。

さてと、この小説もいよいよ大詰め、最後の伏線処理となりました。ここまで付き合っていたいただいた読者の皆様には感謝感激、お礼の言葉もあります。

ありがとうございます。

次回からいよいよ事件の全貌が明かされます。
お楽しみに。

では、失礼します。

第四十七話 ICPO

「……………本計画に賛成の方は挙手を願います」

断固とした意志を感じさせる、低い声が響いた。

おずおずと、しかし全員が手を挙げる。

「賛成多数と見なします。よって原案は可決されました。これにて緊急作戦議會を終了いたします」

その場の緊張が一瞬にして解かれた。

ガヤガヤと部屋から出ていく他の議員を見ながら、議長はポツリと呟いた。

「……………ついに、実行に移される時が来たか……………」
そして、たばこの火を揉み消した。

「初のパリ公演はいかがでしたか、盗一様？」

「ああ、うまくいった……………もっとも改善の余地はあるがね……………」

疲れたのだろう。

盗一はそれだけ言つと椅子に腰掛けた。

「今日の演目は2453番ルーティーンだったからな……………」
「なるほど、盗一様が演じた回数が最も多いルーティーンにして、」

FISMで初出場、初優勝を飾った作品……」

寺井がなるほど頷いた。

ルーティーンとはマジック全体の運びの事で、FISMとは世界規模のマジック大会のことである。

ちなみに、盗一のレパートリーの数は一軽く四千を超える。

それには、カード、コインを中心とするクローサップマジックから人体切断といったステージマジックまで含まれており、その一つにおいて、完成度が非常に高い。

その為、世界一を公式に認められるのは時間の問題だと言われている。

それ程までの噂にも関わらず、盗一はショーの反省点をノートに書き記した。

そして、寺井の炒れたコーヒーに口を付けた。

その一時間後、盗一は古びた空き倉庫の前にいた。

パリの裏通りにあるもので、数日前、ショーの準備の合間に見つけたものだ。

盗一はこの場所が気に入っていた。

そこは人目につかない為、人知れずマジックの練習をするにはうってつけであり、なにより静かなのがいい。

静寂は思考を冴えさせ、自分のマジックに新たなアイデアを与えてくれる。

それは技を磨いていく上で、何より大切な事だ。

だが、この日の静寂、そして、この日からの静寂は崩れた。

倉庫のドアに手を掛けたその時だった。

盗一は中から人の声がする事に気付いた。

(・・・・・・こんな時間にいったい誰が・・・・・・)

古い倉庫の為、スライドドアのドアとドアの間に隙間が出来ている。

念のため、盗一はその隙間から中の様子を窺う事にした。

後々考えるとその策略は成功でもあり失敗でもあった。

「上手く入手できましたよ、チーフ」

「そうか・・・・・・」

中には二人の男が居た。

その二人がまともな人間では無いことは一目瞭然だ。

真っ黒なコートに身を包み、帽子を目深にかぶっている。

これを不審者と言わずして何と言っだろう。

「それで、ブツは？」

「これです・・・・・・」

その一人が懷に手を入れ何かを取りだした。

(・・・確かあれば・・・)

「アジア最大にして最古のアメジスト『パール・クラシック』です」

予想通りであった。

盗一は、宝石、時計などに関しても、かなり知識を持ち合わせている。

なぜなら、アクセサリー如何で、マジシャンの印象が変わってしまう場合も少なくないからである。

例えば、何もしていない両手を見せた場合と、銀色の時計を左手に はめ、両手を見せた場合では、確実に後者の方が見栄えが良くなる。その辺のセンスを掛け備えたマジシャンが盗一であった。

しかし、その知識を頼りにするならば、その宝石は個人所有のもので、ヨーロッパの大富豪が所有しているはずだ。

(・・・なぜこんな所に・・・)

当然の疑問が頭を過ぎる。

こんな貴重な物を、持ち主が売りさばくとは到底思えない。

「・・・なるほど・・・」

宝石を受け取った方の男はそれをしばし眺めていたが、やがて体の向きを変え宝石を高く掲げた。

(・・・いったい何をしているんだ？・・・)

盗一の疑問をよそに、その男はしばらくその体制を保っていた。

「・・・ハズレの様だな・・・」

やがて、男は言った。

「ええ、そのようです・・・どうします？」

「・・・元の場所に戻しておけ。あくまで穏便にな。最近奴らがうるさくなってきている。本来ならそんな面倒なことはいらないだが、万一に備えるべきだろう・・・」

(元の場所に戻すだと?)

盗一の頭に次々と疑問が増えていく。

せっかく盗んだのなら、なぜ、再度の不法侵入などという危険を

冒さねばならないのだろう。

通常ならば、裏ルートで売りさばいてしまうのが普通だ。

それに、この連中はさつきから不審な行動が多すぎる。

特に、なぜ『宝石を掲げたまま固まる』などという間抜けな事をするのだろう。

（それに、奴らとは誰のことだ？）

ここまで考えた時だった。

盗一は、口を手で覆われ羽交い締めにされた。

そして、そのまま裏路地まで引きずり込まれていった。

「いったい、何を……………」

背後の暴君に向かって、盗一は抗議声明を上げようと試みたが、途中で再び口を塞がれた。

「……………」

背後の男は一言も声を出さない。

ならば、盗一も黙っているより他ない。

すると、さっきの男達の声がした。

おそらく、倉庫から出たのだろう。

こっちは来ないようで、声がだんだんと遠ざかっていく。

その声が完全に聞こえなくなつて、ようやく背後の男が口を開いた。盗一ではなく、無線に向かってではあつたが。

早口のフランス語だったので、何と言っているのかは良く分からない。

だが、最後に無線の向こう側から聞こえた『D・accord（了解）』という言葉だけは聞き取れた。

（何が『了解』なんだ……）

そう思いながら数分間待っていると、背後から足音が聞こえてきた。背後で、再びフランス語で会話が成された。やがて、後から来た方の男が盗一に話しかけた。

「黒羽盗一さんですね？」

流暢な日本語に盗一は面を上げた。

その男を見る。

外見は明らかに西洋人だ。

だが、あんな流暢な日本語の発音は根っからの欧米人には不可能だ。

「父が日本人でしてね。私自身も十才まで日本にいました」

困惑している盗一に、その男が説明した。

「申し遅れました。フランソワ・碇、ICPO特殊捜査官です」

彼との出会い。

これこそが、二世代に渡つて繰り広げられる壮絶な戦いの始まりだ

つ
た。

第四十七話 ICPO（後書き）

読者の皆様、お久しぶりです。

帰国後の膨大な宿題と格闘、それから再三の書き直し為、更新がすっかり遅れました。

すみませんでした。

お詫びの言葉もありません。

さて、その変更点ですが、次話を投稿しない事には説明できません。なので、釈明は次回にさせていただきます。ご迷惑をおかけしました。

では、この辺りで失礼します。

第四十八話 C o d e : 1 4 1 2

「ICPOですって？」

盗一は言った。

「ええ、そうです．．．．この通り」

フランソワ・碓と名乗った男は懷に手を入れ、身分証明を差し出した。

「．．．．立ち話もなんですし．．．．」

彼は、もう一人のICPO調査員に合図した。

「行きましょう。本部まで、案内します」

「．．．．．いつたい奴らは何だったんです？」

車に乗ってしばらくした時、盗一が訊いた。

「盗んだ物を返す計画を立てるなんて、ただの窃盗団とは思えないんですが．．．．」

さすがは、一千以上のマジックを開発し、三千以上のマジックにアレンジを加えて来ただけの事はある。

頭の回転速度は並ではない。

碓もそのことを感じ取ったのか、感嘆の声を上げた。

「ええ、その通りです。奴らは私たちが追っている組織の一員です」
碇は言った。

「謎だらけの組織でしてね．．．．．分かつているのは奴等の組織が世界規模である事、それとビッグジュエルと呼ばれる宝石ばかりを狙っていることです」

「ビッグジュエル．．．．．確か、世界でも有数な巨大宝石の総称．．．．．」

「そうです。中々に厄介な組織でしてね。侵入と逃走の痕跡を全く残さずに、犯行を成し遂げるんです。それに、奴等を追うようになったきっかけも、偶然なんですよ．．．．．二年前の『ルーブル事件』をご存知ですか？」

「ええ、知っていますよ．．．．．ルーブル美術館の裏通りで、一人のアメリカ人が通り魔に惨殺されたあの事件．．．．．場所が場所でしたから、よく覚えてます」

その事件がルーブル美術館の近くで起きた事と、アメリカ大統領が説明を求めて、直接フランスを訪れたことで、日本でも話題になっていた。

確か、未だ解決されていない筈である。

「その事件が何か？」

盗一が訊き、碇は神妙な顔をして答えた。

「表向きは確かにそうなっています。しかし、あの事件には隠された面があるんです。まずはルーブル美術館の宝石が偽物にすり替えられていたこと．．．．．」

盗一はポーカ―フェイスこそ崩さないものの、内心では驚いていた。
「それは奴等が？」

「ええ、すり替えられていたのはビッグジュエルだけだったので、間違いないでしょう。おそらく、アメリカ人男性はその現場を目撃した為に殺されたんです．．．．．」

まさに、藪から棒だった。

「．．．．．どうして、その事を発表しないんです．．．．．」

盗一が言い、碇は一層険しい顔をした。

だが、その原因は先程の盗一の質問ではなさそうだ。

「機密事項の二つ目は被害者のアメリカ人男性がレーガン大統領の遠縁に当たること………」

「！」

「三つ目は………」

碇はやや間を置いて言った。

「その現場に1カペイカ硬貨が落ちていたことです………」

「……なるほど………」

しばらくして、盗一が言った。

カペイカとはソビエトの通貨である。

嚴重なセキュリティの掛けられているルーブル美術館への侵入。

被害者は現役大統領の遠縁。

そして、現場には1カペイカ硬貨。

これらが示すところは………」

「その三つを發表しようものなら、冷戦が加熱して、両国間で全面戦争が勃発しかねない………」

「そうです。それに、それだけでなくフランスも^{とくに}進りを食い兼ねない………」

「いやはや、困ったものです………」

落ちていた1カペイカ硬貨は、犯人グループの所属する組織が、ソビエトに本拠地を築いている事を示唆している。

その組織に、遠縁とはいえ自分の肉親が殺されたのだから、アメリカ

カ大統領が黙っている筈がない。
ただでさえ険悪な両国だ。

即座に戦争だろう。

加えて、通常的手段を用いてルーブル美術館に侵入する事は、まずもって不可能だ。

これは、内部の手引きがあつた事を示している。

ルーブル美術館は国立美術館だ。

そうになると、フランス国家自体も、どうなるか分かったものではない。

すなわち、事態を丸く収めるには組織を解体しなければならない。
すると必然的に、それを目的としたICPO特殊捜査班が結成された事自体も、極秘にしなければならないことになる。

「なので、あなたは今非常に厄介な立場に立たされています」
碇が言った。

「申し訳ありませんが、あなたが取れる選択肢は二つです。FBIの証人保護プログラムみたく、別人になって隠れ住むか………もしくは………」

碇は盗一の方をチラリと見た。

「我々ICPOに入るか………どちらかです………」
沈黙が車内を支配した。

ポーカーフェイスの盗一が、何を考えているのかは分からない。
だが、彼の生き方を考えると答えは決まっている。

「………入りますよ、ICPOに。隠れていてはマジックができませんから………但し、出勤は不規則という条件つきですけどね………」

盗一は碇が渋い顔をするものと思っていたが、当の本人は微笑んでいた。

「構いませんよ。むしろ、その方が目眩ましになるかもしれない………それに………」

碇は声を落として呟いた。

「・・・・・・ひよっとしたら、あの役職が可能かも知れない・・・・」

パリ ICPO本部

「・・・・・・それにしても、ずいぶんと潜るんですね・・・・・・」

「

エレベーターの中で盗一は呆れた様に呟いた。

碇の後を付いて歩いたのだが、ここまで来るのが既に冒険だった。関係者以外立ち入り禁止のドアのセキュリティを解除し、中に入っただが、そこは部屋ではなく両側にドアが四つずつある短い廊下になっていた。

驚いている盗一をよそに、碇は計八つのドアの一つに近づき再びセキュリティを解除した。

その中を見ると、わずか１メートル先にまたドアがあり、そのセキュリティも解除すると中はエレベーターになっていた。

こんな迷路のようなセキュリティは初めて見た。

「まあ、トップシークレットですから」

錠があつさりと言つてのける。

慣れているのだろうか。

そんなことを考える内に、エレベーターの扉が開いた。

「こつちです」

盗一はただ錠に付いて行くだけだ。

しばらく歩く。

すると、再びエレベーターの前に来た。

「特殊捜査班自体はこの階に本部を構えているんですが、あなたにはもう少し下まで行ってもらいます。」

良いタイミングで、エレベーターのドアが開いた。

「・・・・・・1412?」

エレベーターを降りて所には部屋が一つしかなく、そのドアにはそのように書かれていた。

「Code:1412”ICPO設立当初のコードで『1412』」

は『囹捜査』を意味します。そして、この部屋は新たに計画された
囹捜査のために建造されたものです」

そう言っただアを開ける。
中は真つ暗だ。

「しかし、今までこの計画は可決されませんでした。なぜなら、こ
の計画に見合う人物が見つからなかったからです。今回可決された
計画案も『適材を見つけた後実行』という条件付きなんです」

碇がスイッチを入れたのか、電気がついた。

「これは、いったい……」

訳が分からない。

これが、盗一の率直な感想だった。

「これが、あなたの役職です」

そう言われて、盗一はもう一度それを見る。

まずまず訳が分からない。

碇が説明を続ける。

「ICPOの最高機密……」

碇も盗一と同じ方向を見た。

「怪盗1412号です」

盗一が見たもの

それは、後に世界を騒がせることになる怪盗の象徴

白い燕尾服とマントだった。

「・・・・・・・・じゃあ、怪盗キッドっていつのは・・・・・・・・」

父親の回想を聞いて思い当たったのだろう。

快斗がおずおずと言った。

「その通り・・・・・・・・」

「怪盗キッドはホワイトバードはブルーバードを誘き出すために、ICPOが仕組んだ囲捜査官だったのさ・・・・・・・・」

第四十八話 C o d e : 1 4 1 2 (後書き)

こんばんは、七夕夜想曲です。

進級してからというものの、桁違いに忙しくなっていました。
なので、これからは更新を一週間置きにしたいと思います。

申し訳在りません。

ご了承下さい。

さて、前回書いた『当初の予定』との違いですが、最初はエヴァン
ゲリオンのシンジのごとく、盗一がいきなり怪盗キッドに任命され
るという展開を予定していたのですが、論理的な思考を求める推理
系の小説でそれはまずい、ということに変更しました。

変更が幸を征したかどうかは、読者の皆様にお任せします。
下の評価からどんどんご意見をどうぞ。

では、また来週お目に掛かりましょう。

失礼します。

第四十九話 Be Natural

「Be Natural」……………そういうことですね……

「え？」

秀一の言葉にジョディが疑問の声を上げた。

快斗が補足説明をする。

「Be Natural」つまり“自然に”は『マジック界のプロフェッサー』と謳われたダイ・バーノンの格言ですよ」

それでも、まだ分からないらしい。

あまりに抽象的なのも問題ではあるが。

「怪盗1412号がICPOの差し金であることを組織から隠し、民衆にもそれを『ただの愉快犯』と思わせ、さらに地方警察から100%逃げる。これだけのことを『自然』と思わせないと、この囷捜査は成立しない。その為には、演技力、高い身体能力、心理学の知識、そして、それらを実践で活かすことのできる豊富な経験が必要になる。これらを掛け備えた人物。それが盗一さんだったというわけさ」

ようやく、納得したようだ。

すると青子が口を開いた。

「でもそんなことが本当に……………」

「可能だよ」

盗一が答えた。

「まず第一に、この囷捜査は直接奴らと接触するわけじゃない。それまで、何の障壁もなく犯行を繰り返していた奴らの前に壁を作つてやるだけだ。つまり私がビッグジュエルを盗むことで、奴らの計画に狂いを作り、綻びを生じさせる。その綻びから情報を集め、次第に奴らを追いつめていく。だから余裕を持ってさつき項目をクリアできる」

青子に話し終えると、盗一は再び皆の方を向いた。

「これが『怪盗1412号計画』の特徴であり、他の囃捜査と異なる点です。時間は掛かるが、穏便かつ確実に事を進めることができ、世間の目も眩ましやすい。この捜査は穏便さと正確さが第一ですからね。実際、失敗する事は殆どありませんでした………たっ
た一回だけ、ある人物を相手にしたとき以外は………」

「誰です、それは？」

平次が訊いた。

「新一君のお父さんだ」

全員が新一の方を見た。

「それは、長くなるから後にしよう………穏便に ソ連とアメリカを刺激しないように 捜査を進めることができました。しかし、後手に回る作戦の為、得られる情報は少なく、恐ろしいまでの時間が掛かりました」

「どれくらい？」

快斗が訊いた。

「通常の十倍の時間はかかっただろうな。それでも、確実に霧は晴れていった。奴らの目的『不老不死』と『パンドラ』について突き止め、極秘裏に『パンドラ』の回収にも成功した。だが、十年経つても、組織を潰すのには至らなかった」

怪盗1412号初出没から十年。

全員がこの数字の意味に気が付いた。

「体制が整わない内に奴らが、あなたを消そうとしたんですね」

「ええ、いい加減目障りになったんでしょう。そのため私たちは善後策を練りました。それは、奴らに、自分たちの思惑通りに事が進んでいると錯覚させること。つまり、私が『事故死』することです
全員が息一つ漏らさずに聞き入っていた。

氷山の見えない部分。

それが明かされつつあった。

「まず最初に、私は『パンドラ』を工藤優作さんに預けました。彼

とはふとしたきっかけで知り合い、私たちの計画によく助言してくれましてね。彼は裏では協力しつつ、表では『怪盗キッドを捕まえる為に警察に協力する若手推理小説家』というポーズを取ってくれました。これが助かったのは言うまでもないと思います。つまり、彼は事情を知りながらにして『パンドラ』を預けても安全な域に彼は居たのです。我々は彼にそれを預け、姿を眩ます準備を整えました。そして……」

その直後、ドアからもう一つの声が聞こえてきた。

「世間から姿を眩まして、陰で捜査を続行する。盗一さんはそのポジションに移った」

その声の主は優作だった。

「奴らを叩けるまでに情報を揃える……陰で人の役に立つポジションにね……」

「……じゃあ、俺を巻き込んだ理由は何なんだ？」

快斗は怪訝な顔をして訊いた。

「部屋に隠し部屋を作っていて、しかもそれは時が来れば開くようになっていた。裏で捜査をして奴らを潰せるなら、どうして俺を巻き込む必要がある？」

「そのことか……」

「予定外の事態がなければ、お前が組織壊滅の引き金を引くはずだったんだ」

「え？」

怪訝な顔をしている快斗に優作が言った。

「そう。その事態はよりによって『引き金』を引く予定の数ヶ月前に起きた……」

さらに続ける。

「組織の再統合、そしてほぼ同時期に起きた新一の幼児化……
・これが計画を狂わせた……」

第五十話 カセットテープ

「俺が『引き金』だった？」

快斗は怪訝な声を上げ盗一を見た。

「どういうことだよ、親父……」

盗一はゆっくりと快斗に向き直り、話し始めた。

「目の上のこぶだった私が死ねば、奴らの仕事に支障をきたすものはない。つまり、以前の様にどうやって私を出し抜くかを考えずに済む分、楽に仕事ができる。そんな事を長年続けていたいたところに突然『怪盗1412号』が復活したらどうなると思う？」

全員が言わんとしている事に気付いた。

「焦って、何としてでも消そうとする……親父達はその隙を狙うつもりだったのか？」

「その通り、穩便に事を進めるには、その方法しかなかった……
・・・とは言え、計画通りにはいかなかったがな……」

その横から優作が口を挟んだ。

「二大組織の統合……これが計画の歯車を狂わせた最大要因です」

後を受けて盗一が話す。

「当初の予定は『怪盗1412号』の復活によって混乱した奴らを一気に叩く、というものでした。これほど奴らに隙を作る事ができる事件はありませんからね。だが、『怪盗1412号』の復活より前に奴らの組織が別の組織と統合……正確には再統合しました。これでは迂闊に手出しができません。再統合を果たした事によって、組織がどの程度拡大したか。それが分かりませんでしたからね……
・・・だが……」

盗一は快斗を見た。

「同時にこちらにとって都合が良いアクシデントも起きました……カセットテープが故障していたことです」

盗一が言い、快斗が即座に反応した。

「カセットテープって……あの隠し部屋のか？」

八ヶ月前、初めて隠し部屋に入ったときに流れていたカセットテープ。

それは古すぎた為、何を言っているのか碌に聞けなかった。

「あのテープにはこう吹き込まれていた……」

「久しぶりだな、快斗。わたしの本当の正体を教えよう。私は怪盗キッドなのだ。怪盗キッド、正式名称は『怪盗1412号』。詳しく話すと長くなるので簡略化して話そう。これはICPOの捜査官だ。この計画はもう少しで完了する。そして、その計画を成功させる最後のカギはお前だ。今から言う通りにしなさい。どれでもいい、どこかの宝石を盗むという予告状を作って、そこにそれを送る。そして実際にそれを盗みに入る。嫌われ役を負わせてすまない。だが、私たちが追っている組織を解体に導くにはそれしかないんだ。心配はいらない。お前ほどのマジックの腕前、ミステレクションのテクニックがあれば必ず成功する。健闘を祈るぞ……」

「ミステレクション？」

青子が疑問の声を上げた。

快斗が答える。

「観客の注意をマジシャンの秘密動作から逸らすテクニックの総称さ。でもそれは後回しだ」

快斗は一方的に会話を打ち切り、驚きの目で父親を見据えた。

「親父は、将来どうなるかも分からない息子に作戦の是非を委ねたつてのか!？」

盗一は全く動じる事なく答える。

ただ短く、

「そうだ」

と。

「俺がテープの通りにしなかったら　まあ、結果的にそれが幸を
征したわけだけど　もしそうだったらどうするつもりだったんだ
よ？」

それを聞いた盗一は薄い笑みを浮かべて言った。

「子供を信じる事ができなければ、親失格さ。お前ならやってくれ
ると信じていた」

第五十話 カセットテープ（後書き）

誠に勝手ですが、来週の更新は期末試験の真っ只中ですのでお休みさせていただきます。

第五十二話 和訳の齟齬

「そして、もう一つのイレギュラー・・・・・・・・・・」

盗一は新一の方を見た。

「高校生探偵工藤新一君の幼児化」

自分たちが関わっていた事件の壮大さ。

その場の全員が息一つ立てずに聞き入っていた。

少しずつ糸が解れていく。

今、話題に上っている人物に言わせれば、それが探偵の楽しみだと言っただろう。

「これも、私たちにはメリットとデメリットをもたらしました。デメリットは言うまでもありません。追っている組織の危険度が増したことです。そして、メリットは新一君の持っている情報が工藤優作さんを通じて、我々の手の中に入ることです」

すると、新一は眉をひそめた。

そして、優作に言う。

「おい、父さん。それは初耳だぜ」

涼しい顔で優作は答える。

「そう、目くじらを立てるな。組織の大きさについては盗一さんからよく聞いていたから、お前を海外に連れ出せない以上、情報提供をして早めに組織を潰すのが得策と見たのさ」

「・・・・・・・・なるほど。あの時に言っただI C P Oの知り合いつてのが、盗一さんだった訳ね・・・・・・・・」

新一は、両親に反対して日本に残ると言った時のことを思い出していた。

あの時に気づくべきだったか・・・・・・・・

「優作さんから新一君の幼児化を聞かされた後、我々は情報を集める為に日本にもどり、そして、私を含む幾人かは新一君の周りの警護をしました。その間に情報を集めることができたのは言うまでも

ありませんけど。そういったときでした。新一君達が組織でジンとウォッカと呼ばれる人物に遭遇し、杯戸シティホテルで一悶着あったのは」

話がだんだん最近に近づいてきた。

「彼らの視点から見て何があつたかは周知のことだと思つので割愛させていただきますが、私もその現場にいて、探偵バッジの電波を傍受して彼らのやり取りを聞いていました」

「博士に盗聴防止機を付けさせないといけませんね……………」

新一が冗談めかして言つた。

「いや、付いていない方がいいと思うよ。現に役に立つたからね……………」そのやり取りを聞いている中でAPTX4869のデータが入つたMOが作業員のツナギの中に入つていると言つことを聞きました」

と言つことは……………」

「私はそれを回収するために、ジン達が部屋から去つた後で酒蔵に侵入し、目的を達しました。後は知つての通りです。私はそのMOを宮野志保 当時の灰原哀に届けました。時が来るまで口外しないようにという書き置きを添えて……………」

それを聞いて蘭が驚きの声を上げた。

「でも、燃えさかる炎の中に入るなんて……………」

新一が答える。

「盗一さんじゃないとできなかっただろうな……………」

さらに続ける。

「炎の中からの脱出を幾度と無く演じてきた盗一さんだからこそできたんだ。そうでないと、炎の中に飛び込むなんてことは、素人には百パーセント不可能だからな……………」

「さて、ここであなた方FBIの登場です」

盗一は秀一とジョディの方を向いて言った。

「それからしばらくして、FBI、さらにはCIAも組織を追っているという情報が入ってきました」

盗一は続ける。

「一時期は、我々の役目は必要ないのではないかという意見も出ました。我々が何もしなくてもFBIとCIAが組めば確実に奴らを追いつめるはずだからです。しかし、その内、彼らは持つておらず我々だけが持つている情報があることが発覚します。それは組織の海外支部が存在していることです」

秀一がそれに応じた。

「ええ、確かに我々は支部の存在を知りませんでした。それを知ったのは日本にある本部を解体に追い込んだ後ですからね……………」

「

盗一は

「そうでしたか」

と言いつ先を続ける。

「それを考慮したとき我々の今後の方針が決まりました。支部を先に叩いては奴らに怪しまれFBIとCIAの捜査に支障をきたす。だが、手をこまねいているのも釈然としない。ならば、支部を徹底的に洗い出し、本拠地を彼らが叩くと同時に攻めればいい。我々ICPOはそう決議しました」

「じゃあ、奴らの支部は……………」

ジョディが言った。

「三日前に壊滅。跡形もありませんよ……」

「以上が」

盗一はやや間を取った。

「長い年月を掛けICPOが裏で取っていた行動のすべてです……」

これほどの大きな立ち回り。

これを誰にも悟られることなく行っていたこと。

その場の全員が呆氣にとられていた。

「じゃあ新一と志保ちゃんを助けたのも親父だろ？」

快斗が言った。

「そう考えると、疑問が全て解決する。まず変声機に関して。あの謎の人物が親父なら、変声機なんて必要ない。どんな声でも自由自在だからな。よってスイッチが切れていた事も説明が付く。あの変声機は奴らを攪乱するための物だった。生駒山の件に関してもまた然り。俺達の捜査の手助けになればと思ったんだろ。そもでもって最後に新一を助けたのも親父以外に考えられない。あんな高い所からの救出なんてハンググライダーでもない不可能だからな」

盗一は感心したようだった。

「ほう、新一君達のおかげで推理力が上がったようだな。その通りだ」

「へー、FBIにCIAさらにはICPO……」

快斗は驚きのため息をついた。

新一もそれに同意するかのように口を開いた。

「ああ、俺も知った時は驚いたぜ……米花総合病院でだけどな……」

「……あん？」

何気なく聞いていたが、最後の部分が引かなかったのか平次が口を開いた。

「米花総合病院やと？」

新一が説明する。

「『灰原』が入院していたとき元太達が見舞いに来ただけ、その時に元太が外人とぶつかってこう言われたんだとさ。『お元気ですか』ってな」

「勿体ぶらんとはよ言えや、それがどないしたんや？」

平次がカリカリして言った。

「これはフランス語が関係するんだ。フランス語で『大丈夫ですか』は『C a v a ?』だけど、これは『お元気ですか』という意味で使われることの方が多いんだ。つまりその人は日本に来たばかりで訳を一通りしか覚えてなかったのさ。それで思ったんだよ。組織を追っている俺達の周りに、日本に来て間もないフランス人が居るって事は、ひょっとしたらこの事件にはICPOが関わってるんじゃないか、ってね」

「ほー、なるほどな……」

だが、優作が口を挟む。

「よくできた、と言いたところだが、もっと早く気付くことができたはずだぞ、新一……」

「え？」

優作は懷から例の変声機を取り出した。

「父さんがもってたのか？」

だが、それには答えず、それを裏に向ける。

「No.931615だ……」

優作は変声機の製造ナンバーを指して言った。

「・・・・・・・・！」

「気付いたようだな・・・・・・・・」

新一は頷いて言う。

「9、3、16、15で区切って考える。そして、それに対応するアルファベットを当てはめる・・・・・・・・だろ？」

9、3、16、15

それぞれに対応するアルファベットを当てはめる

つまり、アルファベットの九番目、三番目、十六番目、十五番目

浮かび上がる文字は・・・・・・・・

I C P O

第五十二話 闘いの後【壱】

翌日 阿笠邸

「博士、コーヒー炒れてちょうだい……」

そう言うが早いか、志保はソファーに沈み込んだ。

「進み具合はどうなんじゃ？」

そう訊きながらカップを取り出し、薄めに調節したコーヒーを炒れてやる。

角砂糖は三つ。

通常なら多いかもしれないが、疲れた体には丁度良いだろう。

「とりあえず一段落つてとこかしら。でも、先は長いわ……」

「

期待しておるよ『志保君』」

志保が現在取り組んでいるのは、APTXシリーズの平和利用だ。中々に骨の折れる作業らしく、現に志保の顔には疲れの色が見てとれた。

それを追い払うかのようにカップに口をつける。

その時、インターホンが鳴った。

「はて？誰かな……」

博士は玄関に向かったが、すぐに戻って来た。

一人の男を連れて。

「志保君、君にお客さんじゃ」

入って来たのは赤井秀一だった。

「君には謝らなければならない」

促されて席に着くや否や言った。

「お姉さんを守ってやれなくて、本当にすまなかった．．．．．」
そして、深々と頭を下げる。

志保は言った。

「いいのよ、過ぎた事なもの．．．．．それにお姉ちゃんの仇は
とってくれたんだし．．．．．」

それでも、彼は頭を下げてたまだった。

「．．．．．頭を上げて．．．．．義兄さん．．．．．」
にい

そう呼ばれた男は驚きのあまり顔を上げた。

さらに、志保は言う。

「お姉ちゃんの恋人だもの。そう呼ぶのが自然でしょ？確かにいろ
いろあったけど、それは変わらないわ。だから．．．．．」

志保は手を差し出した。

「これからは兄妹として生きていきましょう。これからもよろしく、
義兄さん」

二人は数年振りの真の笑顔と共に、互いの手を握り合った。

「．．．．．新一？」

病室のドアを開け蘭が入って来た。

「何してるの？」

食事用のプレートをベッドの柵に取り付け、当の本人は上半身を起
こしていた。

その上には封筒が三つ、そして同じ数だけの便箋が置いてあった。

「ああ、これね．．．．．」

そう言つて、その内の一つを蘭に渡す。

蘭は怪訝な顔をしてその文面に目を通していたが、読み終える頃に

は微笑んでいた。「そつか……あの友達には何も話してないもんね……」

「ああ、悪いことしたな……でも、今全てを話すわけにもいかない。複雑すぎるからな……」

「そうね、……十年後か……」

蘭は便箋をもとに戻した。

「まあ、こういうやり方もありなんじゃない？」

そして、新一に詰め寄る

「でも『誰かさん』はわたしにも未だにすべてを話してくれないのよねえ……」

「あ、いや、それはだな……」「分かってるわよ、どうせ、こんな場所じゃ恰好がつかない、とも思ってるんでしょ？意地っ張りなんだから……」

「仰せの通りで……」

「ま、期待してるわよ……」

そう言つて、蘭は暫く考えるような仕草をしていたが、やがて新一の頬にキスをした。

「……まあ、今の段階ではここまでよね……」
真っ赤になつている新一を尻目に

「部活があるからまた後でね」と付け足して部屋を出ていった。

（さて、どうするか……）

部屋に残された探偵が困惑していたのは言うまでもない。

第五十三話 闘いの後【貳】

「・・・・・・・・さてと・・・・・・・・」

長い話しの後、盗一は自分の息子にに向き直った。

「父さんは母さんとフランスで過ごすつもりだ。日本国籍は抹消されているからな・・・・・・・・お前はどする？」

快斗は大して考えるまでもなく、即答した。

「決まってるだろ、日本に残る。マジックの本場アメリカなら悩むとこだけど、フランスじゃあね・・・・・・・・」

と言いながらも、青子の方をちらりと盗み見る。

だが、盗一はその一連の動作を見逃さなかった。

そして、薄く笑みを浮かべた後

「・・・・・・・・まあ、そういう事にしておいてやろう・・・・・・・・」

と、息子に大打撃を与えた。

羞恥心と怒りで真っ赤に染まりながらも、快斗が応戦を試みる。

が、あまりの感情の高ぶりに脈絡のない単語を数個連発する事しかできなかった。

「青子ちゃん。『これから先』快斗のことを頼むぞ」

とどめを刺した。

「………ほんで、親の不在をいい事に、二人は昨晚から朝に掛けてぴったりとくつついて、離れることがなかったとさ………」

「うるせえ！」

平次の言葉を遮って、快斗が叫んだ。

だが平次は続ける。

「せやけど、大したことやないんやろ？今までも機会をうかがっては『あいびき』………」

「黙れ！黙れ！黙れ！」

「ここまで怒るんなら、凶星やな。『お熱い』ことで………」
「………これ以上一言でも発してみろ、平次。すぐさま『消して』やる」

『Dis appear』なのか『Kill』なのか。

通常なら必然的に後者の意味だが、マジシャンである快斗なら前者も可能だ。

「中森の姉ちゃんの事になるとすぐ『熱く』………」
「冗談や冗談！」

快斗がスナップ・フィンガーのポーズをしたのを見て、平次は慌てて言った。

本当に消されてはかなわない。

手を元に戻した快斗はここぞとばかりに応酬する。

「そっちこそ、どうなんだよ？」

「何のこっちゃ？」

天然かわざとか　おそろく前者だろう　平次は訊き返した。

「とぼけるな。お前の和葉ちゃんに対する態度を見れば一目瞭然だ。前までは和葉ちゃんに何か頼まれる度に嫌そうな顔してたけど、今は、何か言われるとホイさとばかりに従うじゃねえか」

通常ならば顔を赤くするなり、言葉に詰まるなりする所だが、この

鈍感男は平然と次のように言った。

「なんや、気付いとったんか。確かに和葉と付き合いよるで……
・お前に見抜かれるとは思わんかったけどな……………」

「宝石の鑑定を一瞬で済ます俺の目を甘くみるなよ……………ん
で、いつ告白したんだ？」

復讐が完全に空振りに終わり、快斗が気の抜けた声で訊いた。

「お前の親父さんに会う前やな。病院の屋上でストレートに」

「……………お前な、学校の屋上ならまだしも、病院の屋上って
なんだよ……………よくOKしてもらえたな……………」

「悪いんか？」

「当たり前だ！」

その時部屋のドアが開いた。

忘れていたがここは快斗の部屋である。

「快斗、和葉ちゃんと買い物に行くから付いて来て」

「平次、そうゆうことやから付いて来て」

青子と和葉が顔を覗かせた。

快斗が代表して、平次と共通の疑問を口にする。

「なんで？」

女性陣二人は謀ったかのようなタイミングで答える。

「荷物持ち！」

翌日、平次と快斗は足腰が立たなかったとか何とか……………

第五十四話 闘いの後【参】

二週間後・・・・・・・・

「『二大組織に対する三大機関』『為政者の研究から派生す二大組織』『二世代に渡る捜査と陰謀』その他諸々・・・・・・・・」

新一の病室だった。

快斗が持ってきた新聞の見出しを端から口に出している。

新聞には、壊滅した組織の特集が組まれており、各紙の半分以上をその記事が占めていた。

「ほんでも、何でも今まで記事にならんかったんや。警視庁が握りつぶしたんかと思っただわ」と、平次が言った。

「ICPOがアメリカ政府に事の次第を話して、ロシアとアメリカが和解するのを待ってたんだってよ。いきなりアメリカ政府の耳に入りでもして、冷戦が加熱したら元も子もないからな」

そう、新一が答えた。

隣には当然だが蘭がいる。

「第三次世界大戦の防止っちゅうわけか。ICPOは目的を達したわけやな」

「ああ、これで事件は本当に終わったんだ・・・・・・・・」

そう言つて新一は伸びをしてた。

そこに快斗が不意打ちを掛ける。

「お前の事も出てるぜ、新一。『陰で動いていた平成のホームズ』ださ」

「・・・・・・・・なんて書いてある？」

「『ここ半年、消息を絶っていた『平成のホームズ』こと工藤新一君（１７）が、その間今回の事件の主犯と思われる組織を追っていたことが昨日発覚した。警視庁によると、工藤君は組織の一員に毒薬を飲まされ体が幼児化し、身を隠す必要に迫られたとのこと。し

かし、それにも関わらずFBI等と協力して捜査を続け、傷を負いながらも逃亡していた最後の構成員を逮捕に追い込むなど、目覚ましい活躍をした模様である。警視庁目暮警部らは彼に警視総監賞を申請している。弱冠17才の名探偵。今後の活躍を期待したい。》
だつてよ。良かったじゃねえか、新一！」

だが、新一はあまりうれしくないように見えた。

「じゃあな、また来るぜ」

快斗と平次は部屋を出ていった。

「『また来る』って……ひょっとして、新一、あの二人に知らせてないの？」

「まあな」

「どうしてよ？」

「今日ぐらい邪魔されずにお前といたかったんだよ……退院したその日ぐらいだな……」

そして、病院を出る準備に取りかかった。

つまり今日は退院の日なのだ。

荷造りをしながら、蘭に話しかける。

「ってなわけで、今晚空いてるか？」

「え？……うん、空いてるけど」

「決まりだ。飯でも食いにいこうぜ……今夜八時に……」

「」

フランス マルセイユ

あるバーに一人の男が入ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いらっしやいませ・・・・・・・・・・工藤優作さん」
店のマスターが言った。

「・・・・・・・・・・ばれましたか・・・・・・・・・・」

策を見抜かれた優作は変装を解いた。

「さすがは、盗一さんだ。なぜ分かりました？」

「ははは、私を騙そうと思うなら胸ポケットの万年筆は隠すべきですよ」

店のマスター、盗一は言った。

つまりここは盗一が経営しているマジックバーである。

「うむ、抜かりましたな・・・・・・・・・・」

「私も同じように正体を見破られましたからね」

盗一は、長さ七センチ、幅一センチ程の四角い棒を取りだした。
表には6と書かれている。

それを裏返した。

そこには9と書かれている。

「足すといくらですか？」

「15」

棒を一撫でする。

すると6と書いてあった所に15へと変化した。

裏も同様、9が15になっている。

「この動作をカードでしている所を、見咎められ、正体を見破られた・・・・・・・・・・何たることか・・・・・・・・・・」

病院で優作が盗一の変装を見破ったのはこういうことだ。

「・・・・・・・・それで、何か問題でも起こりましたか？遠路遙々日本からいらつしやるとは・・・・・・・・」

「いえいえ、日本の新聞を持ってきただけです」

盗一はグラスを磨いていた手を止めた。

「それは興味深い・・・・・・・・」

盗一はそれを手に取った。

「ようやく終わりましたね・・・・・・・・新一君の怪我はどうです？」

「すっかり良くなりましたよ、今日退院です」

「それは良かった・・・・・・・・」

優作は出されたコーヒーを一口啜った。

「多分今頃は、蘭君と食事でもしてるんじゃないですかねえ・・・・・・・・」

「」

壁の掛け時計が正午を知らせた。

エピソード

米花センタービル 展望レストラン

この屋上には、世界的大怪盗の名を冠したレストランがある。見るからに高級で、とても学生の入る場所とは思えない。

だが、窓際の一番いい席に座っているカップルは高校生だ。

さらに、男の方は店名に相反する探偵と言う肩書きを持つ男である。しかし、黙っていればそんなことが分かるはずもなく、結果として、この場と雰囲気にも最もお似合いなのは彼らだった。

工藤新一と毛利蘭。

彼らは店内にいる後数組のカップルの中でも一際輝いていた。

それもその筈、今夜は特別な夜になるはずだから。

「さてと……………」

席に着くや否や、新一が口を開いた。

「最初に言わなきゃならない事がある……………」
「ただいま」
「え？」

蘭は怪訝な顔をして、首を傾げている。

「前にここで“コナン”が『待っててくれ』って言っただろ？だからだよ……………」
「ただいま」それから、待っててくれて『ありがとう』……………」

蘭は驚いたようだ。

だが、それも束の間、すぐに微笑んでこう言った。

「相変わらず気障なんだから……………」
「おかえり」……………」

その後、二人は他愛もない話しをしながら、食事を楽しんだ。
コナン時代の裏話、新一が不在の間の高校のこと、盗一を始めとするICPOの働きかけで留年を免れたこと、それでも特別補習があるらしいこと、など。

新一は、ここに呼び出した本来の目的を忘れるほどに話し込んだ。
だが、忘れるわけにはいかない。
デザートを食べ終わり、ついにその時が来た。

「蘭・・・・・・・・・・」

そう言っ、ラッピングされた小さな包みを手渡す。

「・・・・・・・・何？」

「開けてみて」

ゆつくりと包みを解く。

やがて、小さな箱が現れた。

それをも開ける。

「これって・・・・・・・・」

新一が頷き、そして言った。

「好きだ、蘭・・・・・・・・」

「・・・・・・・・バカ・・・・・・・・」

しばらくしてから、蘭が言った。

言葉を発しながら泣いていた。

「いつまで待たせたら気が済むのよ・・・・・・・・ずっと待ってたんだから、いつか新一がそう言ってくれるのを・・・・・・・・」

蘭はさめざめと泣き続けた。

だが、それは今までのような不安、寂しさから来る物でも、安堵から来る物でも、ましてやそれらが入り交じった物でもない。純粹な喜び。

これ以上ない幸福から来る物だった。

「わたしも大好き、新一・・・・・・・・それからね・・・・・・・・」
「いたい何だろうと身を乗り出している新一の目の前で、蘭はもらったばかりの指輪を左手の薬指にはめた。

「・・・・・・・・もう一つ、新しい約束・・・・・・・・」

新一は驚いた様子だったが、すぐに微笑んでこう言った。

「なんで、いつもお見通しなんだろうな・・・・・・・・」

ポケットからもう一つ箱を取り出す。

「実はそれペアリングなんだ・・・・・・・・」

箱を開け、自分も左手薬指にはめる。

「もちろん、喜んで約束するさ・・・・・・・・」

「夢みたい・・・・・・・・」

帰り道、蘭はポツリと呟いた。

二人は夜風に当たりながら徒歩で家路に着いていた。

「夢みたい……」

もう一度呟く。

今度は左手を眺めながら。

「夢じゃないさ……」

新一が言う。

「じゃあ、証拠を見せて探偵さん？」

そう言いながら、蘭が顔を新一に近づけた。

目を閉じている。

それだけで探偵は悟ったようだ。

「愛してる、蘭……」

二人の唇が重なった。

世界に一つ愛が増えた日の夜

その恋人達の遥か上には

金色の丸い月が出ていた。

奇術師の予言
【完】

エピローグ（後書き）

こんばんわ、七夕夜想曲です。

更新が飛んだ上にいきなり完結してすみません。

『闘いの後【参】』と『エピローグ』は続きのような感じですのでこのように一度に更新しました。

『なぜ?』と書いている方に……

説明しましょう。

第五十四話の終わり、パリ時刻正午となっています。

ここから時差を計算すると日本時刻は午後八時。

つまり、新一と蘭が食事を始めた時刻となるのです。

お分かり頂けたでしょうか。

さて、本編は完結ですが、この後に後書きを書こうと思います。

忙しいものでいつになるか分かりませんが、今月いっぱいまでには書こうと思います。

ではその時にお会いしましょう。

失礼します。

あとがき

あとがき

【初心忘れるべからず】

この言葉の意味は周知の通り《ある物事を始めた時の純粋な気持ちを忘れるな》ということである。何か新しいことを始めてしばらく経つと、その大元は何だったのか……。時に分からなくなるときがある。この言葉はそれを危惧したものであろう。だが、何年前だったろうか、この言葉には別の意味があるという文章を読んだ。

その別の意味とは《初歩の醜惡な芸を忘れるな》ということである。

ただ闇雲にやっても仕方がない。時々立ち止まって、自分がどれだけ成長をしたかを確かめなければならない。それらの過程の中で比較となる物が『初歩の芸』である。故に忘れるな。これがもう一つの意味である。

今回の作品を改めて見直してみると、《初歩の芸の醜惡さ》がよく分かる。そこを分析し、反省し、次に生かすこと。これは、処女作を書き終えた作者が第一にしなければならないことだろう。今は終わりであると同時に始まりでもあるのだ。

『ここまでお付き合い頂いたすべての読者の皆様、的確な助言をしてくださった先生方に心から御礼を申し上げます』

さて、後書きのエッセイはここまでで、以後は堅苦しい言い回しは抜きにしましょう。

感想、評価をしてくださった読者様、もしくは先生方、改めてお礼申し上げます。感想がどれだけ私を励まし、また評価がどれだけ参考になった事か。この感謝の気持ちを言葉で言い表すことは不可能です。我ながら芸の無い言葉ですが、ありがとうございました。

話は打って変わりました、ここで本文の補足を

《バイスクル(Bicycle)》

U・Sプレイング社より発売中のトランプ。世界中のマジシャンが愛用している。

《クロースアップマジック》

こういえば分かりにくいが『テーブルマジック』とほぼ同意義。テーブルを囲んで手元で見せるマジックの総称。日本では前田智洋氏が大成し、『クロースアップマジシャン』と呼ばれている。

《岐阜のマジシャン》

Dr・沢こと沢浩氏のこと。日本屈指のマジッククリエーター。下記のダイ・ヴァーノンに絶賛された。またMr・マリックの師匠でもある。著者が最も尊敬するマジシャンの一人。

《ヨハン・ネポマク・ホフジンザー（Johann Nepomak
Hofzinsner）》

現代カードマジックの基礎を築いた人物。本文で述べた通り、時代背景により活動当時は注目されなかった。しかし、彼の功績は偉大で、その技術は今もマジックの中に深く根付いている。

《ハリー・フーディーニ（Harry Houdini）》

脱出を得意とするアメリカの代表的なマジシャン。それ故に『脱出王』の異名を持つ。日本では余り有名ではないが、アメリカでは『マジシャンと言えばフーディーニ』といったも過言ではない。その為、洋画の中でマジックをする人がいると『フーディーニのようだ』と喩えられる。だが、日本語字幕や吹き替えでは『マジシャンのようだ』と訳される。

《石田天海》

日本の代表的なマジシャン。彼の開発した『天海パーム』というテクニクは世界中のマジシャンに衝撃を与えた。

《ダイ・ヴァーノン（Dai Vernon）》

二十世紀を代表するマジシャンの一人。『マジックの神様』や『プロフェッサー』などと呼ばれる。彼がアレンジしたマジックは『ヴァーノンタッチ』と呼ばれ、独特の雰囲気帯びる。『Be Natural（自然であれ）』や『Be Yourself（貴方自身であれ）』等、格言も多い。

『dai vernon』を“youtube”で検索すると彼が演じた『カップアンドボール』というマジックの演技を見ることが出来ます。

最後に、今は亡き歌手、村下孝蔵氏に感謝の意を述べます。
ハンドルネームをアルバムタイトルから頂いたばかりか、作品を書くに際し、未だ経験せぬ恋愛に関してどれだけのインスピレーションを歌詞中より得たことか。誠にありがとうございました。

七月十六日 七夕夜想曲

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849c/>

奇術師の予言

2010年10月10日14時54分発行